

この素晴らしい世界にもナワバリを！

黄金の鮭

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オクタリアンとの戦いを終えた3号だったが、彼の元へ謎の電波が届く。

たどり着いた場所では出会ったのは、3号の住む世界では遙か昔に滅びたはずの陸の生き物と、自分の世界にいるはずの海の生き物だった。

目次

茶色のインクリング	1
頼れる友人	10
キャベツ収穫の裏で	19
キャベツ収穫の裏で	29
木彫りのクマサン	38
バクダンと爆裂魔法	48
人間ではない生き物	57
テツパンのアルバイトをしよう	66
アクセルの散歩	76
ベルディアダイレクト	85
ヒカリバエが来る	95
ウイズ印のタンサンボム	105
不意打ちのセオリー	115
秘密のモグラ叩き	125
危険なモグラ叩き	135
金イクラのハコビヤ	144
幽霊屋敷へお引越し	154
機動要塞と共に	163
この素晴らしい世界にもナワバリを！	173
最後に勝つのはどっち？ シャケ vs 冒険者	183

茶色のインクリング

インクリングが支配する地上へナワバリを広げるべく、地上の重要なエネルギー源である

デンチナマズを奪いさり、巨大な兵器を作り出し地上への侵攻を企むオクタリアン^{タコ}。

オクタリアンの侵攻を止めるべく、New!カラストンビ部隊3号は1号や2号、アタリメ司令と協力し、全てのデンチナマズを取り返すため、オクタリアンと激しい戦いを繰り広げたのは、もう3年前の出来事だ。単細胞で楽観的な性格のインクリング達は、3年前に起こったこの戦いをすっかり忘れて、ハイカラスクエアでいつもと変わらない日々を過ごしていたが、3号の戦いはまだ続いていた。

現在、3号は突如発生した謎の電波の調査を行っている。ただ、電波といっても街中の通信回線を滅茶苦茶にしたり、インクリングに悪影響を与えるものではなく、3号のスマホに直接サインを

送る、いわゆるいたずらや嫌がらせのような電波だ。ただ、いつでもどこでも電波を送信してくるので、送り主はとても危険な状態で、直接助けを求めている可能性を考えた3号は、New!カラストンビ部隊の誰かと発信源に向かうことにした。とりあえず1号と2号をメッセージアプリで調査に誘うと、すぐに返信がきた。

「ゴメン！ これから仕事が忙しくなっちゃって行けそうにない！」
「アタシも1号と同じく仕事だわ〜 ごめんね3号」

2人の本業はアイドルなので予想はできていたが、1号と2号は仕事で忙しいそう。3号はアタリメ司令と最近加入した4号と8号に期待を込めてメッセージを送る。しばらくして、アタリメ司令から返信が送られてきた。

「まじっの らいぶに いきます atarimeyosio」

1号と2号のライブに行くそう。高齢の司令は慣れないガラケーでメッセージを送信してくれたのだろう。3号は今度ガラケーの使い方を教えに行くことを予定に入れた。

その後、4号と8号は二人でアルバイトをするようで、3号が単独

で調査することが決まる。だが、諦めきれない3号は顔なじみのブキ屋にサポートを頼み込み、ブキの輸送をお願いした。かな

り遠い場所への調査になるので、数多くのブキを輸送してもらえるのはありがたい。電波がはつきりしているので、送るだけなら朝飯前だそう。

大きなスーツケースにありつたけのギア(衣服)とブキを詰め込み、遠く離れた電波の発信源へ向かう。インクリングの移動手段である、スーパージャンプを使えば目的地まで一瞬で到着するの

で、移動時間が長いわけではない。鼻歌を一曲歌っていれば到着するだろう。

到着しなかった。鼻歌が三曲目に入った段階でおかしいと思ったが、どうやら間違った場所にジャンプしてしまったようだ。

こんなことは生まれて初めての出来事だが、すぐに再度目的地めがけてジャンプしようとしたその時、3号の後ろにいる何かから声を掛けられた。イカになったまま振り向くと、なにやら大きな

インクリングが3号に話しかけているようだが、3号はそのインクリングが話す言葉がさっぱり理解できなかった。ただ、ハイカラスクエアでも見かけないような変わった服に、滅多にいないである

う銀色の長いゲソがとてもイカしていたので、記念に写真を撮ることにした。スーツケースからゲソを使って器用にスマホを取りだし、1枚写真を撮る。……上手く撮れた。

銀色のインクリングは目の前のスーツケースを器用に持ったイカに写真を撮られたことに驚いているようだが、3号がここにいる理由も無くなったので、イカした銀色のインクリングに感謝し

て、目的地を目指してジャンプしようとする。しかし、今度は頭が急に痛み出し、ジャンプを断念。思わず頭を抱えるが、痛みはすぐに引いた。すると今度は、ひっそりと、聞き取れる言語で声を掛けられる。

「あの……あなたはもしかして、転生者なのでしょうか？」

言葉が通じることに驚きながらも、転生者が何なのかさっぱり分か

らない3号は、自分に向けて送信された電波の調査に来たことと、転生者を知らないこと、最後に写真について感謝し、急い

で目的地までジャンプした。今度は無事にたどり着けるといいが。一人取り残された銀色のインクリング……ではなく、女神エリスはただ呆然と目の前を見つめていた。突如天界にスーツケースを器用に抱えたイカがやってきて、写真を撮られたことも驚いた

が、一応転生者かと思いい言葉が通じるよう魔法を使ったところ、転生者では無いとイカが話して、どこかへ飛んでしまった。この時3号はエリスを自分と同族だと勘違いしているが、これは3号の住

む世界では遙か昔に人類が滅んでいるためだ。人間を知らない3号の勘違いはもう少し続く。

3号のジャンプもようやく終わりが見えてきた。ジャンプする場所を間違えたものの、あれから特にトラブルもなく目的地に無事着陸した。そこまではいいが、3号が想像していた状況とは違っ

て、3号が着陸した場所には何もなかった。オクタリアンの残党がいるわけでもないし、助けを求めるイカがいるわけでもない。念のためヒトの姿になってあたりを注意深く見渡す。樹木が大

量に生えているということとは、ここは森だろうか。都会で日々を過ごした3号にとっては、ここまでの森に入るのは初めてだった。空はまだ明るいので、しばらく周囲の調査をすることにした3号

は、部隊の仲間に連絡をしようとする。しかしスマホの右上に表示された文字に3号は驚愕する。

圏外である。このことは本当に頭になかった3号。生まれてから今まで、回線が使用できない場所にいたことがなかった3号は、私生活ではかなりスマホに頼っていた。特に地図が使えないのが

3号にとって辛いところだろう。こんな森の中を地図無しで抜けるなんてできそうにないし、スマホで電波を受信してスーパージャンプする以上、家にもハイカラスクエアにも帰れない。

3号はしばらく悩んだが、イカが通りそうな場所に潜伏し、通りかかったイカに話を聞いて、道案内してもらおうことにした。そうと決まればちようど開けた地形の電波の発信源の茂みに潜伏する

ことにする。スーツケースからスプラシューターを取り出し、足元に向けてインクを発射する。スーツケースを隠し、イカになってインクに潜伏すれば準備完了。あとは誰かが来るのを待つだけだ。

日が沈むまで待つことも考えていたが、昼のうちに誰かがやってきた。黒、茶色、水色の、三人組のインクリングだ。すぐさま電波が通りそうな場所に案内してもらいたいが、茶色と水色のイン

クリングがなにやら大きな声で話を始めたので、3号は潜伏したまま話を聞くことにした。

「ねえカズマ、私はこんな胡散臭い機械なんて気にせずとつと帰つたほうがいいと思うのよ。そもそも知らない誰かに延々と電波を送り続ける機械なんて何の役にも立たないし、何に使うつもりなの？」
「腕を引つ張るのをやめろ駄女神、これもパーティー募集の手段だ。アクセルじやおまえの悪評が広

がってるし、めぐみんみたいなのが何人もいるわけじゃない。説明書には電波は届くって書いてあるだろ？ 電波に釣られて強そうな奴が寄ってきたら、アクアとめぐみんの強さをアピールしてスカウトするんだよ」

カズマと呼ばれた少年が話し終わると、今度は黒いインクリングがカズマに質問する。

「確かに私の爆裂魔法は最強ですけど、アクアの知力が低いのはどう説明を？」

「言うわけないだろ。強力な補助魔法が使えるアークプリーストに、爆裂魔法を覚えたアークウイ

ザード。2人をまとめる天才冒険者の俺。これをアピールすれば大抵の冒険者はスカウトできるだ

ろ。あと爆裂魔法が一回しか使えないのも言わないぞ」
「聞いた私が間違いでした。相変わらずのクズっぷりですねカズマ。いや、別に間違った点は無いですけど」

潜伏している3号は会話を最後まで聞いていたが、あの3人が電波を発信していたインクリングだということ以外は話の内容を理解で

きなかった。とりあえず道を尋ねるべくヒトの姿に戻った3号は、スーツケースを引きずりながら3人のいる方に向かう。

「カズマ、誰か来たわよ。本当に来るなんて思ってたけど、この子をスカウトするならさっさと済ませなさいよ」

「ま、まさかスーツケース持った子供が来るなんて思うわけないだろ。あー、君、名前は？お父さんかお母さんはいる？」

3号を迷子の子供だと勘違いしているようだ。身長はインクリングの中では平均だが、目の前の少年は一回り3号より大きいためだろう。

3号はコードネームと、1人で来たこと、道に迷ったので近くの街まで案内してほしいことを伝えた。

「3号なんて変わった名前だな。俺はカズマ。こっちの青いのがアクア、小さいのがめぐみんだ」

雑な紹介に、左右の2人が抗議するが、カズマは話を続ける。

「とりあえずアクセルのギルドまで案内するから、ついてきてくれ」カズマは近くの街まで3号を案内してくれるそうだ。出会ったばかりなのに親切にしてくれるカズマには感謝してもしきれない。

アクセルを目指して歩き出してすぐ、アクアが話しかけてきた。

「3号はどうしてこんなところに来たの？大きなカバンを持つてるみたいだけど、旅行かしら？」

3号はスマホに電波を送られてきたと伝えた。アクアは納得したが、めぐみんはスマホを知らないようだ。しかし、スマホという単語を話した瞬間にカズマの様子が変わる。

「3号、スマホを持っていてるってことは日本人か？どこから転生してきたのか教えてくれないか？」

「あなた日本人だったの？髪も青いし、目の周りも黒く塗ってあるから違うと思っただけけど……あつ私下界にいるから知らないんだ」

3号は日本人を知らないのです、とりあえず違うと答えておく。転生もしていない。

「日本人じゃないってことはどこの国だ？髪の色を青くする国なんて聞いたことがないな。そもそも地球って分かるか？」

ようやく知っている単語が出た。カズマに3号の知っている地球のことを説明する。表面のほとんどが海で、元々海に住んでいた海洋生物が進化して地上に住むようになった星だ。

「表面のほとんどが海……まあ大体海だな。海の生き物が地上に住むって、俺のいない間に地球って変わったんだな」

カズマは多少は気になる点があるが納得したようだ。話が終わってしまったので今度は3号がカズマに質問することにした。とりあえず気になっていた爆裂魔法について聞いてみる。

「ふっふっふ。3号は私の爆裂魔法が気になって仕方がないようですね。いいでしょういいでしょう。我が最強の魔法を見せてあげますよ」

カズマに質問したはずだが、めぐみんが爆裂魔法を見せてくれるそうだ。4人は足を止め、めぐみんが魔法を唱えるのを待つ。詠唱が終わったためめぐみんが態勢を整えたところで、はっと気が付いたカズマがめぐみんに駆け寄り、動きを止める。

「ごめんな3号、爆裂魔法はまた今度だ。一回使うと、次に唱えられるまで時間がかかるからな」

カズマはもがくめぐみんを抑え、めぐみんに何かを伝えると、納得したような様子で再び歩き始めた。一度使うとしばらく使用できないといえば、スペシャルウエポンのようなものなのだろう。

時刻はもう夕方、人が集まってきた冒険者ギルドにいる3号とカズマ一行だが、3号は落ち込んだ様子だった。

「仕方ないだろ3号。ここどころか、この世界に通信回線なんてないんだから、電話も地図の確認もできないぞ」

未だに信じられない3号。カズマが言っていることが本当なら、3号はこの場所から帰れないことになる。家に帰れなくなった3号を見て、アクアとめぐみんはカズマを鋭く見つめる。

視線に耐えられなくなったカズマは、3号にいくつか質問する。

「なあ3号、財布の中にはいくらぐらい入っているんだ？そんなスーツケースを持っているってことは、旅行に来たようなもんだろ？10

00エリスあれば、ここで冒険者として生きていけるぞ」

とりあえず仕事はあるらしいが、問題はお金だろう。アクセルの街ではナワバリバトルは行われていないようで、3号がお金を稼ぐことはできない。そもそも3号は財布を持ち歩かない主義なので、スマホを封じられた3号は現在無一文だ。

「地球じゃキャッシュレスが進んでたもんな。じゃあ3号は無一文で家に帰れないわけか。……あれ？俺とんでもないことをしてるんじゃないか？」

「あー、3号、残念だったわね。連れてきたのはカズマなんだし、1000エリスぐらい貸してあげなさいよ。家に帰るまで、カズマとめぐみんと一緒に生活すればいいでしょ」

「そうですね。寝る場所ぐらいは用意してあげますよ、馬小屋ですけど」

どうやら見ず知らずの3号に身分証明書を作る手数料と寝床を用意してくれるらしい。3号は3人に深く感謝して、貸してもらった1000エリスを持って奥のカウンターに向かう。

受付の人に要件を伝え、冒険者についての軽い説明を聞き、手続きを進める。差し出された紙に身長と体重を記入、年齢は17歳、名前は本名を書くか迷ったが……3号でいいだろう。

「では、こちらのカードに触れてください」

3号は言われるがままにカードに触れると、自分の潜在能力が読み上げられる。

「能力は全体的に平均以下、少し俊敏性が高いくらいでしょうか。こうなると選択できるのは冒険者くらいですね」

身分証になればいいと考えていた3号は、じゃあそれで、と受付の人に任せる。

完成した冒険者カードを受け取った3号は、カズマの下に報告しに行く。

「終わったか。ちょっとカードを見せてくれ……俊敏性が高いくらいで、他は俺より低めか。あれ？俺より低めってことは3号、お前冒険者になったんじゃないか？」

大正解だ。能力を見ただけで職業がわかるなんて、さぞかしカズマは賢いのだろう。職業を当てられてなぜか喜ぶ3号。一方で、3人は静かに3号のカードを見つめていた。カードを3号に返したカズマは、3号に話を続ける。

「登録が終わったし、改めて自己紹介するか。俺はカズマ、3号と同じ冒険者だ。これからよろしくな」

「私はアクア。職業はアークプリーストの女神よ。よろしくね」

「我が名はめぐみん！アークウイザードにして、最強の爆裂魔法を操る者！」

めぐみんの挨拶に目を輝かせる3号。思った以上に反応が良かったのでめぐみんも少し困惑する。

3号も自己紹介を終えると、カズマ達は席を立った。時刻はもう夜。寝床に案内してくれるそうなので、3号はカズマについていく。「悪いな3号、俺たちは馬小屋を借りて寝てるんだ。じゃあ、俺はもう寝るから。おやすみー」

馬小屋に関しての説明が一切されないのは、この世界では馬小屋がよくあるものだからだろう。3号はカズマ達と、馬と呼ばれた未知の生き物にもあいさつを終え、3号はこの世界で初めて眠る。

帰ることができなくなったことは、もう気にしていないようだ。

翌日。朝早くに起きたと思った3号だったが、カズマ達はすでに出発しているようで、書置きが残されていた。

『俺たちはクエストに出発するので、これで適当に朝ご飯を食べてください』

思ったより起きるのが遅かったのだろうか。3号はスマホを取り出し確認するが、バッテリーを節約するため電源を切っていたの思っていた。充電もできないので、スマホの番号はしばらく無

いだろう。3号は書置きに添えられた500エリスを受け取り、スーツケースから再びプラシユーターを取り出す。確か冒険者はクエストに行ってお金を稼ぐらしい。3号はカズマに借りた1500エ

リスを返却するため、朝ご飯の前に冒険者ギルドで依頼を受けることにした。スーツケースを引きずり、仕事を探しに冒険者ギルドへ向かう。

ギルドに到着した3号は、受付の人に初心者向けの依頼はあるか尋ねると、ジャイアントトードの討伐依頼を勧められた。アクセル近くの草原に現れたジャイアントトードを2匹、1日で討伐すれ

ばいいそうだ。条件として、近辺の牧場に侵入された際は無条件で失敗となるそうだ。報酬は10000エリス。借金を返しても大きな収入になるだろう。3号はすぐに依頼を受けて、目的の草原へと出発した。

魔物を討伐するということを軽く見ていた3号は、この依頼に少々苦戦することになる。

頼れる友人

目的地である草原に到着した3号は、討伐対象であるジャイアントトードを発見し、その大きさに驚愕する。とりあえずその場にスーツケースを置き、ナワバリバトル用のインクタンクを背負う。こちらから攻撃を仕掛けることにした3号は、ジャイアントトードに向かってインクで道を作り、インクの中を泳いで素早く接近する。

射程圏内に入る前にこちらに気づいたジャイアントトードは、その巨体から想像できない速度で近づいてくる。体当たりをインクに潜って回避した3号は、その巨大な背中に向けてインクを全力

で発射した。ジャイアントトードの背中ではインクまみれになるが、ダメージ自体は全くないようだ。3号に再び気付いたように、3号を丸呑みにすべくに舌を伸ばすが、これも潜伏して回避。その

後も何度かインクを打ち込んだ3号だったが、この蛙にインクをぶつけても動きが遅くなるぐらいで一切ダメージが無いことに気が付く。

3号はしばらく必死で戦ったが、これまでのインクをぶつければ倒せるオクタリオンとは段違いに強い相手だ。この戦いのせいで、辺りの草原は真っ青に染まり、相手のジャイアントトードも元

の色が分からないほど青色に塗られている。この世界の人間がこの状況を見れば確実に絶句するだろうが、3号の世界では団地だろうがシヨツピングモールだろうがバトルの舞台になる、つまり床

も壁も2色のインクで滅茶苦茶に塗りたくられる。この程度のこととは3号にとっては日常のようなものだ。

周りの迷惑など気にせず、一心不乱に戦う3号だったが、もう一匹のジャイアントトードが乱入してからは形成が厳しくなってきた。ナワバリバトルはチーム戦であり、人数の不利を嫌というほ

ど味わってきた3号は、自分の状況を少しづつ整理する。相手に自分のインクは一切通用しないが、こちらが一瞬でも隙を見せればすぐに丸呑みにされるだろう。相手が自分のインクを塗り返し

てこないのは余裕の表れだと3号は思っているようだが、実際はイ

ンクを撃てないだけである。

相手が一切インクを塗り返さないことが、3号にとって唯一の救いだろう。3号のインクを塗り返さないおかげで、3号は潜伏もできれば自由に泳ぐこともできるので攻撃を避けるのは簡単、ブキ

のインクも補充し放題なので、3号が戦えなくなることは無いだろう。ただ、インクを補充したところで相手に一切通用しないので、不利なことに変わりはない。3号はこのまま次の日までナワバ

リバトル……ではなく、クエストが続くことも考えたが、近くから大きな悲鳴が聞こえてきた。3号は2匹の真つ青な蛙に数発インクを撃ちこんだ後、すぐに悲鳴がした場所に向かう。

「なあ。俺たちの知ってる草原って綺麗な青色で、あのでかいカエルも真つ青だったか？」

「落ち着きなさいカズマ。流石に私もこの状況はさっぱりよ。ただのカエル退治かと思ったけど、こんなことになってるなんて考えもしなかったわ」

「おかしいですよ？これただの初心者向けの依頼のはずですよ？2匹まとめて私の爆裂魔法で一瞬で終わらせる予定だったんですけど。やっぱりカエル退治なんてくるんじゃないよ……」

「私の知っているジャイアントトードでは無いな。恐らく辺りを真つ青にしたのは奴らだろう。インクと粘液で滅茶苦茶にされるのも悪くない……いや、私は一刻も早くあのカエルを討伐するべき

だと思うぞ。ほら、今すぐ戦いにいくぞ！早く！さあ！」

賑やかな4人組がいた。カズマとアクア、めぐみんは分かるが、あの金色のインクリングは誰か分からないが、どうやら4人は同じ依頼を受けていたようだ。

賢いカズマならあの蛙の弱点を知っているかもしれないと考えた3号は、カズマの元へ急いで向かう。それほど距離も遠くなかったのに、泳いでいけば一瞬でたどり着いた。ヒトの姿に戻った3号は、カズマにあの蛙を討伐しないといけないことと、蛙の弱点を教えてくださいと頼む。

「3号！お前なんでこんなところにいるんだ？……初心者向けの依頼を

受けた？ってことは、この前の俺と同じように依頼を受けちゃったんだな。あのカエルの弱点は斬撃だ。とりあえずここ

は俺達がなんとかするから、3号はそこで見ててくれ」

「いや、何かっこつけてんのよヒキニート。あんたも同じ冒険者でしようが。ところで、3号は何でこんな依頼を受けちゃったの？」

3号はカズマに借りた1500エリスを返すために依頼を受けた話した。カズマは3号と同じ冒険者らしいが、一切攻撃が通用しなかったあの蛙を討伐できるなんて、きつととんでもない冒険者に違いないと、3号は確信する。

「3号、俺の1500エリスを返すためにこんな依頼受けたのか？あつ分かった。これが俺のパーティに足りないんだ。常識人というか、健気いうか、そういうポジションのメンバーが足りないんだよ。

よ。ごめんな3号、こんな青いカエルなんかめぐみんがぶつ飛ばすから、帰ってうまい飯でも食べようぜ」

「途中までかっこよかったのに本音が出てますよ。結局私が何とかするんですか……」

どうやらカズマは戦わないようだ。気になったので、どうして戦わないのか聞いてみる。

「俺が戦うよりめぐみんの爆裂魔法のほうが一瞬だからな。そろそろ昼だし3号も腹減ってるだろ？とつと帰って飯にするためだよ」

「いや、インクと粘液まみれになるから戦いたくないだけだろう？まあ、私は大歓迎だが。そういうえば、あまりに自然に会話していたので自己紹介を忘れていたな。私はダクネス、クラスはクルセ

イダーだ」

背中に大きな何かを背負う彼女は、ダクネスというらしい。3号は自分が冒険者で、カズマ達とは知り合いだと自己紹介する。思えば、カズマのパーティはガールばかりだ。4人の意見が食い

違ったりすることもあるのだろうか、きつとカズマが何とかしているのだろうか。

自己紹介が終わった所で、めぐみんの詠唱が完了したようだ。杖を構え、照準を2匹のジャイアントトードに合わせる。

「エクспロージョン！」

突然そう叫ぶめぐみん。3号が、それをいうならエクспロツシャーじゃないのか、と尋ねようとした瞬間。少し離れた場所で巨大な爆発が起こった。恐ろしいほどの爆音と爆風を起こすが、同

時にインクもこちらに吹き飛んできた。爆風により押し寄せられるインクがその場にいる全員を襲い、全身を真っ青にしてしまった。

「うわあ、全身インクまみれじゃないですか。だから私はこんなカエル退治なんて嫌だったんですよ。とつとと帰りますよ」

「まあ、大体想像してたけどさ……こりや帰つたらすぐ風呂に入らないとな」

「新種のジャイアントトードなんて予想できるわけじゃないでしょ。粘液まみれになるよりましだけど、あんまりいいもんじゃないわね」

「ああ、一瞬で終わってしまった……やはり爆裂魔法はとんでもない威力だな」

倒れためぐみんがすぐにカズマに背負われ、4人は何事もなかったかのように歩き出した。こんな爆発を起こしても動じないなんて、この4人は一体何を経験してきたのだろうか。スーツケース

を取りに行かないといけない3号は、4人にスーツケースを取りに行くことを伝え、先に帰つてもらうことにした。4人の背中を見つめる3号だったが、早く帰るなら泳いだほうがいいのでは、と提案

しようとした頃には、声を掛けられる距離では無かった。

もしかしたら何か決まりがあるのかもしれないと予想した3号は、カズマ達の真似をして街まで歩いて帰ることにした。インクタンクとスプラシューターをケースに入れ、青い草原を背にした3

号は、アクセルに向かって歩き始めた。今回の依頼はカズマ達がないと達成出来なかっただろう。3号が一人でエリスを稼ぐのは、まだ難しいようだ。

しばらく歩いて、ようやくギルドに到着した3号。クエストに出発した時は歩くのが面倒で途中からインクを泳ぎ始めたが、帰りのように最後まで歩くことも悪くなかったようで、満足気に受付

にクエストの報告をする。報告といっても、カズマ達が達成したということぐらいだが。

しばらく何も食べていない3号は、この場所で初めての食事をとることにした。空いた席を探し始めた3号だったが、ギルドにカズマが駆け込んできた。ただギルドに用事があるわけでもないよ

うで、辺りを見渡して3号を見つけると、3号の元へ勢いよく駆け寄ってきた。

「ここにいたか3号！ どうやらあの草原を真っ青にしたモンスターが別にいるみたいなんだ。クエストの依頼主が、討伐したら追加で報酬を払ってくれるそうだな。3号もあの場所にいただろ？ 何か知ってることがあったら、教えてほしいんだ」

先にギルドに報告していたカズマは、ギルドにいた依頼主から追加でクエストを頼まれたらしい。ジャイアントトードが来たと思ったら、もっと迷惑な奴が来たと言っていたそうで、そのモン

スターを見かけてすぐにギルドに駆け込んだところ、偶然カズマ達と出会ったそうさ。追加報酬は10万エリス。相手が未知の魔物だからか、報酬が大分増えているようだ。

「あの場所にいたのは俺たちと3号ぐらいだろ？ ギルドに正式に依頼されると、せつかくの10万エリスの依頼が水の泡だ。俺達は全身真っ青になったまま帰ったから、依頼主の人は戦ったと勘違い

して俺たちに依頼したんだ。頼む！ 10万エリスのためなんだ。協力してくれ！」

カズマのおかげで今回の依頼を達成できたので、わざわざ隠す必要もないと考えた3号は、あの場所での出来事を全て話した。といっても、スプラシューターで辺り一面を塗りつぶしたことぐらいしか話すことは無かったが。

「いやいやいや。おかしいだろ3号。まるで自分がモンスターみたいな言い方じゃないか。そもそもなんで魔物を倒すのにインクでなんとかなると思ったんだ？ 普通、武器といったら剣とか槍とかのことだろ？ 水鉄砲じゃどうにもならないって！」

どうやらこの場所では魔物、つまり敵を倒すのに剣や槍というもの

を使うらしい。3号はそれでも自分がやったと言い張る。

「大体インクに潜るっておかしいよな!? 地面に塗ったインクなんて潜れるスペースは無いし、イカになるとかならないとか人間にできるわけないだろ!」

話を聞いたところカズマはイカになれないそうだ。インクリングならだれでもできるのに、どうしてカズマはできないのだろうか。「待て、だんだん見えてきたぞ。どうやら俺がイカになったりインクを噴射したりできると思ってるわけで、3号は逆にどうしてできないのか疑問に思ってるわけだな」

カズマは3号の考えていることを代弁してくれた。カズマが大き
な声でしゃべるので、周囲の視線が3号とカズマに集まり始める。

「ここでこれ以上話をするのはまずそうだし、とりあえず場所を移すぞ。ほら、こつちだ」

馬小屋に案内された3号は、雑に敷かれた藁の上に座っていた。ア
クアとめぐみんはいるが、ダクネスはいないようだ。

「あー、アクアとめぐみんは驚くかもしれないが、どうやら3号は人間
じゃないらしい」

「おかしいですよね? カズマは3号に手がかりを聞きに行っただけで
すよね? 急になんてこと言ってるんですか」

「俺だって驚いてるさ。ただ、インクばら撒き事件の犯人は自分だっ
て3号が言うからさ」

3号がしたことが事件にされてしまった。カズマが聞いたことの
ない単語を話したので、3人に人間について質問する。

「カズマの悪乗りにつき合わなくていいわよ3号。……え? 本当に知
らないの? いやいや、あなたも人間でしょ? 私にはそうとしか思えな
いけど」

確かに3号の姿は人間に似たようなものだ。目の周りが黒かった
り、頭が自分のインクの色になることぐらいしか違いはない。きりが
ないので、3号はこの場でイカの姿になった。足元にインク

が塗られていないので、3号の姿ははっきりと見える。真っ青のイ

カだ。

「ごめん3号、お前がここまで人間じゃないとは思わなかった。これイカだよな？完全にイカなんだが、どうなってるんだ？3号は俺と同じ地球に住んでたんだよな？」

3号はイカの姿になつたまま、3人にインクリング、ヒトの姿になれるイカについて説明する。3号が知っている地球には人間がいないうことも伝えた。

「イカのままで喋れるのか!?人間がいなくてことはあれか。きつと同じ名前の別の星から来たわけか。ありがとう3号、もう人に戻ってくれていいぞ。じゃあアクア、とりあえずインクリングについて詳しく教えてくれ」

「いやいや、イカになつたり人になつたりする生き物なんて私も聞いたことないんですけど。とりあえず3号が人間じゃないことも分かったけど、どうやってあの草原を塗つたの?」

質問に答えるべく、3号はヒトの姿に変形、ケースからインクタンクとブキを取り出し、足元に数発インクを撃つた。足元の藁は綺麗な黄色をしていたが、インクが当たった箇所は真っ青だ。

「3号の話が本当なら、この水鉄砲でジャイアントトードと戦つた結果、辺り一面青色になつたってわけだ」

「まあ、大体は分かつたわ。それで、依頼はどうするの?まさか本当に3号をやつつけるつもり?」

まだ依頼の話が残っていたことを思い出した3号は、依頼主に謝罪したいことをカズマに伝え、もう一度依頼主に会つて3号が謝罪することになった。報酬の10万エリスは、3号が働いて返すこ

とをカズマに提案し、カズマには反対されたが何とか意見を押し通した。

依頼主のいる牧場まで向かつた3号とカズマだったが、3号に向かつて遊ぶ場所を選ぶよう注意されたぐらいで、話はすぐに終わった。3号が反省していることと、インクが既に綺麗さっぱり消えてしまいい、もとの草原と変わらない色に戻っているためだそうだ。3号が遊ぶ場所をちゃんと選ぶように注意されたのは、依頼主が人間の子供

がやったことだと勘違いしているからだと思ったカズマは、無駄なト
ラブルを避けるべく、すぐさまアクセルに戻ることにした。もちろん
追加報酬は0エリス。叱られたぐらいで済んだのが幸運だろう。

「なあ3号、依頼主の人は草原が緑に戻ったって言ってたけど、本当は
何か理由があるんだろ？どんなトリックを使ったんだ？」

カズマがにやけながら質問をしてくるが、インクが消える理由を3
号は知らないの、知らないと答えておく。いつも勝手に消えていく
ので、3号はそういうものだと思っていた。

「いつも勝手に消えるって、ますます3号の謎が深まるな。まあいい
や、もう夜だし適当に何か食って馬小屋に帰るか。今日は俺の奢りだ
！アクアとめぐみんには秘密だぞ？」

朝と昼を抜いた3号にとつて、その言葉はとてもありがたかった。
カズマが3号に少々甘いのは、同じ職業冒険者仲間という理由だけで
なく、3号を弟のように感じているためだろうか。実際は3号

が年上なのだが、カズマは3号の年齢を見落としているようで、全
く気付いていないようだ。

アクセルの冒険者ギルドに戻った3号とカズマ。席に座って料理
を頼もうとした3号だったが、カズマがいつになく真剣な顔で話し
かけてきた。

「3号。一応説明しとくが、俺と周りにいるの奴は人間って種族で、イ
カにもなれないしインクも吐き出さない。まあ、俺の知ってるイカは
墨を吐くんだけだ。ついでに言うと、俺が知らないだけ」

かもしれないがインクリングなんて生き物は聞いたことが無い」
どうやらこの地域にインクリングはいないようで、代わりに人間が
生活しているらしい。ナワバリバトルの文化が無いのも納得した3
号だが、カズマの話はまだ終わっていない。

「ここからが本題だ。3号のインクは時間が経つと消えるそうだけ
ど、だからって街とかで勝手に撃つたらだめだぞ。床や壁なら落書き
程度で済むだろうが、人や商品にかかると大変なことになるからな。
あとは、人前でイカになるのもやめたほうがいいと思う。モンスター

と勘違いされそうだからな」

ナワバリバトルでもないのに街中をインクで塗るなんてしないが、3号はカズマに今後気を付けることを伝え、今度は3号がカズマに質問を始めることにした。

まずは帰る手段だろう。電波を見つけてやってきたものの、助けを求めていたわけではないのなら3号がこの世界にいる理由はない。カズマに10万1500エリスを返したらすぐにハイカラスクエ

アに帰らなければならぬ。部隊の皆が待っている。

「そうだよな。3号にも事情があるし帰りたいよな。ごめんな3号。申し訳ないが、3号を元の世界に返す手段はさっぱりなんだ。あとでアクアに聞いてみるよ」

まさかのノープランだった。もしかしたらしばらく帰れないかもしれない。勝手にやってきたのは3号の方なので、どちらが悪いという話でもないだろう。3号は、暗い顔をするカズマに自分のこ

とは気にしなくていいと話す。行く手段があれば帰る手段もあるだろうし、頼れる友人が出来たのでこの世界でも生きていけるだろう。もちろん生活費は自分で稼ぐつもりだが。

「頼れる友人って言葉の威力がすごいな、俺ちよっと泣きそうだよ。ありがたい3号、なにかあったら俺に相談してくれ。俺は冒険者だから力になれるかわからないけど、アクアあたりならなんと

かできるだろうしな。それじゃ、そろそろ注文するか」

カズマが料理の注文をする。酒場に人が集まってきているので、もうすっかり夜中なのだろう。周りの冒険者は皆ハイカラスクエアにいたインクリングのように楽しそうだ。その一員である3号も、同じように笑顔だった。

キャベツ収穫の裏で 前

未知の世界に来て3日目の朝を迎えた3号。隣の部屋を確認してみるが、カズマとアクアはまだ眠っているようだ。

寝ている2人を起こさぬようにこつそりと馬小屋から抜け出した3号は、朝から依頼を探しに冒険者ギルドへ向かう。昨日の夜にカズマに質問したところ、3号の職業である冒険者はどうやら一番

地位が低い職業だが、すべてのスキルを覚えられるのが利点らしい。

1人で依頼を受けるかどうか考えていた3号は、ギルドの門の前に知っている人物がいることに気が付く。ダクネスだ。隣にもう一人銀色の頭をした人間がいるようだが、気にせず3号は2人に声を掛けてみる。

「……ん、3号か。朝早くからクエストを受けに来たのか？」

その通りだ。1人でクエストをこなすためにレベルを上げなければならぬ3号は、朝から自分1人で達成できそうなクエストに挑むつもりだった。

「あれ、ダクネスと知り合いなの？……ああ、昨日のクエストで知り合ったのね？あたしはクリス、見ての通りの盗賊だよ」

3号も同じように挨拶する。名前は3号、職業は冒険者でレベルは1。挨拶を済ませたところで、3人で掲示板の前に立って、手頃なクエストを探す。どうやらジャイアントトードがまた出現

しているらしいので、昨日のリベンジを兼ねてこのクエスト、ジャイアントトード2匹討伐を受けることにした。昨日はめぐみんの爆裂魔法が無いと勝てなかったが、今回はきちんと作戦を立てて

いるので1人でも問題なく達成できると考えている3号。早速クエストを受けるべく受付に向かう3号に、クリスが焦った様子で声を掛けてくる。

「待ちなよ3号。キミ、さつきレベル1だって言ってたよね？ジャイアントトードは中級者向けのモンスターだし、別のクエストにしたほうがいいんじゃない？」

「3号、私もクリスと同じ意見だ。まともな武器も持たず挑むとすぐに丸呑みに……いや、そうか、丸呑み。そうだな3号、私も同行しよう。3号は後ろで私たちが戦う姿をみて、戦い方を覚えるといい」

ダクネスが一時的にクエストに同行してくれるそうだ。ダクネスの職業は上級職であるクルセイダー、頼もしい戦力になるだろう。3号は快く了承し、早速クエストに……

「3号、あたしもついてくよ。ダクネス1人じゃ不安だからね。まあ、あたしたちがいればこのクエストも余裕なんじゃないかな？ それじゃあ、いつてみよう！」

目的地の草原に向かう3号だったが、隣にいるクリスがちらちらと視線を向けるのを感じていた。何か気になることでもあるのかと思つた3号は、すぐさまクリスに質問する。

「いや、大したことじゃないよ。その背中に背負ってる物と手に持っている水鉄砲のことを聞こうと思つてね。これからジャイアントトードと戦うのに、何に使うのかなって」

どちらも戦うための重要な物と答えておく。昨日はスプラシューターが通用しなかったが、今日持つてきたのはスプラシューターコロポ。昨日はメインウエポンが通用しなくてお互いに攻撃が

効かない状況になったが、今回は違う。あの蛙を倒すための作戦があるのだ。

「ねえダクネス、この子大丈夫かな？ 完全に水鉄砲で戦うつもりだよね？」

「私たちがついてきて正解だったな。1人では本当に丸呑みにされていただろう。3号、これからはちゃんとした武器を買つて、パーティを組んでクエストに出発するんだぞ。……見えてきたな、あ

れが今回の討伐対象だろう」

遠くに2匹のジャイアントトードが見える。相手もこちらを発見したようで、2匹の巨大な蛙が地面を揺らしながら近づいてくる。

ダクネスとクリスは武器を構え、ジャイアントトードを迎え撃つつもりようだ。地面の振動が大きくなってきたと思えば、長い舌が伸

びてきたので余裕を持つて避けるクリスと3号。唯一狙わ

れなかったダクネスが動き出し、3号とクリスを守るように最前線に立つ。このままではダクネスが食べられてしまいそうだが、相手はダクネスに見向きもせず3号とクリスに突進する。

突進を難なく回避したクリスだが、3号はそうもいかなかった。3号はいつもの癖で地面にインクを発射してしまい、そのまま潜って回避してしまったのだ。地面にインクを塗ったと思えば、突然

消えてまた現れる3号に、ジャイアントトードだけでなくダクネスとクリスからも視線が向けられる。早速人前でイカになつてしまった3号だが、そのことを後悔する暇もなく再び3号に舌が伸ばさ

れる。2人にインクに潜る姿を見られてしまったが、今は蛙退治のほうが重要だ。3号は舌を潜つて躲しながら、相手の口の前まで近づいていく。目の前に獲物を発見したジャイアントトードは、す

ぐに大きく口を開けて3号を捕食しようとする。待ちに待ったチャンスが訪れた。

3号の秘策であるサブウェポン、スプラッシュボムをその大きな口の中に投げ入れる。インクタンクの中身の7割を消費するので連続で投げることができないものの、爆風をまともに受ければイ

ンクリングは一撃で倒されるほどの威力を誇る爆弾だ。これを飲み込んだジャイアントトードは、その後すぐに奇怪な鳴き声を発しながら大きくひるんだ。狙い通り体内で爆発してダメージを与え

たと考えていいだろう。

一度インクを回復させてから同じようにもう片方の口にも投げ入れる3号。ナワバリバトルでもオクタリアンとの戦いでもよく使ったサブウェポンだったが、この世界でもお世話になりそうだ。

「この一連の流れで聞きたいことが山ほどあるんだけど。キミ、一体どんなスキルを使ったの？インクの中に潜っている……つていう表現であつてのかな。それも気になるけど、なにか奇妙な物を投げたと思つたらカエルがひるんだよね？あれはなんなの？」

「私も色々聞きたいが、今はジャイアントトードの討伐が先だ。動けない今がチャンスだろうし、一気に決めるぞ！」

スキルではなく、爆弾を投げ入れただけだと話している間に、大きくひるんだ2匹のジャイアントトードに向けて切りかかる2人。動けない状態でまともに攻撃を食らったジャイアントトード

は、そのまま息絶えた。今回も3号はとどめを刺せなかったが、有効な攻撃手段が見つかったので、これからは1人で戦えるだろうか。2人のようにこの世界の武器を持てば、もっと楽に討伐できるかもしれない。

「……ああ、またあっさり終わってしまった。今回は捕食されるかと思っただが、昨日と同じようにすぐに倒れたな」

「食べられるよりましだと思うよダクネス。それよりキミ、3号だったっけ。さっきやったことを説明してもらってもいいかな？」

これ以上言い訳できないと感じた3号は、クリスとダクネスに説明を始める。カズマに話したこととほぼ同じ内容だったが、2人は納得してくれたようだ。ただ、3号はイカの姿を見せた時のクリ

スの驚き方に少し違和感を感じていた。あの時の、と呟いていたが、インクリングのことを知っているのだろうか。

「インクリングとやらは気になるが、とりあえず帰ってクエストの報告をするか。クリス、アクセルに帰ろう」

「えっ？ああ、分かった。それじゃ3号も帰ろうか。大丈夫、3号が悪い魔物とか、そういう生き物じゃないのは何となく分かるから、気にしないでいいよ」

2人の反応を見て安心する。もし魔物と勘違いされたらどうなっていただろうか。2人に一緒についてきてくれたことを感謝し、アクセルの冒険者ギルドに向かって3人で歩き始めた。

アクセルの街に到着した3号は、ギルドに着くまで時間もあるのでダクネスに1つ質問することにした。昨日はカズマと一緒にいたが、パーティの一員ではないのだろうか。

「そうだな、私はカズマのパーティメンバーではない。昨日は何とか押し通して一緒にクエストに出発したが、私が戦う前にめぐみんが一瞬で終わらせてしまったというわけだ」

ダクネスはまだパーティの一員ではないらしい。もしダクネスが加入したら、カズマのパーティは更に強くなるだろう。頭の切れるカズマに上級職の3人が集まれば、どんな困難でも乗り越えられそうな気がする。そんなことを考えていた3号だったが、目の前には冒険者ギルドの門、考えていたらすぐにギルドに到着していたようだ。

クエストを達成し念願の報酬を受け取った3号。昨日はカズマ達がいなければクエストをクリア出来なかったので報酬を受け取らなかったが、今回は3号も一応活躍している。ダクネスとクリスに多めに分けた結果5000エリスほどを受け取った3号は、自分のエリスで食事をするべく席に座ろうと周りを見渡す。アクアが何やら奇妙なことをやっているが、カズマがめぐみんと座って食事をしているようなので、そちらに相席することにする。

「今日はこれで解散にしよっか。ありがとね3号、色々面白い物見せてもらえたし、楽しかったよ」

クリスとダクネスに別れを告げ、酒場の端にあるカズマの席に向かう。カズマに相席していいか尋ねると、快く承諾してくれた。

「3号も来てたのか。今めぐみんにスキルの覚え方を教わっていた所だな、まずは誰かにスキルの使い方を教えてもらったあと、カードで溜まったスキルポイントを使うと覚えられるそうだよ」

「さっき私が説明したことまんまですよ。3号も私と同じ爆裂道を歩みませんか？爆裂魔法の使い方ならいくらでも教えてあげますよ」

爆裂魔法。めぐみんの特権だと考えていたが、やろうと思えば3号にも使えるようになるらしい。面白そうなので確かに習得してもいいかもしれないが、他にもスキルがある以上、覚えるものは慎重に選びたい。めぐみんの発言に悩む3号だったが、カズマも

慎重に覚えるスキルを探しているようだ。2人で唸りながらカードを見つめっていると、後ろから足音が聞こえてくる。

ダクネスだ。先ほど解散したはずだが、3号と同じようにカズマと食事したいのだろうか。

探したぞ、とダクネスが話した瞬間、カズマの表情が硬くなる。3号がカズマに何があったのかを聞く前に、ダクネスが話を続ける。「カズマ、昨日の話の続きをさせてもらおう。私をあなたのパーティに……」

「お断りしますっ！」

ダクネスが話を断られたはずだが、どことなく喜んで見えるように見える。どうして喜んでいいのか尋ねようかと思ったが、これは2人の問題だろう。3号は気にせず頼んでおいた唐揚げを頬張って

いると、さらにクリスが歩いてきた。カズマに迫るダクネスをなだめているようだが、ある程度話が済んだところで、今度はスキルの話題になった。

「キミ、役に立つスキルが欲しいみたいだね。盗賊系のスキルなんてどうかな？習得にかかるポイントも少ないし、何かと便利だし、覚えておいて損はないと思うよ。3号も一緒にどう？」

どうやらクリスが直々にスキルを教えてくださいられるらしい。まだスキルを1つも覚えていない3号にとって嬉しい話であることは間違いない。

「どうだい？今ならシユワシユワ一杯でいいよ？」

やっすいな、と隣のカズマが叫ぶ。どうやら嬉しい話であると同時に、おいしい話でもあるようだ。カズマがシユワシユワを注文する様子を見た3号は、それを真似して同じように注文した。

人通りのない裏通り。食事を終えた3号は、一緒に盗賊のスキルを教えてもらうためにカズマに同行していた。敵を感知したり潜伏したり、罠を解除するスキルがあるそうだが、どれもナワバリ

バトルで使われたら非常に厄介なスキルだろう。3号はどのスキルも魅力的に感じるが、クリス曰く一押しスキルがあるらしい。

向かい合うカズマとクリスを見つめる3号とダクネス。クリスがカズマに手を伸ばし一言叫ぶ。

『ステイール！』

クリスの手には小さな袋が握られている。カズマの反応を見てい

ると、どうやらあの袋はカズマの財布のようだ。クリス一押しの手スキルは窃盗、今まさにカズマから財布を奪ったところなのだろう。

う。3号は自分のスマホを盗られることを想像し、思わず顔をしかめる。相手の物を何かしら盗むスキルは、確かにとっても強力で、かつ使いやすい武器になるに違いない。

カズマに財布を返そうとするクリスだったが、2人はどうやら賭け事をするようだ。カズマも窃盗スキルを覚え、クリスから財布を取り返すという内容。カズマはそれに乗り、窃盗スキルを覚えるべく冒険者カードを見つめる。

「敵感知1ポイント、潜伏1ポイント、センプク10ポイント……俺の見間違いじゃなければ潜伏が2つあるようにみえるんだが、どうなってるんだ？しかも片方の潜伏は10ポイントなんだが。クリス、このセンプクって何なんだ？」

「あー、まさかとは思うけど、もしかしたら3号のインクに潜るためのスキルかもしれないね。あたしのカードには……うわ、こっちにもある」

3号も冒険者カードを見ると、センプクスキルは習得済みのようだ。インクリングなので当然といえば当然だが、カズマもクリスも覚えてしまえばインクに潜ることができるようになるだろう。便利なので、覚えるのをすすめる。

「待て3号、俺人間だから。インクに潜ったら息も続かないし、全身インクまみれになるから。ダクネス、インクまみれって聞いてもじもじするのをやめろ。……とにかく、俺はインクを撃てない」

し、そもそも今はポイントが足りないから覚えられないよ。とりあえず、窃盗スキルを覚えるか」

3号もカードを取り出し潜伏スキルを覚えてみる。何やら使い方が頭に流れ込んでくるような感覚がしたので、早速潜伏スキルを試してみることにした3号は、足元に一発インクを撃ち、潜伏ス

キルを使った後にインクに潜る。3人は3号がインクに潜ったことに気が付いていないようで、カズマとクリスは話を続ける。スキルを試し終わった3号はヒトに戻り、2人の戦いを見届けることにした

が……

「当たり前当たり前！大当たりだあああ！」

奇声を発しながら白い布を振り回すカズマ。クリスの下着を盗ってしまったようだが、隣のダクネスはなぜだか分からないが嬉しそうにしている。この奇妙な空間から一刻も早く抜け出したい。

なった3号は、早速覚えた潜伏スキルを使って一目散に逃げ出した。こういう時は誰に通報すればいいのだろうか。スマホも持っていないので、とりあえずアクアに相談してみることにした3号は、急いで冒険ギルドへ向かった。

ギルドの中でアクアを探す3号だったが、人だかりに注目するとすぐに見つかった。人に囲まれているアクアにどう声を掛けようか迷っている3号。しばらくするとアクアから人が離れていくの

で、急いでアクアの元へ向かおうとしたが、入口からカズマの声がする。涙目のクリスと顔を赤らめたダクネス、そしてカズマがギルドにやってきた。カズマを見かけたアクアとめぐみんがこちらに歩いてくる。

「カズマ、私の華麗な芸も見ないで一体どこに行ってたの？」

3号は、カズマがその涙目になっているクリスの下着を窃盗スキルで盗んでいたと説明する。

「待て3号！結果だけ話すとんでもない誤解が生まれるから！これにはちゃんとした事情が……」

カズマが言い終える前に、ダクネスがあの場合で起こった出来事を話し始める。どうやらあの後クリスの有り金まで持っていったしまったようだ。周囲の女性冒険者はもちろん、仲間からの視線

も厳しくなる。このままこの話が続くのかと思ったが、その後カズマはめぐみんの下着まで盗み出してしまった。仲間の下着にまで手を出すのはいかがかと思つたが、なぜかダクネスはどうしてもパーティーに入りたいとカズマに迫る。

ダクネスの話を断るためか、3号を含めた6人をテーブルに集めるカズマ。真剣な表情をしているので、真面目な話をするのだろうか。「カズマ、ダクネスはクルセイダーですよ？断る理由なんて無いと

思いますが……」

確かにそうだ。昨日も一緒にジャイアントトードを倒しに行っていたし、ちよつと変わっているがとても強い人だというのは、今朝一緒に戦った3号も知っている。

唸るカズマだったが、やがてすぐ真剣な表情に戻り、ダクネスやめぐみん、3号に向かって話を始めた。

「実は、俺とアクアはこう見えて本気で魔王を倒したいと思っている。俺とアクアの冒険は、これからさらに過酷なものとなっていくだろう」

話によれば、カズマは魔物の親玉、魔王と呼ばれるものを倒すことを目的にしているようだ。ただ、3号はこれから厳しい旅になると受け取ったつもりだが、ダクネスとめぐみんはやる気十分の

ようで、このままカズマのパーティに加わるつもりらしい。

「そういえば3号はカズマのパーティに入らないのですか？今なら伝説の爆裂魔法使いの仲間として、歴史に名を遺すことができますよ」「キャンペーンみたいに言うなっ！3号は帰らないといけない場所があるから、俺のパーティに入ることはないよ」

カズマの言う通り、3号はNew!カラストーンビ部隊の一員、帰らないといけない場所がある。残念だが、カズマのパーティに加わることはできない。そうカズマ達に伝えた時、突如サイレンが鳴り響き、ギルドに放送が流れてくる。

『緊急クエスト！緊急クエスト！街の中にいる冒険者各員は至急正門に集まってください！』

緊急クエスト。街の中にいる冒険者を集めるほどの出来事とは、一体何なのだろうか。他の冒険者が慌ただしくギルドを出ていくので、3号も一緒に走り出そうとするが、ギルドの門のすぐ近く

に泣いた子供がいるのを見つけた3号。放っておけないのですぐに声を掛け、何があったのか話を聞く。

「あのっ、お母さんの店が、オレンジ色の魔物に襲われて、でも冒険者の人はみんなキャベツを取りにいっちゃって……」

すぐに子供を持ち上げ、魔物に襲われた場所を尋ねる3号。他の冒

険者は皆正門に向かってしまったので、今この子供を助けられるのは3号だけだ。

魔物に襲われた場所を案内してもらい、その母親の店まで全力で走る。川沿いの店だと話すので、水の中から流れてきた魔物に襲われているのだろうか。

案内されるがまま走り続けた3号。そこには奇妙な光景が広がっていた。川から上陸してきたオレンジ色の魔物が10数匹がかりで住民に襲い掛かっている。

大きな2つの目玉にフライパンを持ち、集団で行動する奇妙な生き物。3号の世界でシャケと呼ばれていたものが、この世界で住民を襲撃していた。

キヤベツ収獲の裏で 後

シャケがインクリングを襲う話はよく知っている3号だが、インクリングはインクによる中距離からの攻撃手段を持っているため、被害が出た話は聞いたことがない。インクによる攻撃で倒せる

ので、逆にシャケを倒すアルバイトが若者の間が流行っているぐらいだ。

だが、もし自衛手段を持たない人間が襲われてしまったらどうなるだろうか。ある程度戦うことができる冒険者なら討伐することも難しくないだろうが、魔物と戦ったことがないような人間だったら。3号の頭の中に1つの疑問が浮かんだが、すぐに考えるのをやめた。

戦える冒険者ならここにいる。目の前のシャケに照準を定め、ブキの引き金を引いた。

子供を抱えながら数匹のシャケを倒し、周りの住民に早急に屋内に避難するよう呼びかける3号。既にシャケの狙いは3号に移っているようで、シャケの群れが一齐にこちらに向かってくる。

シャケを誘導するように距離を取りながら周りを見渡すが、もう周囲に人はいない。住民の避難は完了したと考えていいだろう。あとは抱えた子供を避難させるだけなので、道を尋ねながら母親

の元へ向かう3号だったが、1人の女性が目に入った。周りをシャケに囲まれているようだが……

「お母さんだ！お母さん、冒険者さんを連れてきたよ！」

お母さんと呼ばれた人物は、こちらを確認すると同時に商品の大根を手に取ると、なんとシャケを殴り倒しながらこちらに向かってきた。この世界の人間は思った以上に強いのもかもしれない。

3号はすぐに母親に子供を預け、避難するように伝える。母親に何度も感謝されたが、案外3号が来なくても自分で子供を探しに行っていたかもしれない。店の前のシャケをまとめて射撃し討伐し

た3号は、親子2人を見送った後、すぐに後方を確認する。最初に見かけたシャケの群れが3号に追いついてきたようだが、周りに人が

いなければこちらが勝ったも同然。インクを数発当てれば討伐

できる、いわゆる普通のシヤケばかりの群れだ。3号が足元を少し塗り、シヤケにインクを撃とうとしたその時、3号の後頭部に鈍い衝撃が走る。

何かに不意をつかれ後ろから攻撃されたのだろうか。シヤケの群れが目の前にいるのであまり時間はかけられないが、頭をさすりながら辺りを見渡す。すると、今度は3号の顔めがけて何かがぶつってきた。

たまらずインクに潜る3号。地上を確認してみると、シヤケを押しつけて緑色の球体が町中を跳ね回っている。3号を攻撃しようとしているわけではないようだが、あれが跳ね回っていてはまとも

にも戦えない。先ほどの緊急クエストの放送は、これが襲来するためだったのだろう。

このままインクの中でやり過ごしたい3号だったが、シヤケはインクに潜っている3号に向かって前進し続ける。空飛ぶ緑の球体が跳ね回っているが、シヤケに倒されるわけにもいかない。幸いな

ことに、住民は全員避難しているし、シヤケが狙っているのは3号だけなので、3号は狭い場所にシヤケを誘導しまとめて討伐することに決めた。今いる場所は開けているのでいつ球体が当たるか

分からない。球体を避けつつ、路地裏にでも誘導して一気に倒してしまえばいいだろう。

ようやく狭い路地にたどり着いた3号。インクの道を作るべく一瞬ヒトの姿になっても、毎回体のどこかに球体が当たるので嫌になる。痛みを我慢しながらなんとか到着したものの、球体の襲撃

は一向に収まる気配がない。このまま待っていても埒が明かないので、スプラッシュボムを1つシヤケの群れに投げ入れてみる。狭い路地なので爆風が複数のシヤケに命中し、何匹か討伐するこ

とができた。体を地上に晒す時間も短いので、このままボムを投げ入れ続ければ安全に全滅させられるだろう。格好よくもないし地味だが、ひたすらボムを投げ入れ続ける3号だった。

時間はかかったが、3号はようやくシヤケを全滅させることができ

た。元々それほど強くない普通のシヤケだったので被害はなかったが、これがドスコイやオオモノシヤケだったら大変な騒ぎ

だっただろう。

シヤケを見つけた時には考えもしなかったが、現在3号は普通のシヤケより圧倒的にこの空飛ぶ緑の球体の方が危ないと感じていた。狭い路地裏から脱出したのはいいが、相変わらず球体の襲撃

は続いたままだ。このままインクの中で過ごせば安全かもしれないが、それはあまり良い選択ではないだろう。カズマ達はきつとこの球体と戦っているはず。

3号も冒険者カードを持った冒険者だ。3号はヒトの姿に戻り、空飛ぶ球体に照準を……いや、この球体はもしかしたら。動きが比較的遅い球体にインクを撃ちこみ、地上に落とす。数回球体が身

体に衝突するが、痛みには耐えながら3号は撃ち落とした球体を確認する。まさかとは思った3号だったが、やはり見間違いでは無かった。これはキャベツだ。

どうやらこの世界のキャベツは、空を飛んでやってくるようだ。訳が分からないが、キャベツが空を飛ぶ世界なのだ。

撃ち落としたキャベツをしばらく見つめていた3号だったが、後頭部に2度目の衝撃が走る。球体の正体を知って忘れてしまっただったが、空飛ぶキャベツが危険なことに変わりはない。確か冒

険者は正門に集められていたはず。街の構造はうる覚えだが、何とか正門にいる冒険者に加わって一匹でも多くのキャベツを討伐しなければならぬと思った3号。次の目的地を正門に決めて、イ

ンクの道を作りだす。撃ち落としたキャベツは勿体ないので一応拾っておく3号だったが、インクまみれの青いキャベツを食べる人などいるのだろうか。無駄なことを考えているとすぐにキャベツ

がぶつかつてきそうなので、3号はすぐにインクに潜り、正門へと向かった。

ようやく正門が見えてきた。キャベツを避けたり撃ち落したりしながら泳ぐのはなかなか大変だったが、あれから特にキャベツの攻

撃を食らってはいない。正門の向こうを見渡すと、複数の冒

険者が倒れているのが見える。やはりこのキャベツは危険だ。

正門をくぐり、ヒトの姿に戻った3号はキャベツを避けながら再び辺りを確認すると、カズマを見つけた。背中にかごを背負いながら、キャベツを拾い集めている。まさかこのキャベツを食べる

つもりなのだろうか。気になった3号はカズマの元へ走っていく。「ステイール……ん？3号じゃないか！さっきまでどこに行ってたんだ？いや、今はそれどころじゃないな。3号、俺たち冒険者は今のキャベツを収穫しなければいけないんだ。今年は1玉1万

エリスで買い取ってもらえるらしいから、生活費の足しにでもしようと思ってな」

カズマは今1匹ではなく1玉、討伐ではなく収穫と話しているように聞こえた。まさかこの空飛ぶキャベツを食べるつもりなのだろうか。

「これでも一応野菜みたいだな。アクアの説明の通りなら、ちゃんと食べられるはず、だと思う……なんだか不安になってくるな」

なら話は早い。3号はブキを構え、空飛ぶキャベツを撃とうとするが、カズマにそれを止められてしまう。

「待て待て待て、3号、それは使っちゃだめだつて！インクまみれになるから！キャベツ真っ青になるから！なんか薬品に漬けたキャベツみたいになるから！」

カズマからインク禁止令が発せられてしまった。既に1回どころか数回やってしまっただけなのに、食べなければ問題ないはず。

インクを使わずにカズマの力になるのは厳しいかもしれないと思った3号は、シャケが現れた場所にもう一度戻って様子を見ることに決めた。もう一度戻らないといけないが、インクをまき散ら

して迷惑をかけるより、シャケの討伐の方を優先したほうがいいだろう。カズマに用事があるので戻ると伝え、もう一度街に向かって走る。後ろから爆音が聞こえてくるが、おそらくめぐみんの爆

裂魔法だろう。上級職が3人いるのであちらはきつとなんとかなる。たった今1人戦闘不能になったが、それでもなんとかなるだろ

う。3号はシヤケを発見した場所に急いで向かった。

「あつ冒険者さんだ！……ここで何してるの？」

先ほど助けた男の子がこちらに駆け寄ってくる。3号は今、シヤケが再び現れるのではないかと思いい街の川を見張っていた。あれから1匹もシヤケが見ていないが、いつ現れるか分からないので警戒を緩めるわけにはいかない。普通のシヤケはともかく、大きい種類が来るときつと厄介なこと……

「もうキャベツは飛んでこないよ？他の冒険者さんはみんなギルドに行っちゃったけど、ギルドに行かないの？」

その言葉を聞いてふと周囲を確認すると、周りの住民は皆3号を見ている。キャベツの襲来も終わって空はもう暗くなり始めているのに、川を凝視し続けている危ない人だと思われているのだらうか。急に3号は恥ずかしくなってくる。

よく考えればキャベツの襲来はもう終わっているのに、3号以外の冒険者も何かあつたら駆けつけてくれる。もしかして3号がこの川を見張り続ける必要はないのではないか。

男の子にもしオレンジ色の魔物が来たらすぐに知らせるように話すと、3号は真っ赤になった顔を下に向けながらギルドに向かつて逃げようように走る。こんなことになるなら、キャベツをもう少し収穫しておくべきだった。そんなことを考えながら、唯一拾った青いキャベツを抱え、ギルドへ向かう3号だった。

ギルドに到着した3号。建物の中は相変わらず冒険者で賑わっているが、今日は一段と盛り上がり上がっているようだ。受付に向かった3号は、とりあえず青いキャベツを預ける。

一体いくらになるか分からないが、1エリスでも貰えたらラッキーだろう。受付に渡した時の不自然な表情がそれを示していた。

夕飯にする前に、冒険者からシヤケの情報が無いか聞いて回ることにした3号、とりあえず近くのモヒカンの人に聞いてみる。

「今年のキャベツは凄まじかったな。1玉1万エリスのキャベツ目当

てに、川からシャケがフライパンを持って上陸してきたって話だぜ」
フライパンを持ったシャケ。絶対にキャベツ目当てではないと思
うが、魔物とすら思われていないのだろうか。他の冒険者にも訪ねて
みるが、大体同じ話が聞けた。キャベツじゃなくて俺を殴っ

てきたから殴り返してやったぜ、と話した冒険者がいるので、普通
のシャケ程度ならこの街の住民でもなんとか倒せるかもしれない。
もう少し話を聞きたいので周囲に視線を向けると、遠くのテー

ブルに見慣れた4人組を見つけた。クリスはいないようだが、とり
あえずカズマにシャケについて話を聞いてみる。

「ほらー！3号も歩くシャケを見てるし、私の言う通り歩くシャケはい
るのよ！残念だったわねえカズマ！」

「嘘だろ!?」3号、本当に歩くシャケを見たのか？俺達がいた場所とは
離れた川の方で……いや、3号ってキャベツの収穫に最初いなかった
よな。3号が川の方に行つてシャケを見たってことは、空

飛ぶキャベツに歩くシャケまでいるのかよ。元々おかしいと思っ
てたけどどうなってるんだこの世界」

カズマの気持ちも分かる。きつと狂暴なシャケが街に侵入したこ
とにショックを受けているのだろう。3号はカズマを安心させるた
め、シャケは全て倒したと伝える。念のため冒険者カードを確

認、ちゃんとシャケを討伐したことが記入されている。

「倒したのかよ!?」周りの冒険者は急にいなくなったって言ってるけ
ど、あれは3号が倒したのが原因なのか。……何だって？人を襲う狂
暴な生き物？いやいやいや、なんでそんな生き物街に入れ

てんだよ。ありがとな3号、3号のおかげで俺の平和な日常が守ら
れたよ」

これからもシャケを見かけたらすぐに知らせてほしいとカズマに
伝えた後、3号はカズマと一緒にいるダクネスについて質問する。ダ
クネスは結局パーティーに入ることができたのだろうか。

「ああ、私はカズマのパーティーに入ることができた。これからはカズ
マ達と一緒に冒険するよ。改めてよろしく、3号」

「そうなんだよなー、ダクネスがパーティーに入ったんだよなあ。大丈

夫かな俺のパーティ」

どこか不満そうなカズマ。4人中3人が上級職のパーティなのに、一体どこが不満なのだろうか。

「気にしないでくれ3号。これは……そう、あれだ、贅沢な悩みってやつなんだきつと。うん、きつとそうだ」

大丈夫ではないような気もするが、気にしないでくれと言われたのでこれ以上話をするのはやめた。きつと複雑な問題なのだろう。

そろそろお腹が空いてきた3号は、せっかくなのでキャベツの野菜炒めを注文して、空飛ぶキャベツの味を確かめることにした。カズマに相席をお願いして、野菜炒めを頼む。

「そういえば3号、確か2つ目の潜伏スキルって3号のスキルだったよな。他にも3号が最初から覚えているスキルってあるのか？」

思えばイカセンプク（インクに潜る行為）はインクリングだからできると思っていた動作だが、スキルを習得すれば不自由はあるだろうが誰でもインクに潜れるようになるはず。他にもスキルがな

いか自分の冒険者カードを確認すると、幾つかそれらしき物が見つかった。

カモン、ナイスといった動作やスーパージャンプがスキルになっているようだが、カズマに教えられるスキルは無さそうだ。ただ、カモンやナイスといった呼びかける動作がスキルになっている

のが気になった3号は、今この場所で使ってみることにした。とりあえずカズマにスキルを使うことを伝え、渾身のナイスを送る。

「キャベツを収穫する姿がイカしていたって言われると、なんか照れるな。……いや、それってスキルなのか？」

「あー、カズマがナイスだというのを周りに知らせるスキルのようにですね。今私もなんとなくカズマがナイスなんだなって思いましたし、周囲の冒険者もカズマを見てますよ」

「恥ずかしいわっ！面と向かって褒められるだけでも結構恥ずかしいのに、なんで周りに知らせるんだ!?待って待ってみんな拍手するのやめて！お願いだから！」

本来ナワバリバトルで仲間が素晴らしいプレイをした時にナイス

を送るのだが、この世界でも同じように使えるようだ。3号は拍手をしながら、今ならこのスキルを習得できることを伝えた。

「ああ、実感したよ。これなかなか使えるスキルだし、一応覚えとくか……あれ、1ポイントでナイスを習得できるのか？ほうほう、これはかなりお得なスキルだな。ありがとう3号、うまく使わせてもらおうよ」

なぜか顔がにやけているカズマ。ナイスを気に入ってもらえてなによりだが、一体何に使うのだろうか。キャベツの野菜炒めを食べ終えた3号は、戦闘が続いて疲労が溜まっているので馬小屋に帰ることにした。

カズマ達に自分はもう寝ると伝え、3号はギルドの外に出る。真っ暗な空にはハイカラスクエアでは見られないほどの綺麗な星が散りばめられているが、同時に少し寂しさを感じさせる。3号は、自分がいつハイカラスクエアに帰ることができるのかを考えながら馬小屋に帰り、倒れるように眠った。

はっと目が覚める3号。スーツケースの中のスマホを確認するが、バッテリーを温存するためスマホを使えないことを思い出す。朝起きたらスマホで時間を確認する3号にとって癖のようなもの

なので、これからもしばらく続いてしまうのかもしれない。時計が無いので今が何時かは分からないが、隣の部屋でカズマとアクアが寝ているのできつと朝なのだろう。

クエストをこなさないと食べていけない3号は、昨日と同じようにギルドに向かう。昨日のようにジャイアントトードでも討伐しようかと思ったが、シャケの目撃情報があればそちらの方を優先

したほうがいいかもしれない。考え事をしながらギルドに向かうのが日課のようになってしまった3号だったが、ギルドに到着すると受付の人に呼びかけられた。

昨日の青いキャベツが8000エリスで売れたと伝えられたが、あんな青いキャベツに8000エリスの値段をつけるなんて中々の物好きがいるものだ。3号は思った。一体どこが魅力的だったのだから

うか。

受付の人から臨時収入を受け取った3号は、掲示板に張られたクエストの依頼を見る。オオモノシヤケどころか、普通のシヤケも目撃されてはいないのか、掲示板にはシヤケに関する依頼は一つ

も無かった。仕方がないので繁殖期に入ったらしいジャイアントトードの討伐依頼の方を受けることにした3号。この世界に来てからジャイアントトードと戦ってばかりだが、これも生活のため。

昨日と同じようにジャイアントトードの討伐向かおうとする3号だったが、ふと昨日のダクネスの言葉を思い出す。そういえばこの世界には3号の世界とは違う剣や槍という武器があると話していたよな気がする。

臨時収入も入ったので、武器をかうお金は十分あるだろう。3号は予定を変更し、この世界の武器屋へ出発した。

木彫りのクマサン

街の表通りには朝から多くの人で溢れている。買い物をしている街の住民や、鎧を身にまとった冒険者など様々な人間が行き交う風景は、3号の住む世界とあまり変わらないようだ。

現在3号はこの世界の武器を買うために武器屋を探しているが、ギルドと馬小屋を往復する生活しかしていない3号は、ギルドへの道は覚えたもののどこにどのような店があるかはさっぱり分かっていなかった。

この賑やかな街を歩くだけでも楽しいが、クエストに行かないといけないのでそろそろ武器屋に行きたいと3号は思っていたところ、視界に奇妙な人物が入ってくる。特徴的な帽子に眼帯を付け

た人物が、身長と同じぐらいの棒を抱きしめながら奇妙なダンスを踊っているようだ。3号はその奇妙な人物を知っている。丁度いいので、めぐみんに武器屋の場所を聞いてみることにする。

「あれ、3号じゃないですか。3号もキャベツの報酬で武器を買ってきたのですか？私もここでマナタイト製の杖を買ったばかりなのですが、はあ……、とても良い買い物をしましたよ……」

体をくねらせながら話しかけてくるめぐみん。めぐみんの後ろの建物が武器屋のようなので、3号は初心者向けの武器を買いにきたことを伝えて店内に入ったが、扱っている武器の種類の高さに圧倒されてしまう。

わかばシューターのような初心者向けの武器はあるかどうか店員に尋ねたものの、店員にはわかばシューターという例えが伝わらなかったようで、首を傾げられてしまった。3号が自分は駆け出し

しの冒険者であることを話すと、店員は納得した様子で武器を1つ持ってきてくれた。

片手で扱う小さなナイフ。カズマやダクネスが使う剣と比べると遥かに小さいが、この街周辺の魔物と戦うには十分なものだろう。3号はこのナイフを買った後、勧められるがままに腰に武器を

取り付けるベルトまで買ってしまった。合わせて5000エリス

程度の出費だが、これからはこの武器を使えばお金を稼ぐのも楽になるはずだ。

満足した3号は店を出て、早速ギルドでクエストを探そうとギルドへ向かう。奇妙なダンスを踊るめぐみんはいなくなっていたが、おそらくめぐみんもギルドにいるだろう。

ギルドに到着した3号だったが、ギルドにいたカズマが何やらテーブルに置いたコップに向けて手を構えているようだ。何をするのか眺めていると、なんとカズマの手から水が流れ出し、コップ

に向けて注がれていった。魔法を使ったような不思議な光景だったが、一体何をしたのだろうか。気になった3号は、掲示板に向かう前にカズマに話を聞くことにした。

「おはよう3号。俺、初級だけど魔法スキルが使えるようになったんだ。初級とはいえ、これでちよつとは冒険者らしくなったかな」

どうやら本当に魔法だったようで、カズマはそれを習得したらしい。ここぞとばかりにナイスを送った後、3号はふと1つの質問を思いついた。カズマはこの世界に電波の発信源を置いて3号を呼

んだはずだが、一体誰から発信源を受け取ったのか。そもそも、電波を送るなら自分よりもっと強い冒険者に送るべきではないだろうか。それを聞いたカズマはうーんと唸り、発信源を受け取っ

た日の事を話してくれた。

「あれは数日前、めぐみんがパーティに入った日だな。仲間が欲しいとギルドで話していたら、知らない人からアンテナの付いた木彫りの熊を渡されたんだ。これを地面に埋めれば仲間がやってく

るって言うから、適当な場所に埋めた後、次の日に様子を見に行ったら3号が来ていたんだ。胡散臭かったけどお金はいらないっていうから言う通りにしたんだが、まさか別の世界から来るなんて考えもしなかったよ」

この世界に3号を呼んだのは知らない人物のようだが、問題は木彫りの熊の方だ。3号はもしかしたらその熊を知っているかもしれない。

「その熊を埋めた場所を詳しく教えてくれって？確かアクセルから近場の森に埋めたんだが……ああ、もしかしたらスマホを使った方が早いんじゃないか？まあ、あの熊が電波を今も発信してたらの話だけだよ」

3号はカズマに礼を言うと、馬小屋まで全速力で走りだした。人目を気にせずインクの中を泳ぎたいところだが、今は我慢してひたすら走り続ける。通行人を器用に避けながらなんとか馬小屋まで

で辿り着いた3号は、スーツケースに入れた自分のスマホを取り出し、電源を入れる。充電はまだ余裕があるのを確認し、地図を確認。相変わらず何も映らないが、まだあの地点から電波が発信され続けている。

3号は馬小屋の外に出ると、周りに人がいないかどうか見渡し、すぐにスーパージャンプの準備をする。3号は、この世界に初めて降り立った場所へ向けて再びジャンプした。

あの時と変わらない風景だが、今回は目的が違う。3号は着地と同時に足元の土を掘り始めると、すぐにアンテナが見えてくる。熊の身体が少し見え始めた段階で3号は地中から木彫りの熊を

引っ張り上げた。3号の知っている見た目そのままだが、もし本当にこの熊がクマサンなら……

『よくきてくれたね 待っていたよ』

間違い無い。このアンテナの付いた木彫りの熊は、3号の世界にいるはずの人物だ。クマサン商會を經營し、シヤケを討伐しその資源を集めるアルバイト、サーモンランをインクリング達に斡旋

しているアンテナの付いた木彫りの熊。3号の世界でクマサンと呼ばれる人物が、そこに埋められていた。

『単刀直入に言うが、キミをここに呼んだのはワタシだ。3号、キミにどうしても頼みたいことがあってね…… 少々強引だけど、こちらに呼ばせてもらったよ』

クマサンがスピーカー越しに話しかけてくる。クマサンが3号をこの世界に呼んだそうだが、3号は自分が呼ばれた理由に見当が付い

ていた。

『もう知っているかもしれないが、隔離エリアにいたシャケがカンケツセンを使ってこの世界に侵入してきている……既にカンケツセンは閉じているけど、おそらくかなりの数のシャケがこちら

に来ていたろう。詳しい話をしたいから、とりあえずワタシをアクセルの冒険者ギルドまで運んでほしい』

アクセルの街に現れたシャケは、やはり3号の世界のシャケだったようだ。3号は地中からクマサンを掘り出し、急いでギルドまで運ぶ。クマサンに聞きたいことは山ほどあるので、運びながらク

マサンに質問をする3号だったが、1つも答えてはくれなかった。どうやらギルドに着くまでは何も話してくれないらしい。

『よし……ルナさん、前に話した通りワタシを受付の横に置かせてもらおうよ』

クマサンが受付の人に話しかけると、どうぞと返事が返ってきた。急いでギルドに向かった3号は、現在受付の横に置かれたクマサンと向かい合っている。現在のギルドには、ルナと呼ばれた受

付の人以外は誰の姿も見えない。改めてクマサンと向かい合うと、スピーカーから音声がかえってくる。

『早速だが話をさせてもらうよ。少々長くなるが、落ち着いて聞いてほしい。まず、なぜワタシがここにいるのかだが、大体は先ほど話した通りだ。この世界に流れ込んできたシャケを討伐するた

めに、一足先にこちらに来たわけだ。どうやってこちらに来たのか？……企業秘密、と言っておこうか』

肝心な所を教えてくださいたくないのがクマサンだ。バイトの研修でもぎっくりとしか教えてくれなかったような気がするが、今は他にも聞きたいことがある。3号は自分がいつ帰ることができるかを質

問した。

『アクセルの街周辺に現れたシャケを全て討伐できたら、ハイカラスクエアに帰る予定だ……王都やレベルの高い冒険者がいる場所は何が起きてもおどろかなくなるかもしれないが、ここは駆け出し

の冒険者が集まる街…… 3号、キミがこの街の冒険者と協力してシヤケを全て討伐した時が、ワタシ達の帰る時だ』

スーパージャンプを使えないのにどうやって帰るのか尋ねても、企業秘密としか教えてくれないのがクマサンだ。3号は、他に何か話すことはないかクマサンに質問する。

『そうだね…… 隔離エリアとこの世界の違いを説明しておこうか。隔離エリアでは専用の装備でシヤケを討伐してもらうが、ここではキミが普段身に着けている装備でシヤケに挑んでもらう。地

面を塗ればスペシャルウエポンが使えるようになるから、スペシャルパウチを配布することは無い…… ただ、ブキに関してはキミが使いたいブキをこちらが支給する予定だ。スーツケースに入

りきらなかった大きなブキ…… ローラーやチャージャー、スピナーといった物は、ワタシが用意しよう』

一気に話が進んだが、要約すると3号が好きなブキでシヤケと戦うことができるということ。3号はクマサンの手厚いサポートに感謝するが、1つ気になる点が生まれた。ブキチに頼んだブキの輸

送は一体どうなったのだろうか。

『キミの知り合いのブキ屋…… ブキチ君だったね。彼には悪いが代わりに輸送は全てキャンセルさせてもらったよ。ここまでブキを運ぶのは大変だからね』

一体どうやって連絡をとったのか非常に気になるが、今は答えられないだろう。3号は黙ってクマサンの話を聞く。

『以上で説明は終わりだ…… 早速だが、オオモノシヤケの依頼が届いているよ。どうやらバクダンが数匹、廃城付近で目撃されているらしいね…… 珍しくザコシヤケ達はいないようだ』

クマサンの話によればあまり人が近寄らない場所だそうだが、バクダンはオオモノシヤケの中でも危険な部類だ。駆け出しの冒険者がバクダンに出会う前に、一刻も早く討伐しなければ。

『ワタシの身体の腹のほうについている無線機を持っていくといい…… スマートフォンは通じなくても、この無線機なら通話ができるよ。現場に到着したら、ワタシが指示を出そう……』

3号はクマサンから無線機を受け取ると、勢い良く廃城に向かおうとするが、3号は廃城の場所を知らない。ギルドの門を出た所で気が付いた3号は、試しに無線機を使ってクマサンに廃城の場所を聞いてみる。

『アクセルから北に歩いた先にある…… 3号、支給するブキはどうするのか聞いていないが、今回はバクダンが相手だ。ザコシヤケもないようだし、比較的扱いやすいスプラチャージャーを支給させてもらうよ』

クマサンの素早い対応のおかげで、足を止めずにアクセルを出ることができた3号。そのまま走り続ける3号だったが、思ったより早く廃城が見えてくる。3号の世界では見られないほど大きな城

だが、どこことなく不気味な雰囲気漂っている。とても大きな城なので、見るだけならかなり遠い場所からでも見えるようだ。

そのまま廃城に近づいていく3号に、何やら飛行する物体が飛んできく。スプラチャージャーにしては大きい、一体なにが飛んできたのだろうか。中身を考えると、3号の無線機から声が

聞こえてくる。

『荷物が到着したようだね…… そのドローンには、スプラチャージャーと3日間ほどの食料、そしてテントが入っている。オオモノシヤケが現れるまで、その周辺を探索してほしい。』

誰かが通りかかったり、大きな物音がすればきつとオオモノシヤケは現れるだろう…… それを防ぐためにも、3号が先にオオモノシヤケを見つけ出し、討伐するんだ』

3号はしばらくここでオオモノシヤケを探さなければならぬそうだ。隔離エリアにいるシヤケは決まった場所に現れるので見つけるのは簡単だが、廃城付近となるとかなり範囲が広い。オオモノシヤケの一種であるバクダンはかなり身体が大きい、それでも

見つけ出すには数日かかってもおかしく無いだろう。

テントを張り終えた3号は、まず廃城を探索することにした。あの建物の頂上から辺りを見下ろせば、身体が大きなバクダンなら見つかるかもしれない。時間が無いのですぐに廃城まで向かいた

いが、たどり着くにはもうしばらくかかるだろう。3号は視界に廃城を入れたまま、真っ直ぐに走り出した。

「その奇妙な水鉄砲を持った冒険者。俺の城に何の用だ？まさか俺を倒しに来たのか？」

途中から周りに人がいないことに気が付いた3号は、地面を塗りながら廃城を目指して泳いでいると、大きな首の無い馬にのった人物が話しかけられた。よくよく見ると、馬だけではなくこの人

物も首が無いような気がするが、そういうものなのだろうか。3号は廃城とこの付近に潜んでいるオオモノシヤケを見つけるために、廃城に行きたいことを伝えた。

「あー、あれか。あの辺り一面にインクが飛び散る爆弾をひたすら投げる迷惑なやつを倒しにきたのか。……ということは、お前、もしかして俺のこと知らないのか？」

この首が無い人はオオモノシヤケを目撃しているようで、有力な手掛かりを手に入れることができた。やはりこの付近にバクダンがいるようだが、この首の無い人は有名な人物なのだろうか。こ

の世界に来て日が浅い3号は、正直に自分が駆け出しの冒険者で、あなたのことは全く知らなかったと伝えると、首が無い人は残念そうに話し始めた。

「俺のことさっぱり知らないんだな……いや、全然気にしてないぞ？一応言っておくが、我が名はベルディア。種族はデュラハン、最近この城に越してきた者だ」

ベルディアは最近この城に引越してきたようなので、こちらも同じように挨拶する。名前は3号、種族はインクリングで、最近アクセルに引越してきた者。お互いに種族は人間ではない

ことに驚いたベルディアは、戸惑いながら話しかけてきた。「えっ人間じゃないの？さつきから変な奴がいるなど思ってたけど、人間っぽいのがあの迷惑な奴を討伐するために来たのか……まあ、一筋縄ではいかないだろうが頑張ってくれ。俺もあいつの爆弾の音は

うるさいと思ってたんでな」

その後、ベルディアからバクダンを見かけた場所を詳しく教えてもらった3号は、馬に乗って城へ帰るベルディアを見送った後、廃城に行く予定を変更してバクダンが目撃された場所に向かった。

結局、今日はバクダンを見つけられずに夜になってしまった。木々がなぎ倒されたような跡が残っていたのでそこにいたのは間違いないが、周辺を探したもののバクダンの姿は見えなかった。

今日はもうテントに帰って休憩を取ることにした3号は、クマサンにバクダンは見つからなかったことを伝え、インクの道を作り出した。今日はひとまず休憩を取り、明日は目撃された場所から

少し離れた場所を探索しようと考えながら、インクの中を泳いでいった。

翌日。昨日の帰り道にわざと物音を立ててみたり、特に意味なくスプラッシュボムを投げたりしたもの、バクダンは現れないまま朝になった。3号はスプラチャージャーと一緒に送られてきた

パンを食べ終えて、バクダン探しを再開する。しかし、今度はどこを探してもバクダンの痕跡すら見つからない。どうしたものかと歩き回っていると、クマサンから通信が入ってくる。

『3号、今回の搜索は厳しいかもしれないね…… どうやら街の近くに魔王軍の幹部が住み着いたらしく、弱い魔物は隠れてしまったらしい…… 勿論、それを聞いた冒険者も近寄らないだろうか

ら、バクダンの痕跡を探すことも難しいだろう…… 慌ててはいけないよ だが急いで探すんだ』

魔王軍の幹部と言われてもいまいち分からない3号。ただ、バクダンが現れないのはその幹部のせいかもしれないと考えると、きつとかなりの力の持ち主だろう。昨日出会ったベルディアのよう

に、馬に乗っていたり首が無かったりするのもかもしれない。その後も塗っては食べてを数回繰り返したが、ついに日が暮れてしまった。3号は廃城周辺の広い範囲を調べたものの、バクダンどころ

か魔物も人も見つからない。魔王軍の幹部の影響を身をもって味わった3号だったが、こんな状況でも1人だけオオモノシヤケを見か

けた人物を知っている。

3号は、明日廃城にいるベルディアにオオモノシヤケを見たかどうかもう1度尋ねることにする。夕飯をテントで食べ終え、テントの中で2度目の眠りについた。

バクダンを探して3日目。今日という今日はバクダンを討伐したい3号は、朝食を食べ終わるとすぐに廃城に出発しようとするが、よく耳をすませると遠くの方から微かに声が聞こえてくる。

そのまま声がする方向に耳をすませていると、段々声が大きくなってくるように感じる。よく考えれば聞いたことがある声のような……

「うわあああああ！めぐみん、後ろにまだいるか？あのやたらでかい魔物は俺達を追ってきてるのか!?俺もう振り向きたくないんだけど！」

「私だって振り向きたくないですよ！ほら、あそこになぜかテントがありますよ！カズマ、あそこに逃げ込みましょう！」

今日は3号が張ったテントに来客があるようだ。この声はカズマとめぐみんの声だが、急にこのテントに逃げ込むとなると、おそらくバクダンと遭遇したのだろう。3号はテントの外に手を出

し、こちらに来るように合図を送る。その数秒後に、カズマとめぐみんがテントの中に流れ込んできた。

「すみません、助かりました！きつきまででかい魔物に追われていて……って、3号だよな？しばらく見なかったけど、なんでこんな所にテントを張ってるんだ？」

「つ、疲れた……3号、こんな所にテントなんか張ったら魔物に襲われますよ……」

ここにきて頼もしい戦力が来てくれた。頭の切れるカズマに、一撃必殺の爆裂魔法使いめぐみんがいれば、オオモノシヤケを討伐するのも楽になるだろう。早速3号はクマサンに報告しようとするが、クマサンの方から通信が入ってきた。

『3号、キミの近くにオオモノシヤケが現れたようだ…… 反応はか

なり近いが、目視で確認できないかい？』

クマサンからオオモノシヤケの反応を知らせてくれたが、カズマ達の反応を見ると、すぐそこにバクダンが来ていてもおかしくない。

3号が一旦外を確認しようとしたその瞬間。爆音とともにテントが宙を舞った。

バクダンと爆裂魔法

激しい音とともに一瞬身体が浮き上がり、その後強烈な重力がかかるその感覚は、さながら有名遊園地スメーシーワールドのジェットコースターに乗っているようだった。

しかし、ここには遊園地を見下ろす綺麗な景色も無ければ、乗客を守る安全バーも無い。気が付けばすぐに地面に叩きつけられ、激しい痛みが身体に伝わり、同時に視界が遮られる。すぐに外に

出てバクダンと戦わなければいけないが、なぜか身体が起き上らない。手にはスプラチャージャーを握っている感触があるが、3号は現状を全く把握できずにいた。

「うう……、カズマ、生きてますか？外で何かが起こったようですけど、吹っ飛ばされた後はよく覚えていなくて……」

「俺は大丈夫だ。その様子だと、めぐみんも大した怪我はしてないよ。うだが……あれ、3号？どこに行ったんだ？」

何やら上から声が聞こえてくる。カズマとめぐみんは無事なようだが、2人の声がとても近い場所から聞こえてくる。試しに身体に力を入れてみると、すぐにカズマからの反応があった。

「なんだか床が動いているような……って、3号、下敷きになってるじゃないか！大丈夫か3号、身体が曲がっちゃいけない方向に曲がってるぞ!？」

イカに骨は無いので何も問題は無いはず。カズマがその場から少し移動すると、すぐに身体が動くようになった。2人にすぐにテントから出るように指示した後、真っ先にテントの外へ出て行っ

た3号だったが、既にバクダンは攻撃の準備を始めていた。2人が攻撃を受けないように一気に距離を詰めると、相手は狙い通り足元にボムを投げた。すぐさま後ろに下がって爆風を回避し、テント

から出てきた2人に指示を出す。

「なあ3号、一旦距離を取ってチャンスを待って言うけどさ、まさかあれと戦うつもりじゃないだろうな？でかいし、爆弾投げてくるし、俺は逃げたほうがいいと思うぞ」

確かにバクダンの身体はオオモノシヤケの中でもとても大きな部類で、その強靱な皮膚はインクどころかこの世界の武器もそう簡単には通じないだろう。だが、弱点が無いわけでは無い。

3号は1秒ほどブキにインクをチャージすると、静かにバクダンが攻撃を仕掛けるのを待つ。照準は頭、相手がボムを作りだした瞬間にチャージャーで作りかけのボムを撃ち抜けば、その時点で3

号の勝利だ。相手は自分の作ったボムで自爆して、その場には3号の青いインクだけが残る。

「まだ逃げるには早いですよ。私はまだ今日の分の爆裂魔法を撃ってませんし、あの程度の魔物なら多分一撃で倒せますよ。正直とても撃ちたいのですけど。撃っていいですよね？」

カズマにめぐみんを抑えるよう頼み、冷静に頭に照準を合わせ続ける。実際、爆裂魔法を撃てばどんなオオモノシヤケでも倒せるだろうが、目の前のバクダンは3号でも倒せる相手だ。じっとバ

クダンの頭上を見つめていると、ついにその時が来た。頭に着いた作りかけのボムにフルチャージのインクを撃ちこむと、一瞬でバクダンの巨体が爆発し、綺麗な金色の球体を落としていった。

「あれ？後ろ向いてたらいつの間にか魔物がいなくなってるってことは、まさか3号が倒したのか？」

『その通りだ。3号、よくやったね……今回はイクラコンテナを設置していないから、金イクラは集めなくてもいい……さて、今の戦いで周囲のシヤケが集まって来ているよ。あと2回ほど襲

撃が来るだろうけど、この街の平和のために、頑張ってくれたまえ』
「3号、さつきから話してくるこの声は誰なのですか？なんだか怪しい口調ですし、今しれっと不穏なことを言いましたよね」

2人にもクマサンの説明をしたいが、今はシヤケの討伐のほうが優先だ。残り2回の襲撃となると、今のバクダン1匹で一旦襲撃は終わったらしいが、次も同じようにオオモノシヤケ一匹だけが

襲ってくることはないだろう。噂をすれば、アクセルで見かけたザコシヤケが数匹近づいてくる。

『隠れていたシヤケたちも今の戦いで姿を現すだろうね……3号、

シヤケに接近された時は、腰に付けたナイフを使うといい……コ
ジヤケやシヤケなら、ある程度対応できるだろう』

3号が現在持っているブキ、スプラチャージャーは一発インクを放
つのに1秒ほどインクをチャージしなければならぬ。集団で戦う
ザコシヤケを相手にするには少々分が悪いので、カズマに前線
を任せ、3号は流れてきたシヤケとオオモノを討伐、めぐみんには
いざという時に爆裂魔法を撃ってもらうため、シヤケに詠唱を妨害さ
れないように守り抜かなければならない。

「うおお！あれが歩くシヤケだよな！あれと戦わないといけないのか
……いや、待てよ？前衛の俺が後衛を守りつつ、いざとなったら仲間
の魔法使いやスナイパーが助けしてくれるって、まさに冒

険者の戦鬪って感じだよな……よし、ここは俺に任せろ！3号とめ
ぐみんは援護を頼む！」

何やらぶつぶつと独り言を喋っていたようだが、カズマもやる気にな
ってくれたようだ。前に出たカズマは手に持った剣でシヤケをな
ぎ倒し、青いインクが飛び散っていく。3号のインクで倒さ

なくても、勝手に3号と同じインクが飛び散るのはなぜなのだろう
か。気になった3号は、シヤケを狙撃しながらクマサンに質問する。

『この世界では無害なインクは青色、有害なインクは緑色になってい
るようだ……ワタシも色々実験をしてみたけど、シヤケのインクは
緑、それ以外のインクはどうしても青色になってしまおうよう

だ…… これまでは橙色だったが、3号のインクに合わせられたの
だろうね……』

話をしている間にシヤケが全滅したようで、カズマがこちらに駆け
寄ってくる。カズマの攻撃にあっけなく倒されたシヤケに不満を示
しているのか、魔法を撃っていないめぐみんは不満そうに杖

を振りまわしている。確かにザコシヤケはこの世界の魔物に比べ
るととても弱い部類に入るだろう。しかし、オオモノを含めたシヤケ
が集まればそうもいかなくなるのが現実だ。2度目の小さな

襲撃を凌いだ3号達に、クマサンから無線が入ってくる。

『オオモノシヤケがこちらに接近してきているようだね…… 普段の

サーモンランと違って曖昧な指示しかできないが、基本は同じだよ…… 仲間と協力して、この状況を切り抜けるんだ」

今までのサーモンランと同じなら、この襲撃に耐えれば一度アクセルに帰るはず。3号はブキにインクをチャージし、現れたバクダンへ照準を合わせる。シャケの群れにバクダンが加わったこと

でカズマの負担は増えるが、これまで通りオオモノシャケを3号が討伐し、ザコシャケをカズマに任せればいつかは全滅させられるはずだ。

「うわああつ！3号、あいつ絶対俺を狙って爆弾を投げてきてるんだが！これじゃ爆弾が邪魔でシャケと戦えないんだけどー！」

そう都合良く話は進まないらしい。バクダンの狙いがカズマに切り替わってしまったようで、カズマが爆風を避けるのに必死でザコシャケの相手をできていない。カズマの逃げ道を作るために3

号がザコシャケを代わりに討伐するが、オオモノシャケは生き残ったままだ。隣のめぐみんが爆裂魔法を撃ちたそうにこちらを見ているが、今はまだその時ではない。

このままではいつかカズマがボムをまともに受けてしまい、前線が崩壊してしまう。3号はカズマをこちらに呼び、一旦3人でシャケから距離を取ることを伝える。

「賛成だ。このままじゃ爆弾を食らうかフライパンで袋叩きにされるからな。……3号、でかいシャケが2匹こっちに来てるけど、冗談抜きで逃げたほうがいいんじゃないか？」

新たに2匹のバクダンとザコシャケの群れが合流してしまっただが、諦めるにはまだ早い。こちらには一撃必殺の爆裂魔法使いがいる。めぐみんをザコシャケから守り切り、オオモノシャケに爆裂

魔法を撃ち込めばどうにでもなるが、まずは詠唱する時間を稼がないといけない。

「ようやく私の出番ですね……ふふつ、この頼りにされながら魔物の群れに爆裂魔法を撃ち込むなんて、そ、想像しただけで、えへへ……」
「確かに爆裂魔法ならなんとかなるかもしれないけど、どうやって時間を稼ぐんだ？あれだけのシャケの群れ、俺と3号じゃ処理しきれな

いと思うんだが……」

シヤケから逃げるように走りながら話を続ける。カズマにザコシヤケの相手をしてもらうことに変わりはないが、3号には7秒ほど時間を稼ぐ手段がある。それを行うためには、もう少し地面を塗らなければならぬ。

「おつ、まだ何かアイデアがあるみたいだな。とりあえず俺達は先に走るから、3号は地面を泳ぎながらついてきてくれ。ほら、めぐみんも行くぞ！」

カズマがにやけたままのめぐみんの手を取ると、ペースを上げて走り始めた。3号もカズマが走る方向にインクを発射して地面を塗り、泳いで2人に追いつけばまた地面を塗ってスペシャルゲー

ジを溜めていく。3人の移動するスピードにシヤケは追いついていないようで、十分に距離が取れた。3号は2人に声を掛け、シヤケの方に振り向いた。

「いよいよ戦うのか……って、3号の頭が光ってるのは大丈夫なのか？ 何だって？ 準備完了の合図？ ああ、まあ、3号がそういうなら問題ないんだな」

「カズマ、3号、私が唱えるまで持ちこたえてください！ いきますよ！ ほら、早く！」

カズマとめぐみんの温度差が凄まじいが、とにかく準備は整った。3号はどこからともなく大きな機械を取り出すと、ザコシヤケに向けてインクを放ち始める。

「待て待て待て、何だそれ！ 怖いんだけど！ もうそれインクじゃないよな？ レーザービームってやつだよな？」

その通り、3号が取り出した機械の名はハイパープレッサー。強力なスペシャルウェポンの一種で、ありとあらゆる地形や壁、遮蔽物を貫通し、どこまでも届くインクを放つ。

衝撃波を纏ったインクのレーザーがザコシヤケを蹴散らしていくが、運よくこちらまで辿り着いたシヤケもカズマが倒してくれる。遠くのバクダンまで同時に攻撃したい所だが、今はザコシヤケの処理を優先し、容赦なくインクのレーザーを浴びせていく。

「3号の世界じゃこんな兵器を使って戦ってるのか……？まあ、俺の仕事が楽で助かるけどな。3号、一応言っておくけどそれ滅茶苦茶危ないから絶対アクセルで使うなよ？フリじゃないからな？」

大体のザコシヤケを倒した所で、ハイパープレッサーを使える時間は終了した。あとは詠唱を終えたためぐみんにバクダンを任せるだけだ。

「何ですかあれ！カッコよすぎじゃないですか！紅魔族が好きそうな必殺技を持っているなんて、さすがですね3号。でも、私も負けませんよ！」

めぐみんは遅れて現れたバクダンへ杖を構え……

「エクस्पロージョン!!」

相変わらずの轟音と爆風。バクダンだけではなく周囲の木々や地面も吹き飛ばす強烈な爆裂魔法が直撃した。しばらく土煙が舞っていたのでバクダンが生きているかは確認できないが、煙の中に

きらりと光る物体が見えるので、恐らく討伐できたはずだ。その場に倒れためぐみんをカズマが背負うと、クマサンから通信が入る。

『3号、よくやったね…… 落とした金イクラは、出来れば持つて帰ってくると嬉しい。金イクラの数だけ、依頼とは別のほうしゅうを用意するよ……』

集めなくていいと言われたものの、やはりクマサンはこの世界でも金イクラを集めているようだ。3号が3つほど金イクラを抱えると、カズマが通信機に向かって話しかける。

「あのー、俺達も結構頑張ったんで、何か報酬が欲しいなー、なんて」
『そうだね…… カズマ君とめぐみん君、キミたちは3号の依頼に非常に親身に協力してくれたようだ…… ギルドに戻ったら、相応のほうしゅうを渡そう』

「うおおおお！やったぞめぐみん！やっぱり冒険者って最高だよな！」

カズマも報酬がもらえて満足しているようだ。今回のシヤケ討伐は、3号1人ではとても厳しい戦いだっただろう。カズマとめぐみんに改めて礼を言うと、クマサンからまた通信が入る。どうやら

テントは勝手にクマサンが回収してくれるようなので、3号は2人と一緒にアクセルに帰ることにした。

2日街に帰っていないだけで街に居た頃が懐かしく感じるのは、ハイカラスクエアのように居心地の良い街だからだろうか。3号は金イクラを抱え、カズマはめぐみんを背負い、アクセルに向

かって歩き始めた。時刻はまだ夕方少し前、今から帰れば夜になる前に帰れるだろう。カズマと夕飯は何を食べるか話しながら、ゆっくりと街に帰る3号だった。

帰り道に特に魔物に襲われることもなくギルドに到着した3号達に、クマサンは早速報酬の話始めた。

『さて、今回のほうしゅうだが、先にカズマ君のほうしゅうを渡しておこう。受付から受け取ってくれたまえ』

「いつもの依頼と同じでいいんだな。さて、報酬は……俺とめぐみん合わせて40万エリス!? ああ、なんだかこの木彫りの熊が輝いて見える……」

「確かに報酬額が多いのは嬉しいですけど、これだけの大金は払えるクマサンは何者なのです? というか、どうして私達の名前を知っているのですか?」

おそらく3号の世界と同じで出所の分からない報酬だろう。クマサンに尋ねても適当にはぐらかされるので、大人しく3号も報酬を受け取る。

『3号、キミには金額だけで言えば5万エリスが報酬だ。それともう1つ、この端末をプレゼントしよう……特別な仕様のスマートフォんだ。ワタシと通話する以外にも、この世界基準の時計、限

られた地点にしか飛べないが、スーパージャンプできるように改造している。これからの移動に役立ててくれたまえ』

様々な不満をもみ消すような豪華な報酬だ。どうして海でもないのにシャケが現れるのか、ザコシャケが大量に居たのにどうしてチャージャーを持たせたのか、そもそも何故この依頼を3号1人に

任せたのか、クマサンに聞きたいことは山ほどあるが、一応報酬を

受け取っておく。

『カンケツセンが繋がった場所はこの世界の様々な水場でね……これからも海以外の場所に現れるだろうけど、これからもよろしく頼むよ……』

不満が顔に出ていたのだろうか。3号は考えていたことを当てられて少し驚いたが、次は金イクラをどこに納品すればいいか尋ねる。『本来はギルドにイクラコンテナを設置する予定だったのだけど、少し時間が掛かってしまつてね…… 受付に預けておいてくれたまえ』言われた通りに受付に金イクラを預けると、ポケットに入れていたクマサン印のスマートフォンが震えた。一応確認してみると、アクセルの地図に冒険者ギルドと馬小屋のマークが追加されている。これはもしかや馬小屋にジャンプできるのではないだろうか。

『今回は特別に3つのボーナスだ…… ギルドと馬小屋へジャンプできることと、馬小屋にスマートフォンの充電器を設置しているよ……』

「3号の部屋でスマホの充電ができるのかよ。この世界でスマホが手に入ったらお世話になりそうだなー。まあ、そんなこと無いだろうけど」

金イクラを納品し、報酬も無事に受け取った3号。クマサン印のスマホによると、現在の時刻は午後5時らしい。夕飯を食べるにはまだ早いので、3号は一度馬小屋に帰って休憩することにした。

早速人通りの無い路地に移動し、馬小屋に向けてスーパージャンプする。アクセルの街並みを見下ろしながらジャンプする感覚は癖になりそうだが、ギルドから馬小屋までは数秒で到着してしま

う。3号は一瞬だけ映る美しい風景を目に焼き付けながら、馬小屋へ飛んだ。

「きゃああー何!?隕石でも降ってきたの!?!……つて3号じゃない。もう、驚かせないでよ」

馬小屋に無事着地したものの、アクアを驚かせてしまったようだ。作業を着ているので仕事帰りだろうか。アクアに驚かせたことを

謝ると、3号は部屋に帰っていった。

一時間ほど休憩しようとして横になり、身体を伸ばしながら休んでいると、何やらどたどたと足音が近づいてくる。一体誰だと考える前に、アクアが部屋に駆け込んできた。

「3号？今馬小屋に飛んできたことは聞かないでおくわ。でもね、そのお金の匂いを誤魔化そうだったってそうはいかないわよ！教えなさい！どうやって稼いだのか教えなさい！」

スマホや新しく買ったナイフを見つけたアクアは、3号にそこそこ大きな収入があったことを感じ取ったらしい。3号は適当にカズマとめぐみんの3人でオオモノシヤケと戦ったと話すと、アクアは顔をしかめながら質問をしてくる。

「私に秘密で稼げる依頼を受けるなんて、あんのヒキニート、帰ったらゴッドブローの刑ね。それで、一体いくら稼いだのよ？そのオオモノシヤケとやらを倒せば幾ら稼げるのよ？」

カズマは決してアクアに秘密で依頼を受けたわけでは無い。理由は分からないが、めぐみんと散歩していた所にたまたまオオモノシヤケと出会っただけだ。3号はそれをアクアに伝えると、アク

アの顔が一旦落ち着くが、カズマとめぐみんが稼いだ金額を伝えると、再び不機嫌な顔に戻ってしまった。

「よ、40万エリスですって!?!3号、私は今からカズマに殴り込みに行くから、今度もし稼げる依頼があったら絶対に私に教えなさい！いいわね！」

3号に鬼気迫る勢いで話したアクアは、すぐに部屋から出て行った。アクアもサーモンランに興味があるかどうかは知らないが、今度オオモノシヤケが現れたらアクアも誘ってみることにする。

休憩するため再び横になると、今度は眠気も一緒にやってきた。丁度いいのでこのまま眠ることに決めた3号は、目を瞑り、静かに身体のを抜く。

夕飯の時間までの、少しの休憩を満喫する3号だった。

人間ではない生き物

何やら外が騒がしいように感じる。周囲の物音で目を覚ました3号は時間を確認すると、現在は午後7時を少し過ぎた位だった。ギルドに夕飯を食べに行こうと立ち上がった時、ポケットから大きなアラーム音が聞こえてくる。クマサンからの通信だろうか。

『3号、今アクセルはキミの話題で盛り上がっているようだね……とにかく、身を隠すためのギアに着替えたほうがいいだろう。着替えたらもう一度連絡してくれたまえ』

突然クマサンに着替えると言われ驚く3号だが、急な用事があるようだ。

3号は身を隠すギアパワーが付いた服をスーツケースの中から探し、1つ見つけた。大きな锚がプリントされた白いTシャツ、これにはインクの中を泳いでも周りにインクが飛び散らなくなる効果

が付いていたはず。3号は早速着替えて、クマサンに連絡した。

『イカニンジャが付いたギアがあつたようで何よりだ……さて、簡単に説明すると、この街に魔物が入り込んだと騒ぎになっていてね……その魔物は青いインクを吐き出して攻撃するらしい』

青いインクで攻撃する魔物。3号は、その魔物を討伐しないといけないのかクマサンに尋ねた。

『いや、その魔物は恐らくキミのことだろう……困ったことに、シャケと間違えてギルドに報告してしまった人がいたみたいだ。カズマ君やその仲間が魔物じゃないと説得しているようだが、ギ

ルドの職員は耳を貸さなくてね……3号、今からワタシが話すことをよく聞いてほしい』

少し休憩している間に大変な騒ぎになっているようだ。駆け出しの冒険者が集まる街に魔物が侵入したとなると、大事になるのも無理はない。3号はクマサンの話の続きを静かに待った。

『今から3号がすべきことは、誰にも見つからず、誰にも討伐されずにギルドまで来ることだ。ギルドの職員に直接話せば、きつと納得してくれるだろう……外に機動力に優れたブキを置いて

いる。上手く活用してくれたまえ』

見つかると面倒なことになるから見つかつちやダメだぞ、というクマサンなりのメッセージだろうか。3号は静かに部屋の外に出ると、床にはシールが貼られた、3号の身長ほどもある大きな筆の

ような物が落ちている。

軽く機動力に優れたフデと呼ばれるブキの一種で、素早く地面を塗り進み、振り回してインクをばら撒くブキ、その名はパブロ。機動力はあるものの、下手に振り回せば住民にとって大迷惑にな

りかねない為、扱いには十分注意しなければならないだろう。3号はパブロを拾い上げると、馬小屋の周りに人がいないか少し確認し、ギルドに向かって慎重に進み始めた。

ギルドの近くまで来たものの、思った以上に冒険者が街を見回っているようで、中々ギルドへ近づけない。そもそも、見つかつてはいけないはずなのにどうしてこのような大きなブキを担がなけ

ればいけないのだろうか。塗り進んで素早く逃げたとしても、塗る跡が残るのでいつかは追いつかれるだろう。

3号は疑問に思いながらパブロを持ってふらふらと歩いていると、1人の冒険者に声を掛けられてしまった。この冒険者も街に入り込んだ魔物を探しているようで、青い髪型の3号を疑っているの

だろう。見つかつてしまったものは仕方がないので、上手く自分が魔物ではないと誤魔化さなければならぬ。

少々考え込んだ3号は、自分は遠くの国から来たさすらいの画家だと嘘をついた。この大きなフデを役立てるための苦しい言い訳だが、相手は納得してくれたようだ。相手を見送った3号は、再

びギルドに潜入するべく移動を始める。この世界の潜伏スキルを上手く使いながら、ギルドの裏手まで到着したその時だった。

「動くな。噂通りの青い頭、人に化けて街に忍び込んだ魔物とはお前のことだな？」

格が違う、と3号は感じた。手に持っている巨大な剣と、身体を覆う分厚い鎧から発せられる雰囲気は、駆け出しの冒険者には到底出せ

ないものだ。

しかもこの冒険者、3号をこの場で討伐する気らしく、剣を構えながらじりじりと距離を詰めてくる。まともに戦えば確実に倒されてしまうことは目に見えているので、何とか逃走できないか必

死に頭を働かせるだったが、ここで2人の冒険者が新たに現れた。「キョウヤ、この人はさすらいの画家だって話してたけど、本当に魔物なの？」

「キョウヤが魔物だって言うならきつと魔物よ！こんな弱そうな魔物、キョウヤならきつとすぐに倒せるわよ」

現れた2人の冒険者は、キョウヤと呼ばれた冒険者の仲間のようにだ。3号は2人が揉めている間に逃げ出そうと思ったが、一瞬でも背中を向ければ確実にあの剣で刺身にされてしまう。

スーパージャンプで逃げ出そうものなら、イカに戻った瞬間にぱつぱりと斬られてしまうだろう。どうしたものかと考えていると、キョウヤと呼ばれた男が3号に話しかけてきた。

「僕の名前はミツルギキョウヤ。女神アクア様選ばれし勇者だ。お前、どうして人に化けて街に忍び込んだ？特に悪さをしていないようだし、僕に襲い掛かってくる訳でもない。お前の目的は一体何なんだ？」

一向に攻撃をしない3号を警戒しているのか、一歩引いて剣を構えるキョウヤ。実際はどう逃げようか考えていただけだが、これでもう少し時間ができた。今更自分を冒険者だと説明しても納得

してもらえないだろうが、下手にパブロを振り回してしまつてはせつかくの話し合いの機会が台無しになる。3号は自分の名前と身分を正直には伝え、ギルドに出頭するつもりだと話した。

「僕は身分を話せと言った訳じゃない。目的を話せと言ったんだ。この街にそれだけ溶け込んでいるようだが、これ以上無駄な事を話すならこの魔剣グラムでお前をこの場で討伐させてもらう」

ギルドに出頭すると話したつもりだが、納得してもらえなかったようだ。この街をインクで塗り替えようとなりました、なんて冗談が通じる相手でもない。万事休すとなった3号だったが、ここでなんと電話

の着信が入る。

3号はキョウウヤに電話に出ると伝えると、早く済ませてくれと武器を下ろしてくれた。

「ちよつとキョウウヤー！こんなに怪しいのにどうして攻撃しないの!? 今なら隙だらけじゃない!」

「何でって、電話の最中に攻撃するのは失礼じゃないか。」

……いやいやいや、どうしてここにスマホがあるんだ!? 当たり前のように取り出したから流されそうだったけど、まさか僕と同じ転生者なのか?」

カズマにも同じことを言われたような気がするが、今は電話が優先だ。クマサン印のスマホを耳にあて、3号は通話を始めた。

『もしもし、カズマです。3号、今どの辺に居るか教えてくれないか? こつちも何とか疑いを晴らそうとはしてるんだけどさ、証拠が無いとダメだとしか話してくれないんだよ。そっちは結構騒が

しいようだけど大丈夫か? まさか冒険者に見つかってるんじゃない? ……』

クマサンが電話を掛けてきたのかと思ったが、意外な人物の声が聞こえてくる。冒険者に見つかってしまったものの、なにやら口論になっているので問題は無いはずだ。3号はギルドの裏手ま

で来ていると伝えると、カズマが話の続きをする。

『裏手にいるんだな? 3号、ちよつと面倒だが今すぐギルドの正門に来てくれ。今ギルドの冒険者は全員街を探索しているから、正面ががら空きの今がチャンスだ。それじゃあ、頑張ってくれよ! 俺達は3号が魔物じゃないって信じてるからさ!』

どうやって3号に電話を掛けたか分からないが、やはりカズマは頼りになる。3号がスマホをポケットに入れ、視線を目の前に戻した。

キョウウヤを含めた口論はいつの間にか2人の仲間の口喧嘩に発展したようで、仲間をなだめる事にキョウウヤは気を取られている。もし逃げるなら今がその時だろう。

3号は床にブラシの部分当て、全速力で路地から逃げ出した。床には3号が塗ったインクの跡がはつきりと残っているが、今回はそち

らの方が都合が良い。

路地を抜けて表通りに出た時、キョウヤは3号が逃げ出したことに気が付いたようで、路地からこちらに向かう3人の足音が聞こえてくる。ちやんと3号のインクの跡を辿ってきているようだ。

「電話が終わったなら終わったって言うてくれよ……くそつ、逃げられたか。まさかスマホを使って油断させてくるなんて、相当頭の切れる魔物らしい」

キョウヤは3号が既に逃げ切ったと勘違いしているが、現在3号はキョウヤの真下のインクに潜っている。ギアパワーの力で波を立てずに素早く路地に戻った3号は、キョウヤ達がこの場を去るの

を確認した後、ギルドに向けてスーパージャンプすることに決めた。

丁度周りに人もいないが、何より一刻も早く食事をしたいと考えていた3号は、すぐさまギルドへと飛び立った。確実に飛んでいる姿を人に見られるだろうが、このまま誰かに見つかって倒されるよりも一か八かジャンプして近道する方に賭けた。

結果が吉と出るか凶と出るかはすぐに分かる。空からギルドの正門を確認すると、確かにカズマの言う通り人の姿は見当たらない。着地した3号は、急いでギルドの中へ入っていった。

ギルドの中に冒険者の姿は見えないが、職員が慌ただしく動いている様子を見ると、結構な大事に発展してしまったようだ。3号はギルドの職員に怪しまれないため、出来る限り堂々とギルドの

奥へ進んでいく。受付に置かれたクマサンの周りにカズマ達がいるのを見つけた3号は、駆け足でカズマの元へ向かう。

『すまない3号…… パブロを使えば楽にギルドまで来ることができると思っただけけれど、目立つブキは渡すべきではなかったね……』
「そりやそうだろ！機動力に優れたブキって言うからどんなもんかと想像したけど、この筆はさすがに大きすぎるって！」

今回はパブロよりもカーリングボムが使えるブキの方が相性が良かっただろう。ただ、3号は無事にギルドに到着したので結果的には

問題無い。

「ほら、約束通り3号を連れてきたわよ！謝りなさい！私を魔物扱いたした事を謝りなさい！」

「あー、受付の人にアクアが文句を言うのはいつもの事だから気にしなくていいぞ。さて、どうやって3号が魔物じゃないと証明するかだ……」

カズマから2つの案が提案された。1つ目はギルドに冒険者を呼んで3号の正体を話すこと。冒険者の前で魔物ではないと証明できれば、きつと職員も納得してくれるとのこと。

2つ目はこのまま身を隠し続け、魔物の騒動が鎮まるまで待つこと。隣にいたダクネスから、1つ目の選択肢は下手に勘違いされれば裁判になる可能性がある、と警告された。しかし、このまま騒動が鎮まるまで待っていてもシャケと戦っていればまた通報されてしまう可能性がある。空腹で頭が回らなくなってきた3号に、思わぬ所から助け舟がやってきた。

「3号、カエルの唐揚げでよければ食べますか？私の分を少し分けてあげてもいいですよ。お腹空いてますよね」

『今日の稼ぎで大量に注文したものを食べきれなかったようだね……食べながらでいいから聞いてほしい。ワタシに考えがあるんだ』

腹が減っては戦はできぬというが、3号はそれをまさに実感していた所だった。めぐみんから渡された唐揚げを頬張りながら、スピーカーから流れる音声をじつと聞く。クマサンのアイデアはカ

ズマの一つ目の提案に近いものだったが、こちらはクマサンならでのアイデアだ。

それを聞いたカズマは納得した様子でギルドの職員に冒険者を集めるよう伝える。少し待っていればギルドに大勢の冒険者が集まるだろう。

魔物を捕獲したため至急冒険者はギルドに集まれ、と放送がされてから数分後、ギルドに冒険者がなだれ込んできたと思えば、あっという間にギルドは冒険者で埋まってしまった。十分な人数が

集まった所で、クマサンがスピーカーを通して話を始める。

『さて、冒険者諸君、ワタシは目の前の木彫りの熊だ…… 皆にはクマサンと呼ばれているがね』

ざわめく人々。突然ギルドに呼ばれたら、置物と思われていた木彫りの熊から音声が出たのだから無理もない。騒ぎ出す人々を気にせずに、クマサンは話を続ける。

『今日ワタシが伝えたいことは、新しいアルバイトの募集だ…… 頑張りによって、初心者でも効率の良いレベルアップと、お金を稼ぐことを両立できる……』

ここまでクマサンが話した所で、冒険者の不満が爆発する。引つ込めだとか、魔物はどこだ、などとヤジを飛ばす者が現れてきたものの、クマサンは全く気にせず続きを話す。

『これは君たちにとって悪い話ではないよ…… 実際、その3人は今日だけで合わせて45万エリスを稼いでいるからね……』

先ほどは騒がしかったギルドが一気に静まり返る。ここからは3号も知っているサーモンランの話だった。ザコシヤケを倒してレベルを上げつつお金を稼ぐ、という内容だったが、オオモノシヤケを倒して金イクラを持ち帰る部分は話されなかった。

あくまでザコシヤケを討伐するバイトという扱いのようだが、魔王軍の幹部の影響で簡単な依頼が減っている今、駆け出しの冒険者がレベルを上げつつお金を稼ぐことができるのはとても嬉しい

話だろう。だが、これはアルバイトの話であって、3号の正体に関する話ではない。このままでは騒動が解決しないが、クマサンは一体どうするつもりなのだろうか。

『さて、このバイトのプロ、たつじんバイトボーイである人物を紹介しよう…… 3号、こちらに来てくれ』

アクアが真っ先にその言葉を聞いて笑っているが、今はそれどころではない。プロと称されてはいるが、任務とナワバリバトルの合間に少しサーモンランに参加したぐらいで、3号よりも遥かに

優れたバイトの達人は何人もいる。恥ずかしいものの、クマサンにはきつと何かアイデアがあるはず。3号は受付の前まで歩いていっ

た。

『彼がインクを使つてシヤケと戦うインクリングと呼ばれる種族で、名前は3号だ。もちろん、彼が人間を襲うことは無いので安心してほしい…… さて、改めて挨拶してもらえるかな』

まさかここまで正面から正体を明かすことになるとは思わなかったが、こうなつてしまつては仕方がない。3号はイカになつたりヒトに戻つたりしながら、自分がどんな種族であるか説明を始める。大体のインクリングの特徴について話した後、騒動を起こしたことを謝罪した。

『今回の騒動はワタシの不手際が引き起こしたものだ。冒険者諸君や3号には申し訳ないと思つているよ…… では、今日はこれで解散にしよう。明日からサーモンランの募集を始めるから、興味

のある人はぜひワタシの元まで来てほしい』

街の冒険者は3号を歓迎してくれているようだ。これから人目を気にせずにスーパージャンプも使え、場合によってはインクに潜ることもできるだろう。一時は命の危機を感じたものの、この結果を見ればこうなつて良かったのかもしれないと3号は感じていた。

カズマは大金を稼いだためか冒険者に夕飯を奢れと迫られているし、アクアも宴会芸を披露して人に囲まれている。ダクネスは疲れ切つたためぐみを介抱しているようだ。いつものギルドが戻つ

てきたこと安心した3号は、今日はもう馬小屋に帰ることにした。クマサンやカズマに礼を言うと、カズマが3号に用があるらしく、耳元で話し始めた。

「3号、今から馬小屋に帰るならさ、一回スーパージャンプを見せてくれないか？俺、聞いたことがあるだけでみたこと無いんだよ」

カズマの頼みを受けギルドの外に出た3号を、大勢の冒険者達が見つめている。目的地は馬小屋、本日3度目のジャンプを披露した。3号が飛び上がった瞬間に歓声が沸き、多くの冒険者と街の

住民が飛んで行った3号を見つめている。多くの人々に見送られながら、3号は馬小屋に着地し、自分の部屋へ向かう。

今日はとても大変な1日だった。朝からシャケと戦い、夜には魔物と勘違いされたものの、最終的に3号はこの街に受け入れてもらえたと見ていいだろう。明日もいい日になるように祈った3号

は、すぐに藁の上に横になり、眠りについた。ギルドでは達人バイトボーイの話で盛り上がり上がっているものの、眠っている3号がそれを知る由もなかった。

日差しが部屋の中に差し込んでからしばらくの時間が経った頃、3号の部屋ではスマホが電話が来た事を知らせていた。眠気を振り払いながら電話に出た3号、電話を掛けてきたのはまたもや意外な人物だった。

『もしもし3号？私よ、女神アクアよ。あんな儲け話があるのにどうして秘密にしてたのよ！クマサンが3号がいないと話が出来ないっていうから一行にアルバイトに参加できないから、早くギルドまで来て頂戴！』

朝からアクアはサーモンランに参加しようとしているようだが、一体何があったのだろうか。ふらふらと外に出た3号は、そのままギルドに向かって飛んだ。

いつものように一瞬で到着、受付に向かうとアクアとクマサンがいた。まだ完全に目が覚めていないので頭が上手く働かないが、クマサンとアクアが言い争っているように見える。

「なんでザコシャケとだけなのよ！カズマと同じようにオオモノシャケと戦わせなさいよ！」

『オオモノシャケはとても危険だからね…… カズマ君は偶然出会ってしまったが、本来は慣れた冒険者やインクリングが戦う相手だ……』

昨日は大変な日だったが、今日も大変な日になると確信する3号だった。

テツパンのアルバイトをしよう

「初心者の私でも簡単にレベルアップして、報酬を受け取ることが出来ました！まだ駆け出しの冒険者ですが、街を守るアルバイトができてとてもやりがいを感じています！」

「髪型や服装は自由ですし、どんな武器を使って戦ってもいいので、覚えてのスキルをすぐに試せる点はとても嬉しいです。サーモンランを通して、仲間との絆も深まった気がします」

受付の横に置かれたパンフレットには様々なサーモンラン経験者の声が記載されている。3号の世界でも同じような物を見た事があるが、このパンフレットの写真に写っているのは全て人間だ。

3号はパンフレットをまじまじと見つめているが、内容に特に驚くことは無かった。金イクラを集める目的ではなく、大量に現れるザコシヤケの駆除が目的になっているが、駆け出しの冒険者にとってはこちらの方が都合が良いだろう。他にはランクアップ制度や報酬について詳しく記載されているようだ。しかし、気になる点が1つ見つかった。

サーモンランにおける注意事項として、オオモノシヤケを見かけたらすぐに連絡して逃げるよう書かれている。このパンフレットによれば、オオモノシヤケはアルバイトを何度もこなした熟練の

冒険者や、ごく一部の限られた冒険者のみが戦えるらしい。3号はその文を見つけると、小さくため息をついた。

正直に言ってしまうと、3号が1人でオオモノシヤケと戦うのは楽ではない。3号の世界のサーモンランでは主に4人一組でシヤケが現れる隔離海域に向かうことから、サーモンランが決して安全ではないことが分かる。

3号も自分と同じインクリングや、カズマ達のようにオオモノシヤケにある程度対抗できる冒険者が増えてほしいと考えていた。

3号がパンフレットを読み終えた頃、アクアがまたしてもクマサンに詰め寄っている。アクアは注意事項に納得できなかったのか、カズマが戦ったように自分も戦わせると訴えているようだ。

『先ほどから話している通り、カズマ君がバクダンと戦ったのは本当に偶然の出来事なんだ…… 彼はたまたま高額なほうしゅうを受け取っただけなんだよ』

「まあ、カズマが偶然戦ったつてのは理解したわ。ただね、上級職のアークプリーストであるこの私が戦えないなんて納得できないわ！あのカズマでも勝てたんだから、私にも勝てるはずよ！」

あのカズマと散々な言われようだが、あれはカズマ1人の戦闘ではない。ザコシヤケを倒す3号とカズマに、めぐみんの爆裂魔法が合わさって得られた勝利だ。だれか1人でも欠けていれば、きつとシヤケを討伐することは不可能だっただろう。

3号は読み終えたパンフレットを棚に戻すと、食事をするためテーブルに向かおうとするが、何やら背後から視線を感じる。なぜだか無性に振り向きたくない3号だったが、威圧感に負けた3号は

ついに振り向いてしまう。そこには、3号に向けて満面の笑みを浮かべるアクアが居た。

「ねえ3号、このごく一部の特別な冒険者つて、3号のことよね？」

嫌な予感がする。カズマに助けを求めべくギルドを見渡すが、残念なことにギルドに来ていないようだ。目の前に本人がいるので口が裂けても言えないが、3号はアクアを上手くコントロール

できるのはカズマぐらいだと思いますので、これから起こるであろう出来事に不安を抱いていた。アクアに連れられクマサンの前に来ると、アクアが得意げに話し始める。

「アークプリーストに達人バイトボーイがいるんだから文句は言わせないわよ。私をオオモノシヤケ狩りに連れていきなさい！」

『……わかった。3号、丁度オオモノシヤケの報告が入っているんだ。近くにイクラコンテナを設置しているから、金イクラの納品はそちらで行って欲しい…… 頼んだよ』

3号はせめてあと3人、カズマやダクネス、めぐみんがギルドに来るまで待つべきだとクマサンに伝えたものの、隣のアクアは3号の意見に反対する。

「カズマとめぐみんは散歩に出かけたわよ。ダクネスは実家で筋トレ

するって言ってたし、何より私の生活が懸かっているのよ！今すぐ出発して借金生活から脱出したいの！」

『2人でのサーモンランは大変危険だ…… それでも出発するのかい？』

前は自分1人に依頼を任せたのにどうしてここまで心配するのか疑問に思ったが、アクアは覚悟を決めたようだ。こうなっては仕方がないので、1人でも多くの仕事がこなせるブキを支給しても

らうようクマサンに注文した。

『スプラマニニューバーコラボか…… 良い選択だろうね。後で届けよう……』

「そうと決まれば早速腹ごしらえよ！カズマに負けないぐらい稼いでやるんだから！」

数分後、3号とアクアは食事を終え、今回の目的地である街の湖へと出発した。前のように沢山のシャケが相手でなければ楽だが、今回はどうなるだろうか。

道中にクマサンからブキを受け取り準備は万端、後は湖でシャケが現れるのを待つだけだ。

湖に到着してすぐ、ザコシャケの襲撃が始まった。とはいえ、3号が持つスプラマニニューバーコラボは射程こそ短いものの、機動力と攻撃力を兼ね備えた万能なブキなので、ザコシャケ相手に特

に苦戦はしない。3号が今最も気にかけている事は、アクアがどれだけシャケと戦えるかである。

「余裕よ余裕！この程度の相手なんてあのカエルに比べたら大したことないわよ！」

手にした棒のような物を振り回し次々とシャケを討伐していくアクア。いや、よく見れば手に持っているのは馬小屋の近くにあった物干し竿ではないだろうか。3号は質問をするか迷ったもの

の、アクアの邪魔をしては悪いと思った3号は自分に襲い掛かるシャケを次々と討伐していく。

その後も難なくザコシャケを倒していったが、アクアの戦闘力は3

号の想像以上に高い。カズマによればアークプリーストは回復が得意な職業だそうだが、こうもシャケをなぎ倒す様子を見てい

ると武闘家や戦士と勘違いしそうだ。

『オオモノシャケが現れたようだね…… 慌ててはいけないよ。だが、急いで探すんだ』

クマサンからの通信を聞いた3号はすぐさま周囲を確認し、こちらに向かうオオモノシャケを発見した。アクアを狙ったテツパンがこちらに突進してきているため、アクアに向かって警戒するように叫ぶ。

「あれがオオモノシャケ？ 全然大きくないじゃない。見てなさい3号、今からあいつを一瞬でやつつけてやるわ！」

嫌な予感がした3号は群がるシャケを片付け、アクアの方へカーリングボムを使って泳いで行く。テツパンはバクダンのように大きくはないが、イカした鉄の車に乗ってこちらへ突進してくる

のが特徴だ。鉄の車はインクの攻撃を受け付けられないが、攻撃し続けて姿勢を崩し、がら空きの背後を射撃すれば討伐できる。

どうやらアクアは正面からテツパンに突っ込み、姿勢を崩してくるようだ。テツパンの背後に回り込んだ3号は、アクアの攻撃を静かに待つ。

「これが女神の生活を掛けた一撃よ！ ゴッドブローおおおっ!! 相手は死ぬっ!!」

テツパンに向けて強烈な一撃が放たれた。まともに受けたテツパンは見事に姿勢を崩し、背後が隙だらけになる。すかさず3号がマニューバーのスライド射撃でテツパンを討伐、3つの金イクラを落としていった。

テツパンを一撃で行動不能にするほどのパンチを放ったためか、シャケ達が一度撤退したが、何やら先ほどからすすり泣く声が聞こえてくる。シャケが一度撤退したので金イクラを運んでいる3

号だったが、視界にうずくまって手を抑えるアクアが見える。様子を見るため近くに行った3号。なんと泣き声の主はアクアだった。

「い、痛い…… 滅茶苦茶痛いよお…… 手が、手がゴンって変な音鳴った

のよ。うう……これ多分骨折れてるわ。ぐすつ」

テツパンを殴った反動で手を痛めてしまったようだ。とはいえ、ア
クアは回復呪文が得意なアークプリースト。3号は回復呪文を使わ
ないのかアクアに尋ねる前に、アクアが急に立ち上がり金イ
クラを運び始めた。大した怪我ではないようで安心する。

「取り乱して悪かったわね。3号も怪我をしたらすぐに治してあげる
から、すぐに言いなさいよ！」

まさかシヤケを倒し過ぎて自分が回復呪文を使えることを忘れて
いたのではないだろうか。3号は金イクラを運び終え、次のシヤケの
襲撃を待つが、湖底からエンジン音が聞こえてくる。

テツパンが再び陸地に上陸したとたん、ザコシヤケ達も一気に湖か
ら姿を現した。一気に相手をするのは骨が折れるので、ここは先ほど
のパンチをもう一度お願いしたい。アクアにゴッドブロー
をテツパンに放つようお願いする。

「えっ？あれもう一回やらなきゃだめ？そ、そのお、手が痛いからもう
やりたくないかなー」

お互い生活が懸かっているのだ。金イクラの数だけ報酬が増える
ので、出来ればすべてのテツパンをゴッドブローしてもらいたいと、
3号はアクアに頼み込んだ。

「生活のため……生活のため！やってやるわよおおおゴッドブロー
おおおお！ぬあああ痛いっ！」

ゴッドブローはテツパンに効果抜群のようだ。3号は難なく討伐
し、金イクラを回収。アクアが怯ませ、3号がとどめを刺しているが、
アクアから抗議する視線が突き刺さってくるので、一度役
割を交代する。今度は3号が怯ませ、アクアが討伐する番だ。

「最初からこれで良かったと思うんだけど……あのね、3号。これ結
構ブラックなバイトよね？私が想像してたのは、こう、弱い魔物と
戦ってお得に稼ぐって感じなんだけど」

確かに、この世界のサーモンランの表向きの目的はザコシヤケを討
伐すること。しかし、ザコシヤケばかり倒してはオオモノシヤケ
が一向に減らない。高額な報酬の代わりに危険なシヤケ

を討伐し金イクラを集めるのが、このアルバイトの裏側の目的なのだ。

高額な報酬と聞いたアクアはさらに気合が入ったようだ。ザコシヤケを蹴散らしつつテツパンの本体を的確に殴るその姿は、さながら熟練バイトガールの動きに見える。

しかし、大量にシヤケを討伐しても金イクラを納品しなければ報酬は増えない。アクアには金イクラの納品もお願いしたいが、これ以上アクアの仕事を増やすのは難しそうだ。

「ねえ3号ー！急に緑色の雨が降ってきて足を動かしづらくなったんだけどー！今日って晴れてたはずよね？」

それを聞いた3号は金イクラを運ぶのをやめ、アクアに今すぐ攻撃するのをやめて逃げるよう叫ぶ。これまでテツパンだけが相手だったが、新たなシヤケが湖から現れたようだ。アクアが3号の

元へ走ってきたことを確認し、追いかけるように突進するテツパンの動きを止め、何とか2人が合流することができた。

「なーんだ、やつぱり晴れてるじゃない。それで3号、あの雨はなんだったか分かる？」

3号は離れた場所にいる奇妙な黒いドームのような物体を指差し、あれの仕業だとアクアに伝える。3号が新たなシヤケを説明する前に、ドーム状のシヤケから一発のミサイルが放たれ、弱点で

ある本体が露わになった。あのミサイルを撃ち落とさないと、もう一度雨が降ることになる。

「なんかシヤケってファンタジー感の欠片もない生き物よねえ。……見間違いかしら、あのミサイルがこっちに來てる気がするんだけど」

勿論見間違いはない。3号は急遽溜めていたジェットパックを使用し、空へ浮き上がった。背中のバックパックで宙に浮き、強力なインクランチャーでミサイルを跳ね返し、ついでに他のシヤ

ケにも数発撃ち込む。8秒ほどの短い時間だったが十分な仕事をこなせたと判断した3号は、元の場所に着地し、アクアにドーム状のシヤケを説明する。

「コウモリ傘みたいな装甲を着てるからコウモリって、名前を付けた

人は単純ねー。それより3号、さっきのアレって私も乗れる？一回使わせてくれない？」

ジエツトパツクの話をしている時間は残念ながら無い。雨を降らすコウモリ、突進するテツパンの2種類が出現した今、これまでと同じように楽に金イクラは集まらないだろう。

カズマとめぐみんでバクダンと戦った時のように、相手が増えるはこちらの手間が1つ増えるため、今まで行えた行動のどれかが犠牲になってしまう。実際に3号がミサイルを跳ね返している

分、テツパンに攻撃する時間を削っているため、現在アクアがテツパンに追いかけられている。

「ちよつと3号、さっきのアレ早くやってよ！アレを使えば何とかなるんじゃないの？」

ゲージがリセットされてしまったため、暫くの間はジエツトパツクを使えない。多くのオオモノシヤケが現れた時に重要な事は、効率良く数を減らすこと。3号は戦いながら作戦を練った結果、1

つの案を思いついた。テツパンの弱点は強い衝撃を受ければ姿勢が崩れること。同じくコウモリの弱点もミサイルの衝撃で本体がむき出しになることだ。つまり……

「……え？とりあえずオオモノシヤケ全員を一発殴ってほしい？い、いやー、それはちよつと厳しいかなあ」

拳がだめならその手に持った棒でもいいのでは、と3号が質問した瞬間、アクアがテツパンへ向けて走り出した。あの目は完全にシヤケを現金として見ている目だ。

「何してるの3号！早く金イクラを運ぶのよ！これで借金を返済してみせるわ！」

借金を返済できると分かった瞬間、手に持った棒でオオモノシヤケを蹴散らしていくアクア。もはや1人でシヤケを全滅させられそうだが、一気に倒してしまうと金イクラを集めきれない。3号は

必至にイクラを集めるが、アクアの勢いは収まる気配がない。湖の遠くからタマヒロイが現れ、金イクラを回収するのを確認した3号は、もう既に手遅れであると確信した。

『3号、オオモノシヤケの反応が次々と消えている…… 何があったのか分かるかい?』

アクアが湖のオオモノシヤケを全滅させそうな事を報告する。が、話している間に本当に全滅させてしまった。恐るべき戦闘力だが、こちらに帰ってくることに夢中で大量の金イクラが持ち去られていている事に気が付いていない。

『すばらしい活躍だ…… さて、金イクラは幾つ集まったのかな?』
「そうね!あれだけ倒したんだから、きつとかなりの金額になるはずよ!」

アクアが1人でシヤケを狩り初めてから3号はずっと納品し続けていたが、それでも15個ほどしか集まらなかった。タマヒロイを倒しつつ集めたものの、大半の金イクラを持ち去られてしまった。

『それを差し置いてもすばらしい戦闘力だろう…… 失敗は誰にでもある、また今度頑張ればいいよ…… では、今日はここまでだ。ギルドに帰ってきてくれ……』

「3号、持ち去られたってどういう事?私なにかやらかしちやっただけ?」

アクアの活躍は素晴らしかったし、特に悪いことは無かった。今回は単純に人数が足りなかっただけなのだ。

3号は、次に来る時はもう少し人数を増やして挑もうとアクアに話し、アクセルへと足を進めた。アクアがいるのでスーパージャンプで帰るわけにはいかないが、カズマの普段の様子やパー

ティの話聞きながら帰っていたら、あつという間にアクセルに着した。あとは、クマサンに報告し報酬を受け取るだけだ。

「で、なんでこいつはこんなにテンションが高いんだ?アクアが夕飯を奢るなんて何があったんだ?頭でも打ったか?」

「ふふん、今の私はカズマに何を言われようが女神の清く寛大な心で許してあげるわ。ほら、どんどん食べなさい!私もシユワシユワー!」

今回のサーモンランの結果、2人に合わせて30万エリスの報酬が

支払われた。オオモノシヤケを討伐した分で15万、金イクラの分で15万エリスといった所だろうか。

今回はアクアの活躍があつてのサーモンランだったので、報酬を3号が10万エリス、アクアが20万エリスの割合で分割したところ大変喜んでもらえたようで、勢いのままアクア主催の宴が始まつたのである。借金は大丈夫なのだろうか。

「3号、一体アクアに何があつたのですか？正直、あのアクアがこんなことをするなんて信じられないのですが」

先ほどのサーモンランの話をしたところ、なぜか同情しているような目をしためぐみんに、今日は休むように勧められる。理由を尋ねる前に、カズマまでこちらに来て逃げるように勧めてきた。

2人の押しに負けた3号は、食べ物を持ってそつとギルドを抜け出し、馬小屋に帰った。カズマやめぐみんは3号が疲れているだろうと考えて3号を休ませたのかもしれないが、3号はまだそれほど疲れていなかった。近所でブキの試しうちをしてもいいが、カズマとめぐみんには何か考えがあるのだろう。

馬小屋で食事を済ませた3号は、そのまま朝まで眠るべく横になったが、ここで着信が入ってきた。相手がクマサンとも言い切れないが、確認のため通話を開始した。

『パーティの主役がいなくなつてどうするのよお！シユワシユワを用意してるんだからとつと戻つてきなさい！……ちよつとカズマ、受話器をステイールするなんてどういうことよ！』

『もしもし、カズマだ。今のギルドは酔っぱらつたアクアを筆頭に滅茶苦茶になつてる。ここはなんとか俺とめぐみんが食い止めるから、3号は今すぐ寝るんだ。もし寝てなかつたら、多分馬小屋で2次会が開かれるからな！頼んだぞ、3号！』

今日の最後の任務は眠ることになつてしまった。3号はすぐ横になり、目を瞑つて必死に眠ろうとする。アクアとカズマが馬小屋に帰る頃にはぐっすり眠っている3号だったが、帰ってきた2人が

3号が中々寝付けず困っていたことは知る由もないだろう。

2次会は中止となり、残念がるアクアの隣で、ほつと安心するカズ

マだった。

翌日。クマサンから呼び出しがあったわけではないが、早く寝た分早起きしたので、早速ギルドへジャンプした3号。そこには昨日と打って変わってひどく落ち込むアクアと、それを慰める2人の姿があった。一体どうしたのだろうか。

「おはよう3号。アクアは昨日の宴会で20万エリスをほぼ使い切ったそうだな。またサーモンランで稼ごうとクマサンの所に早朝から押し掛けたんだが、今日はオオモノシヤケがいないって言われたそうだ」

「多分明日はもつと稼げるから今日ぐらいはいいやって思ったんでしょうね。まさか不定期の開催なんて考えもなかったのでしょうか」パンフレットの隣のマニュアルには不定期開催としっかり記載されているはずだが、思えばアクアがマニュアルを読んでいた覚えはない。3号の1日は、アクアを慰めるところから始まった。

3号がひたすら昨日の活躍をナイスを使って褒め続けたら、見る見るうちに元気を取り戻したアクア。ギルドから飛び出すと、アルバイトへ出かけて行ったようだ。カズマとめぐみんは散歩に行くようで、3号だけがギルドに残った。

オオモノシヤケの報告が無ければ、普通のギルドの依頼を受けるしかない。しかし、魔王軍の幹部の影響で3号が受けられる難易度の依頼は残っていないかった。

こうなってしまうと、今日は休日のような扱いになるのだろうか。この世界の休日の過ごし方は分からないが、とりあえずギルドの外に出る3号だった。

アクセセルの散歩

3号ほどの年齢のインクリング達は、日々ナワバリバトルやガチマッチ、サーモンランに明け暮れる日々を過ごしている。3号も時間があればそれに参加していたが、この世界ではどれも開催されていなかったため、現在の3号は暇を持て余していた。

一旦馬小屋に帰って服の洗濯をしたものの、それからは何をするべきか思い浮かばない。適当に今日の服装を決めて買い物にでも行こうと考えた時、素朴な疑問が湧いた。

カズマが着ていたジャージは3号の世界でも見覚えのあるものだが、この世界の一般的な服装ではないようで、現在はこの世界に合った服装になっている。危険な魔物と戦うため、後衛や動き回

る前衛は軽い服やマントを身に着け、ダクネスのような敵の攻撃を引き付ける職業は重たい鎧を身に纏っている。

では、3号はどうだろうか。頭には何も身に着けていないが、白いTシャツに短いズボン、動きやすい運動靴を履いている。ナワバリバトルでは戦えても、この世界では不自然な恰好な気がした³

号は、急遽スーツケースを開き、この世界で実用的なギアを装備することにした。

とはいえ、見た目とギアパワーを両立させるのは、多くのインクリングにとっての悩みである。実用的なインクの効率上がる効果や、移動速度を上げる効果があっても、音楽を聴きもしないのにヘッドホンを付けていたり、大きなフルフェイスのヘルメットを被るのは不自然だ。

まさかここにきて服装に悩むなんて考えもしなかったが、あまりに時間が過ぎてしまっただけで出掛けられないので、気にせずそのままの服装でいることに決めた。イカした格好をしている人間がい

れば、その人に教えてもらえばいいだろう。早速街の散策を開始する。

適当に街を歩いているものの、目的が無ければただただ時間が過ぎ

ていくだけだ。何かないかと武器屋や防具屋を眺めていると、ひと際目立つ人物が目に入る。確か変わった剣を扱う人物で、名

前はミツルギキョウヤだっただろうか。仲間らしき2人の女性もいないが、武器屋で一体何を買おうとしているのか気になった3号は、何を買うのか尋ねるべく、武器屋に入った。

「キミは……確か3号、インクリングの少年か。あの時はすまなかつたね。それで、僕に何か用かな？」

用といえば何を買うか尋ねようとしていたが、今日の前にいるキョウヤは3号の知る中でもかなり強い部類の冒険者、もしかしたら強力なスキルや戦術を知っているかもしれないと考えた3号

は、この世界の知識や、スキルを教えてほしいと頼んだ。

「そうだな……僕で良ければ力になるよ。ちようど今は2人と別行動しているから暇だったんだ。せつかくだからギルドで食事しながら話をしようか」

許可を得た3号は、早速キョウヤと共にギルドの酒場へ向うことにする。キョウヤの話によれば、ソードマスターのスキル以外にも、簡単な魔法の使い方も教えてくれるそうだ。3号は期待に

胸を躍らせながら、ギルドへ歩いていった。

ギルドへ到着した3号は、自分の冒険者カードをキョウヤに見てもらっていた。カードを見たキョウヤは唖ったり驚いたりしているが、あのカードにそこまで変わった情報があるのだろうか。

キョウヤからカードを受け取ったところで、本格的なスキルの授業が始まった。

「3号、キミの職業は冒険者だからそれほどスキルを覚えていないと思ったが……どうやら種族特有の特殊なスキルを覚えているようだね。リッチーのスキルのようなものかな」

特殊なスキルというと、3号が行える基本的な動作のことだろう。キョウヤが興味を示しているので、後で3号が使い方を一応解説してみるのが、役に立つものはあるのだろうか。

「3号の魔力では、初級の魔法が精一杯だろう。まあ、魔法がなくても

僕みたいに戦えるし、そんなに落ち込まなくていいと思うよ。それじゃ、よく見ていてくれ」

キョウヤは様々な魔法を見せてくれた。火をつけるものやカズマが使っていた水を出すもの、それを凍らせる呪文など、様々なものを教えてくれた。どれもキョウヤがこの世界に来て最初の頃に

覚えた呪文だそうだ。3号はカードを使つてそれらを習得、少し練習をして、初級の呪文を扱えるようになった。

「よし、それぐらいでいいんじゃないかな。戦闘で使うのは難しいかも知れないけど、生活で使う分にはとても便利だと思うよ」

こんな風にね、とコップに水を注ぐキョウヤ。より上位の魔法も存在するようだが、魔力の低い3号には遠い話だろう。他にも色々スキルを見せてもらったが、どれも3号が使うにはスキルポイントが足りないうえ、そもそもナイフ以外の剣を持っていないため

使いようが無かった。冒険者カードにはスキルが記載されているので、いつか習得できるかもしれない。

3号もキョウヤの真似をしてコップに水を注いでいると、今度はキョウヤから質問された。なんでも、駆け出しの冒険者にしては覚えられるスキルが多すぎるそうで、幾つか気になったものがあるようだ。

「回復魔法に格闘スキルや窃盗、拳句の果てに爆裂魔法……に通じる下位の魔法まで習得できるなんて、一体何があつたんだ？窃盗はともかく、他は滅多に見かけないスキルなんだけどね」

主に達人バイトガールと爆裂魔法使用の影響だろうか。どれもポイントが足りず習得するのはかなり先になるだろうが、いずれも使う予定は無い。周りの影響だとキョウヤに伝えたところ、何が

あつたのかと心配されるが、気にせず話を続ける。今度はキョウヤの持つ大きな剣が話題になった。とても貴重な品だそうだが、どんな武器なのだろうか。

「これは女神アクア様から授かった神器……魔剣グラムだ。僕専用の剣だけど、僕が使えば何だって斬れる、神器の名に相応しい剣だね。僕の大切な宝物だよ」

やはりとても貴重な物だったようだが、アクアは一体何をやっているのだ。この言葉をそのまま解釈すれば、あのアクアが女神でキョウヤに剣を託したという結果が残るのだが、3号から見れば

お金に困っているアークプリーストにしか見えない。

キョウヤはそろそろ仲間と合流する時間だそうなので、最後に1つ役立ちそうなスキルをキョウヤに伝授する。仲間と過ごすキョウヤの役に立てればいいが……

「少し離れた場所にいる仲間に自分の居場所を知らせるスキル……わかった、ちよつと使ってみてくれないか」

3号はギルドの外に出ると、キョウヤをカモンシグナルでこちらへ呼ぶ。すぐにキョウヤが来たので、この世界でも効果を発揮するようだ。使う時のコツは、ブキを掲げながら呼べば効果が強く

なるような気がするぐらいだろうか。インクリングは自然と行っているが、きつと人間のキョウヤにも扱えるはずだ。

「パーティでクエストに行く時に便利だね。どれどれ、習得に必要なポイントは……1ポイント!?とてもお得じゃないか、早速使ってみよう」

魔剣グラムを掲げ、どこにいるか分からない2人を呼び出すキョウヤ。しばらく待っていると、こちらへ走る2人の女性が見える。キョウヤがうまく扱えたようで安心する3号だったが、キョウヤはすぐに2人の仲間の質問攻めにあう。

「キョウヤ！私達を呼ぶなんて一体何があったの!?あつ、まさかこいつがキョウヤに何か——」

誤解が生まれる前にキョウヤが上手く説明してくれた。これで2人をいつでも呼べるとキョウヤが話すと、何やら2人は頬を赤らめているように見える。3号はキョウヤにそつと別れを伝えると、

静かにその場を立ち去った。困った顔のキョウヤだったが、彼ならきつと何とかできるだろう。3号は再び街の散歩を開始した。

初級の魔法を習得した3号は、またもやふらふらと街を彷徨っていると、奇妙な物体を発見する。丸い形をした、色が真っ青のこの物体

は、おそらく3号が撃ち落としたキャベツ。あの時はど

こかの物好きが買い取ったと聞いたものの、目の前の建物にその物好きがいると分かると興味が湧いてくる。店を営業しているようなので、早速入店した。

薬品の香りが漂う店内には、1人だけ店員がいるようだが、入店した3号に気が付いていないようだ。青いキャベツの下に値段が書かれているが、なんとこのキャベツに10万エリスの値がついている。青いだけで普通のキャベツのはずだが、なぜこれほど高額なのだろうか。

他にも不思議な薬品や道具が置いてあるが、3号に使いこなせそうなものは1つも見つからない。そもそも値段が高くて買えないので、店員に気付かれないよう潜伏スキルを使いながら店から出ようとしたものの、あと少しのところで見つかってしまった。

「いらっしやいませ、ウイズ魔法店へようこそ！本日はどのようなご用件でしょうか？」

ばれてしまったては仕方がない。3号は青いキャベツが気になって入店したと伝えると、ウイズが嬉しそうにキャベツの解説を始める。これはしばらく帰れそうにないと覚悟した3号は、姿勢を整

え、真剣にウイズの解説に耳を傾けた。

「このキャベツは特殊な塗料で加工されています、なぜだかいつまで経っても品質が落ちないんです。ちよつと高いですけど、非常食としておすすめですよ」

塗料で加工させた食品は食べてはいけないような気がするが、ウイズの話によれば問題は無いらしい。もう少しこの塗料の研究がしたいそうだが、サンプルとなる物質がこのキャベツしか無いよ

うで、研究が進まないそうだ。せつかくなので3号がインクを取ってくる話すと、ウイズの目の色が変わった。

「本当ですか！ありがとうございますっ！初めて見る塗料なので、とても気になっていたんです！」

馬小屋にインクタンクを置いてきた3号は、インクを取つてくるとウイズに伝えると、店の外に出て馬小屋へ飛んだ。急いでインクタン

クを背負い、インクを回収するのに丁度良さそうなバケツ

トスロツシャーを持ち出すと、そのままギルドへ飛び、徒歩でウイズの店まで向かう。スーパージャンプのおかげで、それほど往復に時間はかからなかった。

魔法店戻ってきた3号は、ウイズによるインクの調査を手伝う事になった。まずは、3号が知っているインクの情報から伝える。

「インクリングが放出する特殊なインク……ですか。すみません、インクリングとは何でしょうか？」

自分の事を説明するのは何度目か分からないが、ヒトの姿になれるイカ、キョウヤ曰くリツチーと同じような物らしい。この世界の住民のウイズにはこちらの例えの方が分かりやすいだろうか。

「えええっ！わ、私と同じようなものなんて、こんな偶然もあるんですね。実は私もリツチーなんですよ」

ウイズも人間ではなくリツチーと呼ばれる種族らしい。よく知らないが、人間と似たような姿をしている所と、専用のスキルが存在するのが共通点だろう。3号は元はイカなので、ウイズも何かに変身するのか尋ねてみたが、そういったことはしないようだ。

人外談議に花が咲いたものの、本来の目的は3号のインクを採取すること。3号は用意してもらった容器に少しずつインクを注ぎ、ウイズに手渡した。ウイズ曰く十分な量が集まったようで、3号

はもう帰っていいそうだ。何に使うかよく分からないが、時々様子を見に行くことにする。

現在の時刻は午後5時を過ぎたあたりで、クエストに出かけた冒険者が続々と街に帰ってきている。夕飯を食べるためにギルドにジャンプしてもいいが、時間があるので歩くことに決めた。

3号が冒険者の観察をしていると、めぐみんを背負うカズマの姿が目に入ったので、声を掛けてみる。爆裂魔法の練習を終えためぐみんを背負っているようだが、最近2人で散歩に出かけているのはそのためだろう。

「今日も日課の爆裂魔法を廃城に撃ってきたところですよ。だんだん

カズマも爆裂魔法のことが分かってきましたし、3号もいつそ覚えてみるのはいかがですか？」

「多分ポイントが足りないから覚えられないと思うが。……ん？どうした3号、顔色悪いぞ。何かあったのか？」

廃城といえば、確か首が取れるベルディアが住んでいたはず。そんな場所に爆裂魔法を撃ってしまったら、きつとただでは済まないだろう。心配になった3号は、これから別の場所に爆裂魔法を

撃つようめぐみんを説得する。

「あそこに撃つのがいいんじゃないですか。街の近くでは撃てませんし、私は廃城が一番いいと思いますよ」

「3号、城の心配をしているならその必要はないぞ。なぜか何度魔法を撃ち込んでも壊れないし、多分丈夫にできてるから崩れないんじゃないか？」

言うべきか、言わないべきか。3号はベルディアの事を話せば、誰かがベルディアを討伐しに行ってしまうかもしれない。デユラハンと呼ばれる種族だけあって、街から離れた場所に住むの

はきつと事情があるからだろう。あまり人と関わるのが好きではないかもしれないし、そもそも辛い過去があるのかもしれない。

様々な想像をした結果、ベルディアの事は胸に留め、改めて廃城に魔法を撃つのをやめるよう話し、先にギルドへ向かった。このままでは、ベルディアのストレスが限界に達し何らかの行動を起

こす可能性があるるので、様子を見に行った方がいいだろうか。

ギルドに椅子に座って食事もせず、延々と考え事をしていた3号に、カズマが声を掛けてきた。先ほどの3号の様子を見て何かを悟ったのか、相談に乗ってくれるようだ。

「なるほど、廃城に知り合いが住んでて、その人が迷惑に思ってるんじゃないかって心配なんだな。いやー、俺も悪いことしちゃったな」カズマなら信用できると判断した3号は、ベルディアがデユラハンであることと、複雑な事情があると予想していることを伝えると、今度はカズマの表情が曇る。

「これは俺の予想なんだが……もしかしたらそいつ魔王軍の幹部じゃ

ないか？ほら、最近近くに住み着いて、俺達の仕事を減らした奴だよ」
確かに、ベルディアは最近こちらに引越してきたと話していた。
あの時はシャケが隠れていたし、他の魔物を見かけていない。そう考
えれば辻褃は合うが、そもそも魔王軍の幹部とは何か知ら

ない3号にとつて、ベルディアの職業が良く分からない。カズマは
知っているのだろうか。

「そりゃあ、魔王っていうとつても悪い奴がいて、その幹部は魔王の手
下ってこと。つまりどつちも悪い奴ってことだ。まあ、例外もあるけ
どな。……まさか3号、知らなかったのか？」

今まで何となく聞き流していたが、魔王とやらはとても悪い生き物
だそうだ。つまり、ベルディアも一応悪い魔物という事になるのだろ
うか。

カズマの予想では圧倒的な戦闘力を持っているそうなので、駆け出
しの3号では相手にならないかもしれないが、いつか戦う日がくるか
もしれない。

「まあ、俺からもめぐみんに伝えておくよ。納得してくれるかどうか
は分からないけどさ」

その後といえ、食事をしながら覚えたスキルの話をしたり、カズ
マの愚痴を聞いたりしていたが、ここで3号の仲間の話題になった。
仲間といえ、New！カラストンビ部隊のことだろうか。

「それ、パーティの名前なのか？変わった名前だよな。俺は中身は
ともかく女性メンバーに囲まれてるけど、3号はどうなんだ？可愛い
子とかいる？」

現在テーブルに座っているのはカズマと3号の2人だけ。普段は
女性に囲まれているカズマだが、こういった状況になると話題も変わ
るのだろうか。質問の答えはイエスで、アイドルと後輩、合わ

せて4人のガールがいる。それを聞いたカズマは食い入るように
質問してきた。

「大体分かった。仲間にアイドルって、結構大きなパーティだろうな。
3号、お前はまさかそこで唯一の男子メンバーとかじゃないよな？も
しそうだったら俺は泣くぞ」

そんなことは無い。パーティに男は2人、3号の他にアタリメ司令がいる。かつての3号は、主に2人のアイドルの祖父であるアタリメ司令と共に調査任務を行っていた。アイドルの2人は仕事で忙

しい事に加え、後輩達はアルバイトやナワバリバトルに励んでいるので、高齢の司令といつも2人で行動してきたのだ。

「えっ。そんなに女子がいるのにその司令と2人で行動してたのか……? 3号、今夜は俺が奢るから、思う存分食べるんだ。お金は気にしないでいいぞ」

何やら勘違いされているが、司令との日々もとても楽しかった。様々な戦場の鉄則を教えてもらったし、この世界でシヤケと戦えるのは、かつて司令と一緒に冒険した経験があるからだ。なの

で、3号はそういった哀れみの目で見るのはやめてほしいと伝え

た。「冗談だよ。まあ、そっちに帰れる日がくるまでここが家みたいなもんだし、改めてよろしくな。それじゃあ、乾杯!」

奢ってくれるのは本当だったようで、男2人の食事はしばらく続いた。解散したのは夜遅くになってからで、馬小屋に帰って時間を確認する前に眠気がやってきた。

呪文を覚え、インクを提供し、カズマと普段は出来ない話をしたように、今日は様々な出来事があった。これからはもう少し街を探索するのもいいかもしれないと考えつつ、スーパージャンプで馬小屋に飛ぶ3号だった。

翌日、ギルドにてオオモノシヤケの報告がないかクマサンに確認している、廃城での報告が一件あったようだ。準備を整え廃城に向かうとした時、ギルド全体に受付嬢の声が響く。

「緊急! 緊急! 全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、正門に集まってください!」

まさか、ベルディアのストレスは既に限界に達していたのだろうか。3号は持っていたわかばシューターを強く握りしめ、カズマ達や他の冒険者と一緒に正門へ向かった。

ベルディアダイレクト

続々と正門へ集まっていく冒険者達。3号は足がそれほど速くないため、正門に到着した頃には既に人だかりが出来上がっていて、身長が人間と比べて低い3号は中々状況を把握できずにいた。

人々のざわめく声や、不気味で緊張感の漂う空気からは、キャベツとは違った異常な出来事が起きていることが予測できる。人の波をかき分けてでも前に進むか考えていると、遠くからベルディア

アの声が聞こえてくる。怒りに震えた声ではなく、教師が問題を起こした生徒を呼び出すような声だが、内容も同じような物だった。

「俺はつい先日、近くの城に越してきた魔王軍の幹部の者だが。ここ数日、俺の城に爆裂魔法を撃ち込む頭のおかしい魔法使いがいる……身に覚えのある奴は、すぐに前に出てこい」

頭がおかしいかどうかはさておき、爆裂魔法を使える人物といえばめぐみんだろう。集まった冒険者が爆裂魔法の使い手を探しているが、めぐみんならきつと自分から前に出る。

3号が暫くその場に立っていると、若干人と人との間に隙間が出来たので、思い切って前に出て様子を確認する。やはりめぐみんはベルディアの元へ向かったようだ。

「お前か……まあいい、後はインクリングの冒険者は今すぐ前に出る。というか出てくれ、いないならちよつと探して呼んできてくれ」

何とベルディアから呼び出されてしまった。特に悪戯した覚えはないが、呼ばれたものは仕方がないので前に出ることに決めた。隣にいたカズマが心配しているが、本当に何もしていないので殺

されはしないはず。3号はゆっくりと歩き、めぐみの隣に立った。

「来たか。さて……先に話しておこうか。その頭のおかしい魔法使い、今日限りで俺の城に爆裂魔法を撃ち込むのは止めろ。俺に喧嘩を売りたいなら、もっと堂々と攻めてくるんだな」

爆裂魔法を撃ち込まれた事に怒ってはいるが、今止めれば許してもらえそうではある。とはいえ相手は魔王軍の幹部、近くに立っている

だけで一步後ずさりしてしまうような、キョウヤとは真逆

の不気味なオーラを纏っているように感じる。普通の人間なら、住処に魔法を撃つようなちよっかいを出すのを止めるだろう。隣のめぐみんも、どこことなく俯いて震えているように見える。

「……我が名はめぐみん！アークウイザードにして、爆裂魔法を操りし者！そして、我は紅魔族の者にして、この街随一の魔法使い……こうして数日爆裂魔法を撃ち込んだのも、魔王軍幹部のあなたをおびき出す為の作戦だったのです」

「めぐみんって何だ？いや、隣の奴も変わった名前だし、割と一般的なのか？」

ベルディアとめぐみんの会話が盛り上がっている。ベルディアに呼ばれたものの、特に自分への用がなさそうなので、3号はこっそり後ろへ戻ろうとする。

「待て待て待て！用事あるから！どっちかと言えばそっちが本題だから！……とりあえず、俺はこの街の雑魚共に興味は無い。紅魔族の前も、これからは爆裂魔法を使うな」

「嫌です。紅魔族は、日に一度爆裂魔法を撃たないと死ぬんです」

一向にめぐみんとの会話が終わらないので、近くでブキの試しうちを始めた3号。シャケとの戦闘をイメージしつつ、辺りをインクで塗っていく。

「……そうだな。ちよつとそこで適当に練習してくれ。一応言っておくが、インクをこっちに撃つなよ」

許可を得たので、3号は話が終わるまで訓練を始めた。ボムを狙った場所に転がしたり投げたりする練習や、岩をシャケに見立てて射撃する練習、特にボムを投げる感覚は、少しでも触っていない

いとすぐに感覚を忘れてしまうので、日々の練習が大切なのだ。

練習を続けていると、めぐみんの隣にアクアがいるのが目に入る。それに対してベルディアは、何やら右手に不穏な黒いオーラを纏わせ、悠々と会話しているように思える。

それに対して既視感を覚えた3号は、インクを泳ぎめぐみんの元へ向かう。3号は、バクダンのように何らかの攻撃をめぐみんかアクア

に仕掛けると予想して、ベルディアの前に飛び出た。

「お前は1週間後にいつ!?おいお前、練習してろって言ったよな!?!いや、俺も元は騎士だし仲間を守る気持ちは分かるけど、ちゃんと人の話は聞いてくれよお!」

一瞬全身に奇妙な感覚を感じたと思えば、すぐにそれは無くなった。予想通りめぐみんに攻撃を仕掛けたようだが、3号に当たるのは都合が悪いらしく苛ついているように思える。

馬の前に立ち続ける3号を面倒に感じたのか、ベルディアは頭をこちらに向けた。3号とベルディアの視線が合うが、その後のベルディアの衝撃的な発言に、思わず3号の視線が揺らぐ。

「まあいい、今日の目的はお前の方だ。3号、魔王軍に来る気はないか?もし俺の仲間になれば、今使った死の宣告を解き、廃城の半分をお前にやろう」

どこかで聞いたような台詞だが、これは取引ではなく脅迫だ。カズマとダクネスが心配してこちらに来てくれたが、何故かカズマから世界の半分じゃないのかと突っ込まれているベルディア。

話が本当なら、3号が魔王軍に入らなければ1週間後に死んでしまうそうだが、カズマはどうするべきか考え、アクアは怒り、めぐみんは敵からの勧誘になぜか羨ましそうに3号を見つめている。

ダクネスに至っては若干興奮しているように見えるように、後ろの4人にはまとまりが一切ない。正直この滅茶苦茶な状況を先に何とかしてほしいものだが、ベルディアも自分の発言を無視して騒ぐカズマ達を気に入らないようだ。

「もういいもういい!適当に呪いを解くから、3号は一回俺の城に来い!毎日毎日俺の城にインクを撃ち込む奴がいるんだよ!俺の城が緑っぽくなって困ってるんだ!」

「いや、それだけならあんな大袈裟に言わなくてもいいよな!?!……3号、行くかどうかは任せるよ」

結局はオオモノシヤケの討伐依頼を頼みただけのようだ。今はベルディアの城が標的になっているが、いつアクセルを襲うか分からない。丁度その依頼を受けている所だったので、3号

は騒ぐ3人を置いて廃城へ向かった。

「3号！まさか魔王軍に入るつもりじゃないでしょうね！」

「仕事に行くだけなんだよなあ。3号、気をつけろよー」

無事に廃城に到着したものの、前回近くまで来た時とは大分雰囲気が変わっている。所々崩れた外壁に、緑のインクがまき散らされたような跡が残り、骸骨や生きた屍が城を見回っているその風景は、より一層奇妙で、来るものを拒むようなものになっていた。

とはいえ、オオモノシヤケを討伐するのが今回の仕事、外壁を自分のインクで塗り、一旦壁の上まで登って城の内部の状況を確認する。すると、アンデッドだらけの城に似合わない、空に浮かぶ

オオモノシヤケを発見した。

あのシヤケの名前はカタパッド。インクを撃っているのは十中八九このシヤケの仕業だろう。

カタパッドが左右のコンテナを開き、ミサイルを発射する準備を始めたため、3号は周囲を塗っていつでも避けられる環境を整えたものの、一向にミサイルが降ってこない。宙に浮いたミサイル

を目で追っていると、城の内部にいたアンデッドへ向けて落下し、直撃を受けた数匹が消滅した。

同じく外壁へと降り立った他のカタパッドが、廃城へ向けてミサイルを放ち続けている。爆裂魔法のように城が崩れはしないが、この廃城が危険な事には変わりはない。

3号はカタパッドのコンテナにボムを投げ込むと、コンテナの内部でボムが爆発、バランスを取れなくなつたカタパッドは墜落した。自分を狙っていないのだから当然と言えば当然だが、左右の

コンテナにボムを投げ込めばすぐに倒せるため、残りのカタパッドも難なく討伐できた。

他のオオモノシヤケはいないかと周囲を見渡してみると、城の門の方から地鳴りのような足音が聞こえてくる。ベルディアと同じ場所に住む住民は個性的な生き物ばかりだが、さらに城に戻って

きたのかと様子を見に行くと、今度はザコシヤケ達の群れが城に押

し寄せてきている。

しかし、そのシャケ全てが武器であるフライパンやスプーンを持っていない。3号が上からシャケの動向を観察していると、1匹の骸骨がシャケの襲来に気が付き、勇敢にも立ち向かっていく。

錆びていたり刀身が欠けている武器ではあるが、ザコシャケ程度なら余裕を持って返り討ちにするだろう、そう考えていた3号の予想は、大きく裏切られた。

ザコシャケの中でも体格の大きいドスコイが骸骨に手を伸ばしたと思えば、いつの間にか骸骨の武器がドスコイの手の中にあつた。間違ひなく、あれは窃盗スキルを使っている。武器を奪い取っ

たドスコイは骸骨を殴るように切り伏せると、正門から続々とシャケが押し寄せ、アンデッドの武器を奪っていく。それはまさしく、大勢の略奪者が城を襲撃する光景だった。

相手が武器を持ち換えても、3号のやることに変わりはない。真向から戦つては危険なので、上からボムを投げたり射撃したりして少しずつ数を減らしているが、シャケにしては珍しく、粗方武器

器を奪い去ってはどこへ撤退していく。3号も負けじとシャケの数を減らしていくが、それでもかなりの数のシャケが武器を持ち去ってしまった。

何とも奇妙な光景だった。これではまるでアンデッドの武器が目的のようだが、祖父の代からフライパンを受け継ぎ、道具を大切に扱うシャケがこんなことをするとは思えない。

暫く見回りを続けていると、アンデッドが次々と姿を消していく。何事かと城を見回すと、ベルディアの姿が見える。3号はひとまず地面に降り、起こった出来事を報告する。

「3号か。さつきは変な事言つてすまなかつたな。それで、俺の城で何があつたんだ？」

あれ一回言つてみたかつたんだよ、と話すベルディア。ミサイルを撃ち込むカタパッドは全滅させたものの、ザコシャケの軍団がアンデッドの武器を奪つていったことを伝えると、ベルディアの

唸り声が聞こえてくる。しかし、3号が気になっているのはあの後

カズマ一行がどうなったか。ベルディアに何があつたか説明を求めた。

「紅魔族の娘に死の宣告を使ったら、クルセイダーが庇って身代わりになったのだ。呪いを解きたければこの城に……いや、そんなに暇なくてもいいだろ？俺は魔王軍の幹部だからな？」

めぐみんが無事に城までたどり着いたなら、死の宣告を解くそうだが、多少のアンデッドを配置してうまい具合に苦戦させるつもりらしい。ちゃんと着いたら呪いを解くから安心しろと念を押されたので、殺害するつもりではなさそうだ。

「ところで、あの外壁をふよふよと浮いているあれは何だ？俺はあんな魔物見たことないぞ」

ベルディアに指差す方向に視線を向けると、カタパッドがこちらに向けてミサイルを撃ってきた。ベルディアに避けるように伝え、大きく着弾地点から距離を取ったはずだが、3号の全身に痺

れるような痛みが走り、痛みに耐えられずくまってしまう。

「……おい、大丈夫か？今の攻撃であいつが城を爆撃する犯人だと分かった。だが、今のミサイルには雷撃の魔法が掛かっていたぞ。あいつは悪戯が目的ではなく、俺達を攻撃する意思を持っているはずだ」
ベルディアも攻撃されたことを不愉快に感じているようで、巨大な剣をカタパッドに向け威嚇するものの、相手はそれにミサイルを放つて返事をする。

このまま直撃を受けると確実に倒されてしまうので、3号は外壁の屋根が残っている部分に避難し、電撃とインクのミサイルを避けた。まずは隙を見て、同じ外壁の上に登らなければいけない。

ベルディアの許可を得て外壁を塗り、何とか上まで登った3号だが、カタパッドは3号から遠ざかるように飛行し、一定の距離を保ち続ける。電気を纏ったミサイルは、インクだけのミサイルと異

なり攻撃範囲が非常に広がっているため、これまで以上に大きく避ける必要がある。そのため、3号がコンテナにボムを投げる機会が中々訪れなかった。

ミサイルは3号だけでなくベルディアにも放たれているが、さすが

は魔王軍の幹部、落下するミサイルをいとも簡単に切り捨てている。だが、外壁の上で宙に浮いているカタパッドに一方的に攻

撃されている点は、3号と全く同じだった。

「3号、こいつを何とか地上に落とせないか？インク以外に何か手があればいいんだが」

外壁の上に登ってきたベルディアに声を掛けられる。確かに、相手のミサイルが電気を纏っているため、下手にインクをばら撒くところらが感電してしまう。初級の魔法なら幾つか扱えることを

ベルディアに伝えると、なんといきなり胸倉を掴まれ、持ち上げられてしまった。

「3号、お前を今からあいつに向けて投げるから、近づいたらすぐに氷結魔法でインクを噴射している場所を凍らせろ。失敗しても、あいつを叩き落とせば俺の城は安全になる。いいな？」

分かったと答える前に、3号はカタパッドへ向けて投げ込まれた。平衡感覚が滅茶苦茶になり目が回りそうなほどだが、必死にインクを噴射する機構の根本にフリーズを放つと、カタパッドのバランスは大きく崩れ、地面へと落下していく。どこかから聞こえるのは、ベルディアの足音だろうか。

「よくやったー！これで騒音とか爆裂魔法に困らず生活できるぞおおー！」

ご近所トラブルが解決しそうで何よりだが、ベルディアの剣がカタパッドを真っ二つにした時、3号は思わず冷や汗をかいた。インクを一切受け付けない装甲を持つているはずだが、ベルディア

にかかれば紙切れ同然のような物なのだろうか。魔王軍幹部の恐ろしさを、たった今身をもって味わった3号。ベルディアからもう帰っていいとの指示が出たので、何とか気を取り直してアクセルの街までスーパージャンプする。

今回はシャケに困った住民だったが、次に会う時は魔王軍の幹部、あの剣を振るうベルディアを戦うことを想像して、思わず身震いしてしまう。強力なシャケや魔物と互角に戦えるよう、己を鍛えることを肝に銘じる3号だった。

街から少し離れた廃城からでも、スーパージャンプを使えば一瞬でアクセルに到着できる。ギルドに降り立った3号は、クマサンに今日の出来事を報告するべく受付に向かうが、カズマ一行が楽

しそうに食事している様子を見かけ、3号は思わず目を疑ってしまふ。ダクネスの呪いを解くために、めぐみんが城まで行かないといけないはずだが、こんな事をしていいのだろうか。

「おつ、おかえり3号、こっちは散々だったけど、全員無事だったぞ」「私はアクアに呪いを解いてもらったから心配ない。一時はどうなることかと思つたが、全員生きていてよかつたよ」

主にお前とめぐみんのせいだけだな、とカズマが毒を吐いている。4人はもう城に向かうことは無いとなると、ベルディアはこのままめぐみんを待ち続けるのだろうか。

「それよりもー3号、あのデュラハンに何かされたんじゃないでしょうね!? あんた城で何してきたのよ!?!」

いつものようにシヤケと戦っただけだ。3号がそう伝えると、私も呼んでよと態度を一変させてしまった。あれ以来、クマサンにオオモノシヤケの出現報告が無いか、かなりの頻度で聞いていた

らしい。先に4人に報告してしまつたが、改めてクマサンに今日の出来事を報告する。

『そうか……シヤケ達もこの世界に適応し始めているのだろうか。今日はそれほど反応が無かつたから指示をしていなかったけど、次からはもう少しシヤケの動向に気を付けよう……』

今日はやけに指示が少ないと思つていたが、シヤケの反応の少なさから別の事に手を回していたようだ。3号は受付から報酬の8万エリスを受け取ると、カズマのいるテーブルに向かつた。

電撃ミサイルの衝撃は今でも覚えている。あのレベルのシヤケとも1人で戦うには、もつと実力と経験が必要だ。3号の世界では練習と経験があれば強くなれるが、この世界のシステムは少々複雑である。参考にするため、カズマ達に強くなる方法を尋ねてみ

た。

「強くなるって言ってもねー。とにかく戦ってレベルを上げるのが一番よ。そうしたら私のように強くなれるんじゃない？」

「真の最強を目指すなら、爆裂魔法は必要不可欠です。爆裂魔法さえあれば強くなれますよ」

「私はどんな攻撃を受けても倒れないように、防御面にスキルを割り振るのが大切だと思っている。そうすれば、ふふっ、ど、どんなに激しい攻撃でも耐えられるようになるぞ」

3人の意見は恐ろしいほど噛み合っていないが、とりあえずレベルを上げる事が大切なのだろう。3人の話に頭を抱えていたカズマが、補足するように3号に説明する。

「そうだな、戦闘する時は、自分のできる事を考えて戦うことが大切なんじゃないか？初級魔法でも、上手く組み合わせれば有利に戦えると思うぞ」

どれも貴重な意見として胸に留めておく。3号は4人に意見を述べてくれた事を感謝すると、カズマが1つの提案をする。

「今つて昼を少し過ぎた位だし、俺達と適当なクエストに行つてパーティで戦う感覚を掴んだらどうだ？レベルを上げるのも、1人より何人かで戦ったほうが楽だしさ」

カズマからの嬉しい誘い。3号はそれを受け、比較的簡単なクエストを探すが、ベルディアの影響か難易度の低いものは中々見つからない。

『ゴブリンの隠れ家をザコシヤケが襲撃している報告が入っているよ…… これなら、安心して経験を積めるんじゃないかな』

適当なクエストも見つかった。カズマにそれを報告し、早速出発の準備を始めた。初めての5人でのクエストに笑みがこぼれる3号だったが、その様子を見てカズマが3号に質問する。

「急に強くなりたいたって言い出したけど、一体何があつたんだ？まさかデユラハンと戦うつもりか？」

3号が電撃のミサイルを撃つシヤケを難なく倒せるようになりた、と伝えると、ミサイルという単語に心当たりのあるカズマだけが青ざめ、無理するなよと励ましてくれた。他の3人は知らな

いようだが、あのカタパッドとは出会わないことが一番だ。
3号は気にしないしてほしいと3人に伝え、報告されたゴブリンの隠れ家へと向かうのであった。

ヒカリバエが来る

今回のクエストはゴブリンとザコシヤケの討伐、掲示板には無かった依頼だが、クマサンの紹介で特別に受注することができた。現在3号は、目的地とされるゴブリンの住処へ向かっていた。

本日2度目のクエストだが、レベルを上げる為には戦うことが一番の近道だ。現在はまだ日が高いので、このクエストを終えても夜までに街に帰ることが出来るはず。

「まともに戦える前衛が足りないって言ったのは俺だけだし、そのでっかいローラーは武器なのか？その持っているナイフでも十分戦えると思うけど」

3号が手に持っているブキ、大きなローラーと呼ばれたそれは、まさしくスプラローラーという名の近接特化ブキ。慣れてしまえばナイフでも戦闘をこなせるが、インクリングとして最も重要な

インクを放出できないことが最大の欠点だ。

しかし、このローラーならインクをばら撒きつつ戦うことができる。インク自体に攻撃力はなくとも、これで殴られるのは相当痛いはず。一見地面を塗るローラーだが、鈍器でもあるのだ。

「俺の記憶では壁を塗装したりコンクリートを塗る道具だったと思うんだが……。まあ、3号の世界じゃ立派な武器なんだろうな」

3号の気合の入ったローラーの解説にたじろぐカズマ。ここで5人の話題が3号のステータスやレベルに切り替わる。3号は特に気にしたことは無いが、この世界の住民は自分の冒険者カードは定期的

に確認しているそう。これまで結構な数のシヤケと戦ったが、はたして自分は成長しているのか疑問に思った3号は、カズマ達と歩きながら冒険者カードを確認する。

「見た感じ俊敏性と器用度がそこそこ高くなってますけど、魔力は私に遠く及びませんね」

「紅魔族と比べてはいけないと思うのだが……。カズマ、同じ冒険者としてこれをどう見る？」

冒険者カードをカズマに手渡すと、カズマがカードを見ながら黙り

込んだと思えば、ぶつぶつと独り言のような言葉を発し始めた。暫くカードを眺めたあと、3号にカードを手渡し、ステータスについて説明を始めた。

「俺は自分でもこういうゲーム的な物には詳しいと思っっているけど、そうだな……。3号のステータスはいわゆる極端なタイプ。めぐみんやアクアと同じタイプだろうな」

めぐみんやアクアと同じという言葉に興味を惹かれるが、3号はそういったことに詳しくないため、更にカズマに説明を求める。隣の3人も同じようにカズマの解説に関心を寄せているようだ。

「いや、簡単な話だよ。3号の筋力や俊敏性、器用度は高い、というより伸びがいい。ただ、俺達の中でも一番生命力が低いんだよな。アクアほどでもないけど運も悪いし」

カズマの話によれば、生命力が低いと攻撃を受けてしまったらすぐに死んでしまうそうだ。確かに、インクリングはシューターのインクを数発受ければ破裂するし、相手の色のローラーに轢かれ

れば即死、水を浴びると体が溶けてしまう。生命力の無さが思い浮かぶ場面が多々あるが、これは前衛を務めるには致命的ではないだろうか。3号は自分の弱点を思い知らされた。

「そう落ち込むことはない。生命力が低くても、その俊敏性や器用度を活かして戦えばいい。何かあったら、私達を頼ってくれ」

ダクネスに励まされるものの、身体が水に溶けてしまうのは致命的な弱点だ。この世界では川や湖の他にも、水を生み出す呪文が存在するため、いつ3号の身体が溶けてもおかしくない。隠して

いたわけではないが、今この時に伝えておかないと、いつか本当に溶けてしまうように感じた3号。このままではいけないと、正直に自分の弱点を話し始めた。

「ちよつと、水で溶けるってどういう事よ？お風呂とかどうするの？」
「いやいや、風呂とかそういう問題じゃないだろ。おいアクア、3号に水かけたりするんじゃないぞ」

3号が思っているほど反応が悪いわけでは無かった。水に当たらなければ大丈夫だとカズマは話し、水に溶ける話は一瞬で終わって

しまった。

3号は知る由もないが、カズマのパーティは変わった人物しかない。カズマの感覚では、地上に降りた駄女神に究極の一発屋、マゾヒストのクルセイダーの中に、水で溶けるイカが加わっただ

けなのだ。カズマの異世界生活のイメージでは、3号は同期の冒険者といった存在である。

ようやくゴブリンの巣穴へ到着した3号達。魔物の住処というだけあって、これまでの楽しい気な雰囲気から一気に変わる、カズマジつとが入口を観察すると、パーティのメンバーに指示を出す。

「俺が敵感知を使いながら先頭を歩く。ダクネスは俺の隣で攻撃を受け止めてくれ。3号とアクアは隙を見て魔物を討伐、めぐみんは帰るまで爆裂魔法禁止な」

「うう、洞窟を見つけた時点で察してましたけど、我慢するのはきついです」

先ほどの話の通り、今回の目的地は自然に存在する洞窟に隠れたゴブリんと、巣穴に居る可能性のあるザコシヤケの討伐。めぐみんの爆裂魔法はどの相手にも有効だが、洞窟のような場所では天

井が崩落してしまうため、使いどころを選ばなければならない。

先陣を切るカズマについていくと、じめじめした土の匂いに加えて、どこに続いているか分からない暗い内部が、3号の不安を煽る。天井もそれほど高くなく、道の幅もかなり狭い。何が現れる

か分からないが、めぐみんがダクネスにしがみついているのを見ると、肝試しに来ているような気分になってしまう。

ゆっくりと奥に進むと、さらに洞窟の中が暗くなっていく。既に洞窟は暗かったが、今では前を歩いているカズマの姿を何とか確認できる程度で、何か明かりがなければ安全に探索できないだろう。

3号が魔法で火をおこそうとすると、突如洞窟内が明るくなった。カズマ達も何が起こったのか把握していないようだが、隣のアクアが何をしたのか光輝いているように見える。

「ちよつとカズマ！私に変な虫が纏わりついて離れないんだけど！眩

しいし何とかしなさいよ！」

アクアが発光した原因は近くを飛んでいる虫のようだが、3号はこの虫に見覚えがあった。正体を思い出そうとする3号に、クマサンからの通信が入る。

『3号、どうしてこの依頼が残っていたのか分かった……！ どうやら、この依頼に出発した冒険者は1人も街に帰ってきていない。難易度は低いと思っていたが、このクエストにはきつと何かがある。気を付けてくれたまえ』

珍しく焦っているクマサンからの通信。その内容にカズマ達は戦々恐々としているが、ようやく3号の頭の中の整理がついた。突如暗くなり、ヒカリバエが現れた時に起こる出来事。洞窟の奥から徐々に反響して聞こえてくる物音が、3号の予想に正解と答えているようだった。

「洞窟の奥から大量の敵の反応！なんだこれ、全部こっちに向かってくるぞー！」

「あーもう！こんなに虫が飛んでたらまともに戦えないわよ！」

この後起こる出来事を3号は知っている。正気を失ったシヤケ達が、ヒカリバエに纏わりつかれた人物へとなだれ込むように襲い掛かる、通称ラツシユと呼ばれる現象が起ころうとしていた。

現在持っているブキがローラーだったことに心底安心する3号。カズマよりも前に出ると、床にローラーを合わせ、シヤケの襲来を待つ。カズマ達に長々と説明している時間はないため、自分より前に出ないことと、後ろに流れたシヤケの始末を頼むと、じつと

静かに待つ。

「来たぞー！どうするんだ3号?!本当に俺達はじつとしてるだけでいいのか？」

雪崩のように襲い掛かるシヤケの軍団。とある資料によれば、3号の世界の中世より以前の時代では、正気を失ったシヤケにより多くの街が滅ぼされたという。

だが、今はインク弾による距離をとった攻撃が可能なため、そういった大きな被害が報告されることは無い。3号はローラーをゆっ

くりと、細心の注意を払って転がしていく。

すると、ローラーに轢かれたシャケがたちまち青いインクをばら撒き消滅する。辺りやカズマ達の服も真っ青に染まっていくが、シャケの勢いは全く衰えない。3号は慎重にローラーを進めながら、シャケのラツシユに対抗する。

「これ、見てるだけだと結構気持ちいいわねー。あっカズマ、虫がそっちに行っただわよ」

「移動するのかよーああもう、一体何が起こっているのかさっぱり分からないんだけど！」

後ろはいつものように騒がしいが、一向にシャケが止まる気配がない。極力インクを消耗しないように転がしているものの、このままではインクが無くなり、アクセルに帰れなくなる可能性がある

る。インクが尽きるか、シャケがいなくなるかの勝負だったが、軍配は3号に上がりそうだ。

「3号、敵のまだ奥にいるみたいだが、多分シャケの群れはこれで最後だ！もう一気に転がしてもいいんじゃないか？」

「ねえねえ、私もそれやってみたいんだけど、最後だしいいわよね？」
それほどインクは残っていないが、アクアにスプラローラーを差し出すと、意気揚々とローラーを振り回し討伐していく。3号はローラーのインクで討伐したが、アクアは単純にそれで殴っているだけだ。ストレスが溜まっていたのかやけに力んでいるが、これで行くのかシャケのラツシユを切り抜けることができたようだ。

周囲も明るくなって視界が広がり、ヒカリバエもどこかに飛んで行ってしまった。侵入して早々に戦闘になったものの、これでようやくクエストを再開できる。

「えっと……。ようやく探索を始められるんですよね？」

「ああ。正直私はあの中に放り込まれてみたかったが、全滅してしまったものは仕方がない。奥の魔物も討伐してしまおう」

ダクネスなら本当にシャケのラツシユを正面から受け止められそうだが、絶対的な確証はない。危険なことは止めるよう3号が伝えたものの、ダクネスはにやけているままだ。

洞窟の奥に近づいていくにつれ、シチュエーションやらゴブリンやらとダクネスの独り言が増えていくが大丈夫なのだろうか。3号が心配した様子で見つめていると、カズマから放っておいてやれとのこと。

気を取り直して洞窟の奥へと足を進める3号達。今回のクエストは、もう少し続きそうだな。

入り組んだ洞窟の奥には、簡易的な明かりと乱雑に武器が置かれている大きな空洞があった。天井はかなり高く、この場所にゴブリンが隠れていたと思われる。周りを見渡せば小さな通路のよう

なものが見えるが、カズマによると通路の先に何匹か潜んでいるそうだな。

なぜか突撃することになり、カズマが通路の奥に駆け込むと、それを見たカズマが慌ててダクネスを追いかけていく。3号も遅れて走ろうとしたものの、ゴブリンを討伐しにいったはずのカ

ズマがなぜかこちらへ戻ってきた。その緊迫した表情を見ると、通路の先で何かを見つけたらしい。

「アクア！今すぐこっちに来てリザレクションを使ってくれ！今ならまだ間に合うはずだ！」

いつになく真剣な表情になったアクアが、カズマに案内され通路の奥へと進んでいく。3号とめぐみんもついていくと、そこには何かに倒されたであろう数人の冒険者が床に伏せていた。

「まだ間に合うから安心して。カズマ、ゴブリンはどこにいったの？周りが安全じゃないと私達もこうなるわよ」

「ダクネスが倒した。と言っても、俺がここに来た時にはもう瀕死だったよ。多分、あのシャケにやられたんだろうな」

今からアクアはこの冒険者達を生き返らせるそうで、アクアに念のため辺りを見張っていて欲しいと頼まれた。3号は通路から空洞に戻り、周囲を注意深く監視する。特に魔物の気配がするわけ

でもないが、空洞に置かれている壊れた武器や、設置された照明が気になっていた。

床に落ちている武器は、壊れてはいるものの特に使い込まれているように感じられない。乱雑に置かれた明かりも、最初からここにあったわけではないだろうし、同じものを街で見かけていた

3号には、あれが人が持ち込んだものと予想することは簡単だった。

武器もおそらく先ほど倒れていた人間のものだとする、ここでゴ布林かシャケとの戦闘が起こっているはず。3号が見張りを続けていると、同じく辺りを見張っていたダクネスが、冒険者が

目を覚ましたことを伝えてくれた。

先ほどからさぞ当たり前のように話されていたが、今アクアが行ったことは死者の蘇生。3号も一応リスポーンを経験してはいるが、あれはナワバリバトルでの出来事であり、死んでしまった者は

2度と生き返らない。この世界ではよくあることなのかもしれないが、アクアは只者ではないとの疑いが確信に変わる。キョウヤの言う通り本当に女神の可能性もあるが、今は冒険者の救護が優

先だ。3号は急いで通路の奥へと進んでいった。

生き返った冒険者の話によると、最後に見たのはゴ布林ではなく大量のシャケ。予想以上に巣穴に隠れていたゴ布林を退治するため、一旦街へ帰ろうとしたところに襲撃され、そこから記憶

が無いらしい。ついにシャケの被害者を確認してしまっただが、隠れていたゴ布林はダクネスが討伐した数匹だけではないようだ。そのゴ布林はどこに行っただのか疑問に思う前に、別の冒険者が

襲撃の詳しい様子を話してくれた。

我が物顔で巣穴に侵入したシャケは、その場にいた人間に目もくれずゴ布林に襲い掛かり、武器を奪っていったらしい。その後洞窟が急に暗くなったので明かりを置いたところで、その冒険者

の記憶は途切れてしまったようだ。その後はおそらくシャケのラッシュに対応できず倒されてしまったのだろう。しかし、武器や道具は無事だったようで安心してようようだ。

「あなたたち、これを機にアクシズ教に入信しなさい！私が助けてあげたんだから、もちろん入信するわよね？」

先ほどまでへこへことお辞儀をしていた冒険者達の目の色が変わり、怯えた様子で洞窟の外へと走り出していった。一体何を言ったのか気になる3号だったが、あの怯えた冒険者を見ると聞く気が失せる。きつと聞かなくてもいいことだろう。

「それじゃ、俺達も帰るか。色々あつたけど、今日も無事でよかつたよ」

「何綺麗に終わらせようとしているのですか。私まだ爆裂魔法を撃つてませんよ?」

カズマが強引に話を切り上げると、全員で洞窟を脱出するべく歩き出した。道中はとても暗く感じたが、もう一度同じ道を歩くと確実に明るくなっていると感じる。サーモンランで特殊な状況が

発生した際に辺りが暗くなる現象は、この世界でも起こるようだ。

赤い日光が見えてきた。外はまだ夕方のようであつた。3号だったが、洞窟の前をうろつく一匹のシャケが目に入る。

「なんだか縁起が良さそうなシャケだな。3号、あれは何か知ってるか?」

他の個体と違って黄金に輝くそれは、キンシャケとよばれる珍しいシャケ。1万匹に1匹の割合で生まれる珍しいシャケだが、特殊な状況になると結構な確率で見かけることがある。その他の

シャケと違い比較的長生きで、知恵に秀でているのが特徴だ。

もちろん、攻撃すれば見た目通りの金イクラを落とすが、カズマに説明している間にこちらを発見したようで一目散に逃げだしていく。だが、それを見逃すめぐみんではなかつた。

「3号、あれは攻撃していいシャケなんですね?撃ちますよ!もう撃つちやいますよ!」

3号が魔法を撃つことを許可した瞬間、逃げるキンシャケを中心に大爆発が起こる。恒例行事ではあるが、思わず耳を塞ぎ風圧に耐える3号と比べて、カズマ達は耳も塞がずじつと立ってその様

子を眺めている。爆裂魔法を目の前にしても、慣れてしまえばあのような反応になるのだろうか。

まともに爆発を受けたキンシヤケは消滅し、30個を優に超える金イクラがその場にばら撒かれていく。どうやらラツシユ時に現れるただのキンシヤケではなく、大量に金イクラを貯めこんだ当たりのキンシヤケだったようだ。その光景を見た全員が走り出し、持てる限りの金イクラを抱える。

「全部よ！何としてでも全部の金イクラを持ち帰るのよ！今度は4人いるんだもの、きつと全部持って帰れるわ！」

「俺めぐみんを背負わないといけないからそんなに持って帰れないぞ……」

アクアが期待しているほど持ち帰れないが、かなりの数の金イクラを持った3号達は、クマサンに報告するべくアクセルの街へ向かった。これだけあれば、きつとしばらくは生活に困らないはず。

3号は前が見えないほどの金イクラを抱えながら、アクセルの街へと歩くのであった。

『やあやあ、お疲れ様。生きて帰ってきて、さらに大量の金イクラを持ってきてくれたようで何よりだ…… 集めた金イクラは、そのイクラコンテナに納品してくれたまえ』

順番にギルドのイクラコンテナに納品する3号達。到着したところには日は落ちてしまったが、念願の報酬を受け取る時間だ。全員の納品が終わったところで、クマサンは話を続ける。

『さて、ワタシたちクマサン商会は現場での結果をなによりも重視している…… 今回持ち込んでくれた大量の金イクラは重要なエネルギー源となるだろう。では、報酬の50万エリスを受け取ってほしい』

全員に分けて各10万エリスが報酬として支払われた。こんな大金をクマサンはどうやって集めたのか知りたいが、どう聞いても答えはくれないだろう。

カズマ達は早速沢山の料理を注文しているため、3号も同じくいつもは食べない少し高めの料理を注文すると、クマサンから小さな音で話しかけられる。

『3号、明日の朝にギルドに来て欲しい…… 会わせたい人物がいるんだ』

会わせたい人物が誰かは分からないが、クマサンのお願いを承諾すると、注文した料理を受け取りテーブルに置く。アクアの宴会芸を眺めながら、どんな人物が来るのか想像する3号。

武器を奪い魔法を扱うシャケに、突如発生したラツシユ。気がかりなことは沢山あるものの、今はギルドで始まった宴会を楽しむのであった。

ウイズ印のタンサンボム

クマサンの呼び出しに応えるべく、現在3号はギルドに居た。会わせたい人物がいるとのことだが、3号にはさっぱり見当がつかず、どんな人物が来るのかと待ちわびている。椅子に座って待とうと移動した時、ちょうどその人物が現れた。

『紹介しよう、ワタシ達クマサン商会と正式に業務提携をすることが決まった、ウイズ魔法店のウイズさんだ』

「3号さん、おはようございます。とはいえ、もう私のことは知っていますよね」

意外な人物が現れた。クマサンの話によれば、ウイズの研究に関心を寄せたクマサンが、クマサン商会の技術と商品を提供する事を条件に、ウイズ魔法店の薬品とウイズ自身の魔法やこの世界の

知識を求めたらしい。どちらにとつても特に悪い話ではなく、契約はすぐに成立したようだ。

『3号、これを見てほしい……一見ただのスプラッシュボムだが、自身のインクにウイズさんの薬品を混ぜている。どうなったかは、ウイズさんに説明を任せよう』

「はい……このインクには、空気に触れると爆発するポーシオンが混ぜられていて、威力が飛躍的に向上しているんです!」

どうやらクマサンはインクの見た目をした兵器の製作を始めたらしい。ウイズ曰く、この世界の魔物、それも強靱な部類でも手痛い損傷を与える破壊力抜群の品。ただ、空気に触れると爆発して

しまうため、余程強い衝撃を受けないかぎり爆発しないようにできているようだ。

元からクマサンは自分で改造したブキを所有していたりするなどおかしな面もあったが、これもその一面なのだろうか。一方クマサン商会は、使い道がよく分からない機械や、金イクラのエネルギー

ギーを使った発電機などを提供しているらしい。

『魔法といった概念が存在するこの世界で、電化製品が使われるのかと思っただが…… 気に入ってもらえてなによりだよ』

そんなものを売りつけていいのかと考える3号。しかし、ウイズは特に不満に思っていないようで、今後もこの関係が続けていくそうだ。

一通り話が終わった所で、3号はクマサンから特別な依頼を頼まれた。ウイズの所有しているインクが少なくなってきたので、もう一度提供してほしいとのこと。

「色々と実験をしていたら、結構な量を消費してしまつて……。クマサンさん、確かもう1つ頼みたいことがありますよな？」

『何度も言っているが、クマサンと呼んでくれ……。3号、ウイズの作つた特殊なブキは幾つかあつてね。この依頼で少し試してみてもいい』

クマサンに案内されたのは、アクセル付近に現れた一撃熊の討伐。駆け出しの冒険者である3号が受ける依頼ではないが、何か勝算はあるのだろうか。身の危険を感じた3号は、なぜこの依頼なのかをクマサンに尋ねた。

『見てもらった方が早いですが、ウイズの技術で強化されたこのタンサンボムなら、この依頼を簡単にこなせるだろう……。』

ウイズがなぜか嬉しそうにタンサンボムを取り出し、3号に解説を始める。見た目は3号が知っているタンサンボムだが、はたしてどのように強化されたのか。ウイズの言葉に耳を傾けた。

「この爆弾、本来は振れば振るほど強化されますが、それでも限界があります。ですが、この強化されたタンサンボムは、振ればパワーがどんどん溜まつていき、最終的にはあの爆裂魔法に匹敵する威力になるんです！」

めぐみんの爆裂魔法を知っている3号にとって、その売り文句は非常に興味を惹かれるものだった。一体何度振ればいいのかは想像もつかないが、想像を絶する威力を誇る爆裂魔法を手軽に誰でも

持ち運べるのは、革命と言つてもいいのではないだろうか。

「ただ、振り過ぎちゃうと勝手に爆発しちゃうのが欠点なんですよ……」

『自爆してしまうと、確実に跡形もなく消し飛ぶだろうね……。振り

すぎに注意してくれたまえ』

前言撤回、非常に大きなリスクを伴う危険なボムになっているようだ。このままでは、一撃熊に粉碎されるか、強化タンサンボムが炸裂するか、自爆して消し飛ぶかの三択である。難しい選択だ

が、あまりにも危険すぎるように感じる。

『確かに危険だが、3号がデータを集めてくれれば、いずれ誰でもシヤケに対抗できる便利なアイテムになるだろう…… 引き受けてもらえないだろうか』

そこまで言われてしまえば、3号が出発せざるを得ない。インクの扱いに最も長けているのは自分だと理解しているため、このような危険なアイテムを誰かに預けるのはさらに危険だと判断し

た。3号は強化タンサンボムを受け取り、目的地へと出発する。

『そのタンサンボムは1つしかない。この起動力のあるブキを上手く使って、距離をとりながらエネルギーを溜めてくれたまえ』

ギルドから出た3号にボールドマークが届けられた。確かにこのブキなら逃げ回ることができるが、一撃熊に対して短い射程のブキを持たせるあたり、本当に強化タンサンボムのみで討伐させるつもりのようなだ。

3号はため息を抑えながら、一撃熊が出没するアクセル近郊の森へと向かった。

木々が生い茂る深い森へと辿り着いた3号。まだ昼にもなっていないほどの時間ははずだが、葉が日光を遮り視界は良くない。かつては多くの生き物が住む森だったようだが、ベルディアの影響かそれらを見かけることは無かった。

街の近くに一撃熊が現れたのも、食料を探して街の近くまで移動した可能性がある。そう考えると、改めて生態系に与えるベルディアの影響の大きさを感じさせる。

不意をつかれてしまえば一撃で倒されるため、インクを使わず静かに魔物の手掛かりを探す。幸いなことに、どこかへ向かう大きな足跡がすぐに見つかった。3号は早速足跡を辿っていくと、何

やら足跡の数が増えているように感じる。依頼では魔物の討伐数を聞かされていないが、もしかすると複数の一撃熊を討伐しなければいけないと考えると、つついたため息を吐いてしまう。

その瞬間だった。3号のため息に反応するように、周囲の空気が張り詰める。命の危機を感じた3号は、咄嗟に地面を塗って木の陰に隠れた。インクに潜る音に反応するように、こちらに大きな振動が近づいてくるのを感じる。既に一匹が近くにいたようだ。

このままじつとやり過ごしてしまいたいが、警戒しているのか一撃熊はその場を動かない。木の陰に隠れたインクに興味を持たれてしまえば、3号の身は安全でなくなるだろう。

こうなってしまうっては音を気にしている場合ではないと判断した3号は、一撃熊に向けてカーリングボムを投げた。地面にインクの道を作りながら進んでいき、相手の視線はそちらに釘付けになる。

一撃熊がカーリングボムを拾い上げると、ボムが爆発し顔中がインクまみれになった。

インクが目に入ったのか、自身の目をこすりインクを落としている様子を確認した3号は、そつとインクを抜け出し、一撃熊から距離を取って、安全地帯を作り始めた。多少物音を立ててしまう

が、地面がインクで塗られていなければ攻撃の回避などできたものではないし、ましてや強化タンサンボムのエネルギーを溜めることなど不可能だろう。

広い範囲ではないが、地面だけでなく木々や岩、地形そのものを塗って移動範囲を拡大させていく。数あるシューターの中でもトップクラスの塗り性能を誇るボールドマーカールのおかげで、森の一部を真っ青にすることにそれほど時間はかからなかった。

3号が強化タンサンボムを取り出し、一心不乱に振ってエネルギーを溜める。シユワシユワとした音に反応してか、一撃熊が数体こちらに近づいてきているが、これだけ地面を塗ってしまえば効

果を最大限発揮するまで時間は稼げると考え、足音が聞こえても気にせず振り続けた。

3号は焦っていた。現在4体の一撃熊に囲まれているが、一向にエネルギーが溜まる気配がない。もう少し溜まり具合を教えてほしいところだが、振っても音を立てるだけで一切強化タンサンボム

に変化が見られない。振るペースを上げてもいいが、振りすぎると自爆することが頭から離れず踏ん切りがつかない。中々厄介な品を渡してくれたものだ。

一撃熊も様子を見るのをやめ、3号に向けてその鋭く大きな爪を振り下ろす。素早い動きではないため簡単に躲せるが、4体もの魔物を相手にしながら強化タンサンボムのエネルギーを溜めるの

は至難の業だ。距離を取っては振り、攻撃を躲しては振りを繰り返すものの、相変わらず溜まっているのかいないのか反応がないままだった。

森に差し込む日光の色が変わったのを確認し、3号は大きいため息を吐いた。あれからしばらく強化タンサンボムを振り続けたものの、1段階膨らんだだけで相変わらず判断がつかない。昼食を

食わずに振り続け、ついには夕飯を食べる時刻になってしまい、律儀に3号を追いかけ続けた一撃熊も興味を失い始めている。このままでは討伐対象が帰ってしまうかもしれない。

4体の一撃熊が集まり、何やら話し合いを始めているように見える。会話の内容はさっぱりだが、このまま巢に帰られるとこれまでの努力が水の泡になってしまう。3号は強化タンサンボムを

振るのをやめ、4体の中心へと思い切り投擲した。

めぐみんを参考にし、少しでも爆発が強力になるよう祈りをこめ、3号は呪文の名前を叫ぶ。

強化タンサンボムは凄まじい威力を秘めていた。一体何を混ぜてしまったのか、3号がエクスポーションと叫んだ時、既に身体が宙に浮いていた。流れるように景色が切り替わり、何かに頭を

ぶつけると、痛みを感じる前に意識を失ってしまうのだった。

頭がずきずきと痛むのを我慢しながら、目を覚ました3号は状況を

確認する。森のインクが消えていないので、それほど時間は経っていないようだ。

インクを頼りに森を進むと、ひと際明るい場所を発見し、3号はそこからへ歩いて行く。そこには、ありとあらゆる地形が吹き飛び、クレーターのようになぐれた真つ青な地面が広がっていた。

冒険者カードを確認すると、一撃熊を4体討伐したとの表記がされているので、おそらく討伐は成功したはず。結構な範囲が森では無くなってしまったが、これでクエストは達成されたのだ。

爆裂魔法に匹敵するとの表現は間違っていないが、この強化タンサンボムは一般の人間、それも冒険者ではない街の住民が自衛用に持つには、あまりにも危険すぎる。3号はクエストの結果を

報告するため、ギルドへとスーパージャンプした。

早速クマサンに報告するためギルドへ突入し、3号は少し不機嫌な表情を作りながら報告する。何度か命の危機を感じたため、文句の1つでも言つてやらないと気が済まなかった。

『やあやあ、おつかれさま。その顔を見るに、無事に討伐に成功したようだね……。ありがとう3号、詳しい報告は受付にしてくれたまえ』
あつさりと成功を見抜かれた3号は、不満に思いながらも受付に報告する。地形が変わるほどの威力を秘めていることや、エネルギーを溜めるのに時間がかかることを伝え、その後クエストの報酬を見て、珍しく3号の不満は爆発した。

『まあまあ、そう怒らないでほしい……。確かに現金は1万エリスだが、本当のほうしゅうは別に用意しているんだ。これからこの世界は冬になる……。馬小屋で生活するのは厳しいだろう』

このギルドでスペシャルウエポンを使つてしまいそうな勢いだつた3号。一度冷静になり、クマサンの言葉に耳を傾ける。確かに最近は少し肌寒いと思つていたが、一体何を用意しているのだろうか。

『ここから先は、ウイズさんの依頼の内容になるね……。アクセル近郊の住宅に住み着いた幽霊の討伐。詳しい説明は後だ、今すぐ地図に

記した地点にジャンプしてもらいたい……』

今日はやけにため息を吐く回数が多い。3号は不満を抑え、クマサン印のスマホを確認、目的地である住宅に飛んだ。幽霊相手にどう戦えばいいのかは分からないが、クマサンの指示の通りに急いで目的地に向かうのであった。

昨日に続き2度目の依頼。街の近くにひっそりと佇む一軒家の周辺には、依頼主であるウイズが立っていた。

「3号さん、一撃熊の討伐をしてください、ありがとうございます！あの爆弾以外にも様々なものを用意しているので、是非ウイズ魔法店でお買い求めください！」

いきなり商品の宣伝をされたが、その後は依頼の話になった。幽霊の魂は特殊な魔法で成仏させているようだが、3号のインクに成仏を促すような神聖な効果があるか試してみたいらしい。

結果は安易に想像できるが、依頼のために一軒家に突撃する3号。2階建てではなく平屋で、1人で暮らすには十分な広さの家だが、ウイズの話によると家主は既に家を手放してしまったようだ。

家の内部、玄関を抜けリビングに進むと、見慣れた荷物が床に落ちている。自分のスーツケースにシューター系のブキ、よくみれば部屋の中にはデンチナマズを利用した発電機が設置されている。

訪れた事が無いはずの場所だが、こう見ると一種の心霊現象のように感じてしまう。

「ああ、これは3号さんの荷物なんですね。ここに着いた時からあったので、前の家主の方の荷物かと……。あつ、3号さん、幽霊がいましたよ！少しインクを撃つてみてください」

確かにその場にいるのを発見した。目の前の透けた人間は、怪談といった都市伝説のようなものだと思っていたが、この世界には普通に存在するのだろうか。インクを撃つ時点で失礼ではある。

が、念のため手を差し出してもらい、少しブキのインクを当てる。「何も起こりませんね……。3号さん、ありがとうございます。今日はもう遅いので、インクの補充はまた明日ですね。あとは私が何と

かするので、クマサンさんからお話を聞いてください」

幽霊に手を差し伸べてもらう貴重な体験をしたが、ウイズが何かを唱えると、幽霊は徐々に姿を消し、最後には何も見えなくなった。ウイズが帰るのを見送ると、クマサンに依頼が終わったこと

を連絡する。一体どんな報酬か、3号は期待しながら尋ねた。

『ウイズさんの依頼も終了したようだね。さて、ほうしゅうはその家だ…… 時々何か遊びに来る物件だが、上手く活用してくれたまえ。既に荷物の引っ越しは終わっているよ……』

とんでもないことを言い出すクマサン。自分の家を持てるのは嬉しいが、余りに突然で質問したいことが多すぎる。3号は色々尋ねたが、大半は企業秘密で、家賃は支払わなくてもいいが、これからの活躍次第では支払ってもらうかもしれないとのこと。

部屋の照明のスイッチを入れると、リビングが一気に明るくなった。デンチナマズのおかげで電気が通っているし、3号の世界でも見かけた電化製品の数々も家に備わっている。冷蔵庫の中には

この世界の野菜や肉といった食料も入っていて、まさに至れり尽くせりと言えるだろう。

適当な料理を作り、食事を終えた3号は、冒険者カードの確認を始めた。一撃熊を4体討伐したおかげで、レベルもぐんと上がってスキルポイントも獲得し、実感はないがステータスも上昇しているようだ。少し背伸びをして高度なスキルを習得できないか探してみたものの、職業としての冒険者の仕様で、誰かからスキルを教えてもらわないといけないことを思い出す。

キョウヤから教わったのは初級の呪文のみ。しかし、アクアの回復魔法は見ただけだが効果の低いものは習得できるので、とりあえず初級の回復魔法を取得した。試しに強打した頭に使ってみる

と、痛みが徐々に治まっていく。

まだポイントが余っているので、もう少しスキルを習得したい3号。覚えられるスキルを眺めていると、唯一の中級の魔法、雷撃魔法が覚えられるようだ。誰かに魔法を教えてもらった覚えはな

いが、覚えられる原因はおそらく先日戦ったカタパッドだろう。

何度も呪文を受けているうちに、何か感覚を掴んだのかもしれない。早速3号は持っているポイント全てを消費して雷撃魔法を習得し、家を出て試しうちを始めた。

かなり離れた場所まで攻撃でき威力も高い便利な呪文だが、3号の持つ魔力では5回ほど放つのが限界だった。何故だか気分が悪くなり、全身に倦怠感を感じ、3号は爆裂魔法を撃った後のめぐみんの気持ち少し分かった気がした。

無理をせずこの世界の自宅に帰って、藁ではなくベッドで眠る。寝具の感覚が違って中々寝付けなかったが、これは贅沢な悩みだろう。

見慣れない天井だと思ったものの、すぐに前日の出来事を思い出した。ギルドに向かうために外に出ると、昨日は暗くてよく見えなかった家の周辺の景色がはつきりと分かる。アクセルの街に近

いが、目の前には街の外壁があるだけで、すぐに街に入れるわけは無く利便性が良いとは言えない。クマサンがこの家を選んだのも納得した所で、3号はスーパージャンプでギルドに出発した。

スーパージャンプのおかげでどこにいてもギルドへ向かえるのは本当に便利だと実感した3号。昨日約束した通りウィズ魔法店にリンクを提供すると、依頼を探してギルドへ再び跳んだ。

「街の湖の浄化！私にぴったりのクエストじゃない！」

アクアが何やら自分に合ったクエストを見つけたらしく、カズマと相談しているようだ。邪魔しては悪いので、そつとクマサンのいる受付に歩くが、クマサンからのオオモノシヤケの報告は無

い。またもや1日中仕事が無くなりそうなので、カズマのクエストに同行するか迷っていたが、クマサンもそれに賛成しているようだ。『オオモノシヤケの報告は無いが、その湖にシヤケが潜んでいる可能性はゼロではない…… お願いして、一緒に連れて行ってもらおうといんじやないかな』

そうと決まればカズマに頼み、無事にクエストに同行の許可を得た。アクアが湖の浄化をするまで待つていれればいいそうだが、万が一危険なシヤケが現れた場合は即刻討伐することを約束した。

「確かに、護衛は1人でも多いほうがいいからな。じゃあ、俺の考えた作戦を決行するか。とりあえず檻を借りないと……」

檻を借りてどうするのかは知らないが、その間に軽く食事を済ませると、準備ができたらしいカズマがその作戦を決行する。何故か檻に入れられたアクアと共に、湖へと向かう3号であった。

不意打ちのセオリ

檻に入れられたアクアを連れ、3号とカズマ達はアクセルを歩いていた。ブルータルアリゲーターの攻撃により檻は傷つき、檻の中で攻撃を受け続けたアクアは心身ともに疲労していた。

オオモノシヤケの出現を警戒してクエストに同行したものの、湖にはシヤケの1匹も現れなかった。7時間ほど浄化を見守っていたが、その間といえは雑談や試し撃ちをしているだけで、本当に

何も起こらなかったのだ。

3号は心配してアクアに声を掛けるが、外に出たくないとか話してくれない。奇妙な歌を歌いながら運ばれるアクアに、1人の青年が駆け寄ってくる。忘れもしない、あれは3号に初級の魔法を

教えたミツルギキョウヤだ。

確かアクアに剣を貰ったと言っていたが、心配して様子を見に来たのだろうか。キョウヤは檻の前に立ち鉄格子を掴むと、魔物の攻撃でも折れなかった鉄格子が、いとも簡単に折れ曲がってし

まった。その異様な腕力に、カズマ達も3号と同様に驚いている。

「何をしているのですか女神様！こんな所でっ——」

「私の仲間に馴れ馴れしく触れるな。貴様……何者だ？」

キョウヤに怯みもせず仲間を守るダクネスは、まさに騎士の鑑だろう。それを見たカズマが何やらアクアに耳打ちをしていると、何故かアクアが元気を取り戻し、檻の中から脱出すると、キョウ

ヤに向けて話を始める。しかし、アクアはキョウヤのことを覚えていないようだ。

その後の会話を何となく聞いていた3号だったが、内容はあまり理解できなかった。2人の会話が終わるのを後ろで待っていると、キョウヤが突然カズマの胸倉を掴み、先ほどの湖の出来事や檻に

閉じ込めたことについて話す。激怒しているように見えるのは、アクアに何か恩があるからなのだろうか。

周囲の人々が集まってきていることを気にした3号は、檻の上によじ登ると、カズマ達から視線をそらすために一種のパフォーマンスを

始めた。現在3号が持っているのはスプラシューターだ

が、サブウエポンのクイツクボムをフリーズで凍らせ、花火のように打ち上げて爆発させると、歓声と共に拍手が沸き起こる。宴会芸のスキルを取得するか真剣に考えた3号だったが、ここでキョ

ウヤから声を掛けられる。観客にお辞儀をして地面に降り、キョウヤの話聞く。

「3号。君はどう思う？こんな冒険者より、ソードマスターの僕の方がアクア様に相応しいと思うのだが」

「さっきのもう一回やってくれない？私の宴会芸のネタと交換でいいから、ね？」

2人から全く違う話をされているが、アクアにはまた後でと伝え、キョウヤの質問に答える。といつても、本人がカズマのパーティを望んでいるのだから、キョウヤは潔く身を引くべきだろうと

いった内容だが、キョウヤは納得しなかったようだ。

「勝負をしないか。僕が勝ったら、アクア様を譲ってくれ。君が勝ったら、何でも1つ言うことを聞こうじゃないか」

カズマに勝負を持ちかけるキョウヤ。アクアを物扱いするのはいかかがなものかと思っていると、カズマが答えると同時に剣を抜き、手を前に差し出し窃盗スキルを使う。キョウヤは不意をつかれ

自分の剣で攻撃を防ごうとするが、それが悪手だったのか、カズマのステイルで魔剣グラムを盗まれてしまう。すぐに盗まれた自らの剣で頭を殴られ、キョウヤは気絶してしまった。

自分の持つスキルを上手く使った、お手本のような戦いだった。キョウヤの仲間の女性がカズマを非難しているが、公衆の面前で俺のステイルが炸裂するとの一言で、2人とも逃げ出してし

まった。女性陣からの冷たい視線がカズマを襲う。

「あー、3号、俺達はギルドに行くけど、一緒に来るか？」

アクアや他のメンバーを物扱いしたのは良くないが、キョウヤの事が心配な3号は、回復魔法で少し治療してからついていくと伝える。

「真面目だなー。って、3号は回復魔法が使えるのか!?ちよつと俺に教えてくれ！大至急！」

「誰に教えてもらったかは知らないけど、それは絶対にダメよ！カズマ、今すぐギルドに行くわよ！」

カズマ達はあつという間にギルドに向かってしまった。キョウヤの頭部に回復魔法を使うと、少しだが腫れが引いたように見える。初級ではこれが限界だと判断した3号は、非常に重たいがキョ

ウヤを背負ってギルドまで向かおうとするが、ここで仲間の女性2人が戻ってきた。

2人とも私が背負っていくとキョウヤを取り合っているため、巻き込まれないよう2人の前にキョウヤを下ろし静かにギルドへ飛んだ。はたしてキョウヤは魔剣グラムを取り戻せるだろうか。

『そうか…… シャケは1匹もいなかったようだね。もしかしたら、シャケ達は何かを感じ取って隠れているのかも知れないね……』

ギルドにてクマサンに今日の出来事を報告した。報酬金は1エリスもないが、最近は割と金銭に余裕があるので、1日程度は収入が無くとも何とかなる。

「3号、きつきのあれをもう一度見せてくれない？ほら、インクが爆発するあれよ！」

「花火みたいだったよな。まあ、急にあんなことした理由は知らないけど」

アクアに先ほどのインク花火を見せたり、いつものように食事をしたりと平和な時間を過ごしたものの、その時間は長く続かなかった。3号が家に帰った後、翌日の出来事だった。

起床して朝食を食べ、しばらく自分のブキの整備をしていた時、街の放送が耳に入る。冒険者カズマとその一行はすぐに正門へ向かわないといけないという内容だが、カズマと関わりがあるとする

れば、またベルディアが街にやってきたのだろうか。

『3号、放送は聞いたね…… 冒険者は正門へと向かわないといけないようだが、3号は街の外壁の上に向かうんだ。続きはその後、ブキは持たなくていいから、すぐに向かってくれたまえ』

クマサンからの通信だ。スマホを手に確認すると、街の外壁にジャ

ンピーコンが設置されている。3号は家を出ると、すぐさまジャンプし外壁へと飛んだ。飛んでいる最中に、凄まじいオーラを放つベルディアの姿が見えた。一目見ただけで分かる。あれは相当怒っているのだろう。

街の外壁の上に着地すると、遠くの方にベルディアが居ることを確認する。着地点の周りには、特徴の異なる2つのブキと、ボムとといったサブウエポンが床に置かれていた。

『よし、外壁の上に着いたね。まずは外壁を塗ってスペシャルゲージを溜めるんだ…… 床に置いているスパイガジェットを使つてくれたまえ』

シエルターの一種であるスパイガジェット、傘の形をしたシエルターの中でも、傘を開きながら射撃ができる特殊なブキ。攻撃力はそれほど高くないため、本来は味方と一緒に戦うと真価を発揮

するのだが、今は気にしていられないので、外壁の上を塗りたくる。塗り性能が高いため、ゲージを溜めることに時間はかからない。

『後はそのスプラスコープを望遠鏡代わりにして魔王軍の幹部の様子をうかがうんだ…… 奴が隙を見せた時、スーパーチャクチで攻撃を仕掛けるといい』

言われるがままにベルディアを観察するが、クマサンの話では3号がベルディアを攻撃し、戦うように話している気がする。元から決定打が無いので勝てる気はしないが、時間を稼げということ

だろうか。ベルディアは配下のアンデッドを召喚し、冒険者への攻撃を指示している。

アクアがアンデッド達を引き付けると、ベルディアがいる場所へ誘導し、アンデッドをまとめてめぐみんの爆裂魔法で仕留めたようだ。そろそろ飛ぶべきかクマサンに尋ねるが、タイミングはま

だのようだ。

『もう少し待つんだ。しかしあの幹部、凄まじい存在感を放っているね…… 3号、攻撃を仕掛ける時は、あの存在感を利用して直接飛ぶんだ。いいね?』

あれだけ目立っているのだから直接飛べるだろうと無茶な指示を

されるが、おそらく出来ないことはない。スコープを覗きベルディアを観察していると、今度はダクネスが一对一で勝負をしているようだ。何とか持ちこたえているが、このままではダクネスが危ない。

『このままではあのクルセイダーが持たない。彼女が倒されると、奴の攻撃に耐えられる冒険者はいないだろうね……』

3号はその言葉を聞く前に、スパイガジェットを手に最前線へ飛んだ。着地点はもちろんベルディア、魔物相手に使用したことが無いためどれほどのダメージになるか分からないが、結果はど

うであつてももう引き返せない。全身全霊のスーパーチャクチを、ベルディアへ叩き込んだ。

「くそっ、一体何だ!?! ……この青いインク、そうか!」

驚かれた程度でそれほどダメージは無かった。ベルディアの剣や鎧は所々青く染まり、地面には円状のスーパーチャクチの跡が残っている。

「3号!何をしているんだ、私の後ろに下がれ!」

「……俺に勝負を挑むつもりか?まあいい、その騎士より先に相手になつてやろう!」

ベルディアはこちらに剣を向けると、3号の立っている場所を地面ごと切り裂いた。何とか横に飛びのいたものの、インクに潜るという性質がばれている以上、潜伏はそれほど有効ではないだろう。

う。しかし、インクを発射する分こちらの方が攻撃範囲は広い。いくら撃つても剣で防がれてしまうが、この程度の攻撃なら躲してしまえばいいはずだ。なぜそうしないのだろうか。

射撃を続けているうちに周囲の地面は徐々に青色になっていき、3号にとつて有利な状況になっていく。ただ、スパイガジェットのインク弾ではダメージにならない。スーパーチャクチも一度見せてしまつているため、今後は通用しない可能性が高い。

「ちよこまかと動き回つて、鬼ごっここのつもりか?これ以上お前に時間をかけるわけにはいかないんでな!」

離れていたはずのベルディアが目の前にいる。近づくとスピードが余りにも速く、目の前に来たことを認識できなかった。その時、3号の足元からピピピと警告音が鳴り、小規模のインクの爆発が

起こる。サブウェポンのトラップを仕掛けていたが、たった今ベルディアが近づいたことにより起動、それを見たベルディアは攻撃を中止し、剣でインクの爆発を防いだ。

またベルディアはインクを躲さなかった。ここまで頑なにインクを受け止めるのには、きつと何か重要な理由があるはず。これまでのオクタリアンとの戦いと同じように、相手を観察し弱点を探

す。試しに、ベルディアの身体ではなく頭へ向けてインクを発射した。

またもやベルディアは攻撃を中止し、剣でインクを受け止める。角度を変えてインクを撃ち込み、トラップを駆使してベルディアに攻撃を当てるチャンスが訪れた。もう少し強力な一撃を撃ち

たかったが、欲張らずベルディアの兜の隙間にインクを当てる。

「ぐああつ！お前、さつきから何なんだ!? 頭とか目ばかり狙いやがって！魔王軍の俺が言うのも何だが、騎士道精神とかそういう物はないのか!？」

手段を選んでいれば間違いなく殺されるので、そういったことは言っていられない。攻撃が通用していると確信した3号は、すかさずベルディアの兜へ向けてフリーズを放ち、目の周りのインクを凍結させる。ベルディアは剣を地面に置き、目に張り付いて凍っているインクを両手で取り除こうとするが、その隙を3号は見逃さない。一気にベルディアと距離を詰めると、ベルディアは落ち着きを取り戻し、自身の剣を拾い上げて構える。

「くそっ、だが俺は魔王軍の幹部、目が見えなくともお前の位置は気配で分かるっ！」

ベルディアは正確にこちらの向いて剣を構えている。気配や聴覚で3号の位置を把握していると確認した3号は、ベルディアの前に立ち、攻撃せずとその場に潜る。危険は伴うが、3号が近づいた

と感じたベルディアは剣を思い切り振り下ろし、目の前にあった物

を斬った。

ベルディアははずれくじを引いたのだ。その剣で斬った物はウィズ印のスプラッシュボム、空気に触れると大爆発を起こすが、欠点としてとても強い衝撃が無いと爆発しない。ベルディアは目の

前にいた3号を斬ったつもりだったが、3号はウィズ印のボムに身代わりになってもらった。

3号は爆発に巻き込まれ吹き飛び、運よくカズマの元へ着地した。戦いを見ていたダクネスは少し巻き込まれ、インクが鎧に着いた程度の被害を受けたが、爆発をまともに受けたベルディアは一

体どうなったのか、3号はよろよろと起き上がり確認する。

「一体何なんだ……？お前といい城を襲ったシャケといい、インクと関わりと碌なことが無いぞ……」

「あれだけの爆発を受けたのにまだ耐えるのか……。だけど時間は稼げた、奴の弱点はインクと水だ！おいアクア、なんちゃって女神でも水の1つ出せるだろ?!」

まだベルディアは生きているが、カズマが弱点を発見したらしく、多少揉めているがアクアが大規模な水を放出する準備を始めているようだ。だが、大量の水が流れ、万が一3号に直撃した場合

間違いなく水に溶けてしまう。3号は後は任せるとカズマに伝え、一旦外壁の上へとジャンプした。分かっていたとはいえ、3号も至近距離で爆発を受けたため、身体に少なからずダメージは

あった。これ以上その場にいると、足を引っ張るだけだろう。

適当に回復魔法を唱え、地面と強く衝突した箇所を治療する。真下では見たこともないような量の水が流れ、ベルディアと一緒に外壁や建物を巻き込んでいた。

『3号、よくやったね……。シャケに街を滅ぼされる前に、魔王軍に滅ぼされてしまったては元も子もない……。』

大量の水を受けたベルディアは頭をカズマに奪われ、最終的にアクアによって浄化され、消滅した。突然の危機は去り、3号は安堵の表情を浮かべるが、3号の足元から物がひび割れる音が聞こえてくる。

まさか、アクアの召喚した水で外壁が崩れ始めているのだ

ろうか。

『今すぐ自宅に帰って休憩したほうがいいだろうね……早くしないと、そこはもう瓦礫になってしまうよ』

3号は落ちていたブリキを全て抱え、自宅に向けてジャンプした。音を立てて崩れる外壁を背後に、3号は自宅へと帰るのであった。

翌日。クマサンから呼び出されたため、荷物を持ってギルドに向かうと、ベルディアを討伐したからか祝勝会のようなものが開催されていた。

「よっ3号。昨日は派手に暴れまわってたな」

「悔しいですが、あの登場の仕方はかっこよかったですね。3号、あれはスキルなのですか？私も使ってみたいのですが」

残念ながらスーパーチャクチはスキルではない。めぐみんにそう伝えると、カズマに関して1つの疑問が浮かんだ。あの時にベルディアの弱点はインクと水だと言っていたが、一体どうしてそう

思ったのだろうか。インクはともかく、水の攻撃は一度も使っていないはずだ。

「3号が来る前に、クリエイトウォーターで攻撃したんだよ。その時のベルディアの反応を見てそう思ったんだけど、インクも若干通用したみたいだな」

カズマは3号が戦っている間、水の魔法を使える人物を集めていたらしい。結果的にはアクアの魔法で討伐したが、アクアが近くにいないければ全員で攻撃する予定だったそうだ。

本題であるクマサンの話を聞くため、ギルドの受付へと向かった3号。ついに報酬を受け取る時間が来たと、期待しながらクマサンの話を聞く。

『やあやあ、昨日はよくやってくれたね……だが、直接討伐に関わったカズマ君のパーティと比べると、金額は落ちることを許してほしい。さて、ほうしゅうの100万エリスだ』

受付から手渡されたのは、なんとその10分の1である10万エリス。話が違くとクマサンに駆け寄り、どうして報酬金額が少ないのか

説明を求めた。

『あの時に使ったスプラッシュボムは、製造にかなりの金額が掛かってね……。天引きした結果、10分の1になってしまったんだ。まあ、生きているだけいいじゃないか』

確かにあのボムが無ければ、その場から撤退できずに殺されていたかもしれない。納得はいかないが、報酬を受け取り、一度自宅へ帰ろうとする。

『3号、金額は結果的にプラスになったんだ……。マイナスになった人もいるし、そう落ち込むことはないよ』

マイナスとは一体何かを尋ねたところ、カズマ達の報酬は特別に3億エリスだったが、アクアの召喚した水の被害の弁償するため3億4000万エリスの借金が生まれたらしい。せつかく討伐したの

に散々な目に遭っているが、3号にできることは、高額な報酬のためにサーモンランに同行してもらおうことと、この世界に来たばかりのころに借りたお金を返すことだろう。

3号は一度自宅に帰るためにギルドを出て、スーパージャンプで家に帰った。上空からははつきりと崩れた外壁が確認でき、アクアの力の大きさが分かる。

『家についてからでいい……。3号、今後のことで話があるんだ。では、また連絡してくれ……。』

急な通信に驚きつつも、自宅に到着した3号。クマサンの今後の話とは一体何だろうか。部屋に入ってから、3号はクマサンに電話を掛けた。普段と少し違うクマサンに、思わず緊張してしまう。

『さて、いつものように単刀直入に言おう……。3号、今のままでは、これからこの街を襲う驚異に勝てない。キミはもつと強くなる必要がある……。』

街を襲う驚異とは、シャケのことだろうか。3号はクマサンに尋ねるが、曖昧な答えが返ってきた。シャケであって、シャケで無い物が襲ってくるらしいが、そんなことが本当に起こるのか、そ

もそもそんな生き物がいるのかも分からない。

『窃盗スキルを使うシャケ、ミサイルを強力にしたカタパッド……』

彼らはこの世界に対応してきている。シャケ達の成長するスピードを上回らないと、この街を守ることは出来ない……』

3号には、具体的にどうすればいいのか分からなかった。成長するペースを上げる為に強い魔物と戦って鍛えればいいのか、根本的にシャケの数を減らせばいいのか、やれることは沢山ある。

『3号、ワタシ達は、元々この世界にいるはずのない生き物だ。だが、シャケはこの世界に現れ、人々を襲っている…… ワタシ達の世界からもたらされた害のあるものは、ワタシ達が何とかしな

くてはならない。シャケ達が成長するなら、ワタシ達も成長しなくてはいけないんだ』

3号は話を理解できたが、元々そうだったつもりだ。より強くなるのは人間を守るため、そしてこの世界に来たシャケを討伐するためだ。

『それならいい…… あと1つ言っておこう。3号、キミはいつか元の場所へ帰る時がくる。いつまでもここに居られるわけじゃないんだ…… それを忘れないようにしてくれたまえ』

賑やかなギルドや、ベルディアとの戦い、カズマのような冒険者や街の人々を思い返す。いつかは分からないが、自分の世界へ帰らなければいけない時間が来る。クマサンのその言葉を、改めて胸に刻む3号だった。

秘密のモグラ叩き

『突然だが3号、この世界の魔物との戦いを思い返してほしい……
1つ、共通点があるはずだ』

祝勝会から翌日、3号は朝からギルドにてオオモノシヤケの報告が無いか確認していたが、クマサンから突然の質問を投げかけられた。

この世界の魔物といえは、最初に戦ったのはジャイアントトード、確か口にボムを投げ入れて討伐したはず。ゴブリンはカズマに倒してもらったが、その後の一撃熊はウイズのタンサンボムで討

伐した。ベルディアとの戦いでは、強化スプラッシュボムを直撃させてダメージを与えている。

『ボムを使つてばかりじゃないか…… 道具に頼るのは悪いことではないけど、1つくらい他の攻撃手段が欲しいね……』

思い返してみれば、3号はインクで地面を塗ってボムを投げてばかりいる。インク消費の激しいボムではいつでも通用するわけではないし、ウイズの力を常に借りることはできない。

強敵が相手でも、1つくらいは別の攻撃手段が欲しいというクマサンの意見も納得できるが、相手を一気に倒しきれ、強力な攻撃手段でなければ、ボムの代わりは務まらないだろう。

『まあ、こちらでも考えておくよ…… さて、今日キミに頼みたいことはこれだ。街の子供に冒険者について教えてあげてほしい、といった内容だね』

最近はおオモノシヤケの報告が無いのか、3号はこういったシヤケとは無関係の依頼を受けることが増えている。今回もそういった類の依頼だが、一体なぜ3号に依頼をしたのだろうか。

どうして自分が選ばれたのか気になった3号は、思い切つてクマサンに理由を尋ねてみた。

『確かにミツルギ君のようなレベルの高い冒険者も人気があるが、ここは駆け出しの冒険者が集まる街。カズマ君のように駆け出しで分かりやすい功績がある人物の方が、人気があるんだよ……』

カズマは上級職の仲間を連れ、見事魔王軍の幹部を討伐したために

将来有望な冒険者として見られていて、それは子供たちの間でも同様らしい。3号の世界での、次に話題になるであろうバンド

やアイドルといった、新たに活躍が期待される芸能人のような扱いなのだろう。

「勿論カズマ君にも同じくお願いしている…… それに3号、キミもカズマ君ほどではないが、そこそこ人気の冒険者なんだよ」

特に目立った活躍をした覚えが無かったが、クマサンの話によると、サーモンランに挑戦した新米の冒険者からの人気が高いらしい。一刻も早くレベルを上げたい冒険者が、インクを使い効率よ

くシヤケを討伐し、金イクラを手早く納品する3号を、さながら達人バイトボーイとして尊敬しているそう。その評判が、冒険者の口から子供たちへと伝わったらしい。

だが、3号はこの世界でカズマのパーティと一緒に戦ったものの、他の冒険者に戦っている姿を見せた覚えはなかった。一体なぜ、第三者が3号の様子を知っているだろうか。

『ああ、言っていないなかったね。アルバイトの研修に、キミの戦闘している映像を使わせてもらっているんだ…… 皆、最初は自分もこれぐらいできると思っているが、いざ現場で戦うと中々難し

い。文字通りのお手本として、3号の戦いは参考になっているようだね……』

まさか勝手に撮影されていたとも知らず、3号は少し恥ずかしくなった。録画するカメラや映像を映すモニターもこの世界に持ち込んでいるようで、これまでの、特にザコシヤケとの戦いをよく使用しているようだ。

基本的に3号はオオモノシヤケが現れなければ戦わないため、最近ではサーモンランに参加していない。ただ、ザコシヤケの目撃情報は多々あるようで、冒険者の育成を優先するために、3号には

極力依頼せずに、新米の冒険者だけで討伐に向かわせていた。

『話が逸れたね…… では、本日の正午、このギルドに集まってもらう。それまでは、カズマ君と子供たちに何を伝えるか考えておくとい…… 噂をすれば、ギルドに来たみたいだよ』

3号はギルドの入口に目を向けると、いつもの4人組が騒ぎながらギルドに現れた。どうやらカズマが子供たちに指導するのが納得いかないようで、特にアクアがいちゃもんをつけているように見える。

「ベルディアを討伐したのは私よ!? どうしてこんなヒキニートが子供に人気なのよお！絶対におかしいわー！」

「ニートじゃねえし！俺も理由はあんまり分かってないけど、魔物を倒さなくても30万エリスも貰えるんだぞ？こんなやるしかないだろ」

カズマの意見を聞いたアクアはすっかり大人しくなっていました。危険な魔物を討伐しなくても、子供に冒険者とは何たるかを教えるだけで高額な報酬が貰えるのだから、流石にアクアも文句

はなくなつたのだろう。

『カズマ君も来たようだし、本格的に説明を始めようか…… まず、冒険者についての講義の目的は、子供たちに冒険者が危険な職業だという事を伝えることだ』

「憧れるのはいいけど、とつても危険な職業ですよ、つて伝えればいいんだな」

収入が不安定で、常に命の危機が付きまとう職業だが、レベルが高かったり優れた魔法を扱う冒険者の影響で、将来の職業として確固たる地位を築いてしまったようだ。

『キミたちが伝えたいことを自由に話してくれたまえ…… だが、1つだけ必ず話してほしいことがある。それは、夜になったら早く眠ることだ』

なぜそのようなことを、と思つた3号だったが、クマサンには事情があるようだ。理由は何でもいいらしく、成長するためだとか、体力をつけるためだとか、適当に考えて伝えればいいらしい。

「確かに子供は早く寝るべきだとは思うけど、わざわざこんな場所で言うことか？」

『生活習慣は、簡単には変えられない…… できるだけ早く、子供たちには生活習慣を改善してもらわないと困るんだ。では、話はこれで終

わりだ。後はカズマ君と話し合ってほしい』

理由ははぐらかされてしまったが、クマサンには考えがあると判断した3号は、これ以上追求するのをやめ、カズマと講義の内容について話し合いを始めた。

3号は簡単にシヤケについてを話し、それと戦うことがどれだけ危険かを、できるだけ優しく伝える予定だった。しかしカズマは内容についてまだ決まっていけないようで、3号を含めた5人で何を

話すべきか会議が始まった。

「まあ、爆裂魔法さえあれば大抵の魔物は討伐できます。これは爆裂魔法の素晴らしさを子供たちに伝えるいい機会ですね」

「子供ならアクシズ教にも入信してくれるかもしれないわ！こんなチャンスは滅多にないし、何を話すべきか、カズマは分かっているわよね？」

分かってねえよ！とカズマが叫び、議論は振りだしに戻った。アクアやめぐみんは講師ではないため、何を話せばいいか迷うカズマに自分が話したいことを代弁してもらいたいようだが、おそろ

くカズマはそういった話はしないだろう。

「はあ、俺としてはこんな不安定で危ない職を目指してほしくないんだが、冒険者に憧れる気持ちも分かる……。なあ3号、何かいいアイデアはないか？」

それをそのまま伝えればいいと3号は提案した。子供たちの将来を真剣に考えたうえで、この冒険者は危険な仕事だと伝えればきつと伝わるはず。優しいカズマが話せば、子供たちの心にもきつ

と響くはずだ。

「カズマが優しいですって……？3号大丈夫？カズマに何かされたんじゃないの？」

「意外だな。私たちには厳しい印象があるが、男同士だから仲がいいのか？」

結局、料理を注文し雑談をするいつものような光景のまま、正午を迎えた3号。ギルドに入ってくる子供を見て焦りながら、急いで準備を始めるのであった。

普段は余り縁のないギルドに興味津々の子供たちをギルドの職員がなだめている。様々な冒険者が座っていた酒場の椅子は、今だけは子供たちのものだ。カズマと3号は受付の前に立って講義を

行うが、主にカズマをからかうためか、後ろの方には冒険者がちらほらと立ち見をしている。

3号とカズマは普段入らない受付の中にて待機しているが、受付嬢に案内され、2人で一緒に受付へと歩いて行った。憧れているかは分からないが、今話題の冒険者を目の前にして、子供たちの目

線は2人に釘付けになった。

「鬼畜のカズマだー」「パンツ泥棒のカズマだー」「ほんとにいるんだー！」

「子供に何てこと教えてんだよおお！いいか、俺は冒険者カズマだ！鬼畜でもないし、パンツ泥棒でもないから！」

カズマは子供から散々な事を言われているが、盗みを働いたことは間違っていないような気がする。

対して3号は、3号という名前が広まっていないのか、イカだのイカちゃんだのと種族の名前ですら呼んでもらえなかった。インクリングという名は、まだまだあまり知られていないようだ。

「イカちゃん、あれやってあれ！上からドーンって振ってくるやつー！」
『スーパーチャクチはまた今度だ…… さて、今日冒険者のことを教えてくれるのは、3号とカズマ君だ。みんな、挨拶をしようね……』

ギルド全体にクマサンの声が響く。木彫りの熊のマイクではなくギルド内の放送に声が切り替わっているようだ。子供たちと共に、後ろの冒険者もお辞儀をしたり挨拶をしているが、顔は完全に笑っていることが確認できる。

「ダストもキースも何でここにいるんだ……？まあいいや、早速俺から話をさせてもらおうぞ」

3号はギルドの職員から、一旦受付の中に入るように指示され、案内されるまま受付に戻った。

講義の間だけ受付の中にいるクマサンの前に立たされると、3号だ

けに聞こえるような小さな声で、3号に向けて話を始める。

『さて、今このギルドにはこの街にいるおおよそその子供たちと、冒険者が集まっている……今から話すことは緊急の依頼だ。アクセルに潜むオオモノシヤケを全て、カズマ君が話をしている間に討伐してほしい』

本当に緊急の依頼である。時間にしておよそ30分ほど、カズマの話のネタが尽きないうちに討伐しなければならぬそうだ。この状況、子供をギルドに集め、護衛である冒険者をつけていると見

ると、クマサンはこの状況を予想していて、かつ相当危険なシヤケが入り込んでいるはず。

『現在のアクセルには4匹のモグラが潜んでいる……地面に潜伏してインクリングを丸呑みにする攻撃は、キミも知っているだろう。街の人間が被害に遭う前に、速やかに討伐してくれたまえ』

やはり街にモグラが侵入することを予想していたのか、冷静な口調で話すクマサン。子供をギルドに集めて守ることが目的で、講義は子供を呼ぶための理由だったのだろう。3号はギルドを音を

立てないよう抜け出し、クマサンから支給されたパブロを手に、急いでモグラの搜索を開始した。

街の住民には無闇に家や建物の外に出ないように伝えられているようで、賑わっているはずの街には人の姿が見えない。オオモノシヤケの一種であるモグラは、ウキのような器官を用いて、地面

の中から正確に標的の位置を探り、インクで足元を捉えてから丸飲みにする恐ろしい種族。他のシヤケと違い段差や壁を直接登つてくするため、どこにいても油断はできない。

勿論、インクリングなら飲み込まれた時点で問答無用で即死。人間ではどうなるか分からないが、結果は同じと見ていいだろう。飲み込まれても平気なら、3号が急いでオオモノシヤケを探す

必要はないはずだ。

クマサンに許可を得て、現在3号は街中をインクで塗り、モグラの注意を引き付けている。既に1匹が3号に気が付いたようで、緑色の

インクで道を作りながらこちらに向かってくる。モグラの攻

略法は、地上に飛び上がる瞬間にボムを口の中に入れば、口の中でボムが爆発し討伐できる。ボムを使ってばかりだというクマサンの言葉が気にかかるが、有効なのだから仕方ない。3号は慣れた手つきで地上に飛び出した口にボムを投げ入れ、見事1匹撃破した。

その後も2匹、3匹と同じ手段で討伐していったが、最後の1匹がどこに潜んでいるのか中々見つからない。パブロの起動力を活かしてできるだけ広い範囲を駆け回っているが、スペシャルゲージが溜まるほど捜索しても、モグラが見つかる気配はない。

『3号、今すぐギルドに飛んでほしい。カズマ君や敵感知スキルを冒険者の報告によれば、ギルドに何か接近しているようだ……』

3号はその通信を聞くや否や、ギルドに向けてジャンプし、地上に露出している器官が無いか観察する。律儀にギルドの門から侵入しようとするモグラを発見した3号だったが、ここで事態が

思った以上に深刻であることに気が付いた。地上に降りてからボムを投げる場合、一度でも何かを囿に浮上させなければならぬ。先ほどの3体は自らを囿にしてボムを食べさせたが、モグラの狙

いはギルドに向かっていることから3号ではないと推測できる。

そうなってしまうえば、対処に慣れていない冒険者か、街の子供が犠牲になる可能性が出てしまう。3号は地上に降りる前、空中に居る今この状態でモグラを浮上させる方法を考える。

一か八かの賭けになつてしまいが、3号は地上にいるモグラに向けて覚えたての雷撃魔法を撃ち込み、スーパーチャクチを使用して降下する。3号の放った雷撃はインクを伝って地面に潜むモ

グラに感電し、痛みのショックで地上に横たわる。地上に近づくとつれ、子供や冒険者のざわめく声が聞こえてくるが、お構い無しに2発目の攻撃であるスーパーチャクチを直撃させた。

地下にいるモグラにスーパーチャクチなど普段は滅多に使用しないし、使っているイカも見ることがないが、地上に出てしまえばこちらのもの。ギルドの入口付近にドーム状のインクの爆発が起

き、悲鳴とともに歓声が上がる。地面に散らばった金イクラを見て、3号はひとまず安心した。

『ようやくもう一人の講師が帰ってきたね……悪いが3号、カズマ君の話のネタは枯渇寸前だ。子供たちから飽きられる前に、今すぐ講義を始めてくれたまえ……』

「お、おかえり3号、街中なのに急に敵の反応があつて焦つただけど、もう大丈夫なのか？」

クマサンも人使いが荒い。3号はパブロを担ぎ、受付の前まで移動した。劇的な登場に目を輝かせる子供たちに向けて、クマサンの声がギルドに響く。3号は代わりに自分の紹介をしてくれるの

かと期待していたが、語り始めたのは全く違う内容だった。

『今の冒険者の行動を見ていたかい？カズマ君が敵を探知し、ダクネス君は真つ先にギルドの門に立ち皆を守り、アクア君、めぐみん君が呪文の詠唱し迎撃の準備をする……他の冒険者も同じよ

うに、自分の役割を果たしていた。ワタシは、これこそが冒険者としてあるべき姿だと思うよ』

割り込んで話すにしては恐ろしく長い内容、3号がこれから話そうとしていたことは特に関わりの無い話だが、とてもプレッシャーを感じてしまう。子供の前なので少しでもいい恰好をしよう

と強気に考え、自信に溢れた表情で冒険者やシャケについて話す。3号が早く寝ることが大切だと話せば、ふーんと声を発しながらも頷いてくれた。

3号が話を続けるうちに、実際にブキを使つて欲しいと声が上がってきた。チャージャーの人氣がやけに高かったため、クマサンの計らいでギルドの外にて実際にブキを使う様子を見せることになった。クマサンがギルドの外にチャージャーを置いたそうなので、子供を連れて外に移動する。

「おつと見た目で分かるぞ。これインクを発射する兵器の部類だろ？明らかにいかついもんな」

「ついにギルドの外に出てしまったな。一体何を見せてくれるんだ？」

ギルドの外にはチャージャーの中で最も射程が長い、4Kスコープが置かれている。ダクネスの話の通り、もはや何のために集まっているのか分からないが、3号はパプロの代わりに4Kスコープを

担ぐと、駆け寄ってきたギルドの職員から紙を渡された。何とかして射的用的を取り出すので、上手く撃ち抜いてほしい、と書かれている。

お安い御用だとインクをチャージすると、周りの視線は3号に集中する。射程ギリギリに置かれた的に向けてインクを放った時、爆発したかのようなズドン、という重い轟音が辺りに響いた。

観衆は的に向けて放たれたインクを辿り、的の様子を確認すると、場の空気が凍り付いてしまう。的の下の部分がわずかに残っているだけで、後は全てどこかに吹き飛んでしまったようだ。

あれからの講義は滅茶苦茶だった。許可を得てしまったせいか、めぐみんが爆裂魔法を撃ち、アクアは宴会芸スキルを披露すると、子供たちの要求はどんどんエスカレートしていき、3号も様々なブキを披露することになった。

現在は講義を終え、5人の食事会が開かれていた。めぐみんやアクアの借金を一切気にしていないかのような食べっぷりは、見ていても気持ちがいい。

「3号は狙撃スキルを持っていたのですか？的に届くまでの速度は弓よりも早いですし、威力も馬鹿みたいに高かったように見えますが」「俺の予想どおりだったな。3号の世界ではあんな兵器を使ってインクの塗り合いに命を懸けてるのか？……嘘だろ。あれでスポーツみたいなものなのかよ……」

住民を心配させないためか、街にモグラが入りこんだことは口外してはならないそうだ。3号は正直に伝えたほうがいいと意見したが、いつどこから侵入するか分からないモグラに関しては、存

在自体を知られない方がいいらしい。今回街に侵入したことが分かったのは、直前に発見報告があったからだそうで、もし報告が無かったらと考えると、思わず身震いしてしまう。

食事を続ける3号のテーブルに、1人の人間が歩いてきた。軽装に、見覚えのある銀色の髪。盗賊のクリスがやってきた。

「やあみんな、こんばんはー。ちよつと3号に用事があつてね。それじゃ、借りてくよ」

中々強引な手段だが、クリスと一緒にいけると、連れていかれたのはクマサンの居る受付。モグラと戦闘した後だが、さらに面倒な事が起こる予感がした3号だった。

危険なモグラ叩き

食事中にクリスに連れ出された3号は、クマサンの目の前にてクエストの案内を受けていた。隣にはクリスがいるものの、特に聞かれても問題は無い内容なのか、クマサンは新たなオオモノシヤケの報告を3号に伝えた。

『今日2度目のお仕事だね…… 内容はアクセルから少し離れた牧場に出現したモグラの討伐。今回は1人ではなくクリス君と一緒に出發してほしい……』

「悪いけど、向こうは結構危ない状況みたいだからすぐに出発するよ。幸い人が飲まれてはいないみたいだけど、牛や羊が食べられているみたいだね」

街に来たモグラは群れの一部だったらしく、牧場にはまだ数匹モグラが残っているらしい。出現する場所が決まっているのなら、パブロを持っていく必要はないと判断した3号は、新たなブキを届けてもらうよう頼み、走るクリスを追いながらギルドを出て行った。

全力疾走するクリスの隣で、インクの中を泳ぐ3号。牧場が目視できる距離になった時、クリスが一匹の羊がモグラに飲み込まれる瞬間を目撃した。数秒もかからずに羊を飲み込み、インクの中

へ帰るモグラの姿をはつきりと捉えたクリスは、思わず3号に質問する。

「かなり大きい個体だね……。3号、これ以上被害が出ないように、あいつをこっちに誘導する手段はないかな？」

それはとても難しい、と3号が答える。モグラは一度地上に飛び出した時、最も近くにいた獲物を狙う習性がある。現在の距離なら、次に狙われるのは近くにいた動物だ。

「だよね。……ねえ3号、ちよつと見てほしいんだけど、あの牛、ゆっくり地面に沈んでるよね。あれもモグラの特徴なの？」

またクリスに質問された3号だが、直接牧場の様子を確認するため

地上に出ると、3号の足ではあつという間にクリスとの距離が空いてしまう。少し速度を落としてもらうよう頼んだ後、モグラ

の様子を確認する。ゆっくりと沈む牛を、2匹のモグラが取り合っている姿を見た時、かつてのカタパツドのようにこの世界で進化したシヤケだと確信した。地面を溶かす呪文は知らないが、大量

の水で一時的に沼地のような状況を作ったり、土そのものを操っている可能性がある。

「相当ヤバいって顔してるね。分かった、牧場に急ごう。結構早く走るから、頑張つてついてきてよ?」

クリスは更に速度を上げ、インクを泳いでも追いつけないほどの速度で走っている。同じく3号は気持ちだけでも速度を上げ、徐々に距離を離されながらもクリスの後を追った。

牧草の生える地面は荒れ、所々に茶色く濁った水たまりのようなのが出ていて、動物の数は既に数匹ほどしか残っていない。日が落ちてしまったため詳しい状態は確認できないが、3号が牧

場に到着した時にはモグラの被害が十分に理解できた。

クリスに牧場に居る人間全員を任せ、3号は本格的にモグラの討伐を開始する。まずは安全に避難できるようにモグラの注意を引き付ける必要があるが、移動のため床にインクを発射しても中々

地面に馴染まない。何度も床を射撃しても、一部の地面にしかインクを塗ることができず、ナワバリの確保が上手くいかない。僅かに塗れた地面へインクを補充するため走っていると、最近では聞

きなれない音がする。

硬い街道のようなこつこつとした足音ではなく、雨の日の公園のようなひたひたとした足音。この世界のモグラの影響なのか、湿地のように水を多く含んだ地面が、床にインクを付着させること

を阻害しているようだ。

3号のようなイカにとって水は天敵である。インクで出来た身体は水に溶け、泳ぐことはままならない。インクの雨なら大歓迎で、しよつちゆうナワバリバトルでは降っているが、本当に雨が降ってしまつと、降水量によるが大抵外出は控えなくてはいけない。

この世界ではしばらく雨が降っていないなかったものの、こうして雨上がりの地面を再現されてしまったては地面が危険地帯へと変貌してしまふ。3号は水たまりを避け、比較的乾いた地面を探した。

インクを塗れる地面にて周囲を観察していると、足元から呼吸するような音がする。すると、足元が泥のように変化していき、3号の身体がゆっくりと地下へと沈んでいく。間違いなくモグラの

攻撃を受けていると感じた3号は、咄嗟にマニュアルのスライドを使用し、少しでも距離を取る。

3号が立っていた場所から地上に現れたモグラは、自身の大きな身体を見せつけるように高く飛び上がった。持ってきたブキがデュアルスイーパーでなければ、この攻撃で3号は丸呑みにされて

いただろう。しかし、高く飛び上がった勢いで着地したモグラは、沢山の泥や土とともに、イカにとつて致命傷となりえる水しぶきを3号に浴びせてきた。

3号はなんとか飛び掛かる飛沫を魔法の力で凍らせたが、今度は細かく尖った氷が3号を襲う。イカの姿になり氷を避ければ、今度は別の方向からモグラがこちらに迫ってくる。注意を引き付ける

ことには成功したが、このままでは3号が持たないだろう。

「3号ー！あたしはここに居た人たちをアクセルまで護衛するから、そいつらは任せたよー！」

背後からクリスの声が聞こえる。同じく3号も大声で任せると叫ぶが、このモグラを1人で相手にすることになってしまった。牧場の人々の心配をする必要が無くなったため、3号が戦うに適さな

いこの場所から離れようと、牧場の外へと走っていく。インクの補充が出来なければ、スライドで攻撃を躲すことも不可能なため、一刻も早く塗れる場所を探さなければいけない。

アクセルから真逆の方向にモグラを誘導するが、道を作るインクとスライドに使うインクが多く、スプラッシュボムを使用することが出来ない。雷撃魔法で攻撃してもいいが、これだけ距離が

近いと感電する恐れがある。壁すらも登るモグラから距離を取るのは難しいため、雷撃魔法は一度保留し、モグラを誘導することに専

念する3号。

気が付けばモグラの数も増え、4匹のモグラが3号を追い、捕食するために地面を沈め、泥だらけになった跡が道のように続いている。街や建物の光も無くなり、真っ暗でどこかも分からない場所を逃げているが、立ち止まれば確実にいずれかのモグラに飲まれるので止まることもできない。

『3号、今キミはどこにいるんだ……？クリス君は既にギルドへ人を連れて帰ってきている……モグラの討伐はできたのかい？』

無事に避難が完了したことに安心する3号だが、通話している時間はないため、まだ倒していないとだけ伝える。3号はあてもなく逃げ続けているうちに、空気がひんやりと冷たくなってきたよ

うに感じていた。ぼんやりとしか見えないが、床がうつすら白くなっているように見える。辺りにはふわふわとした生き物が浮いていて、まるで別の世界に入ってしまったかのようだ。

縁起でもない疑問だが、3号はふとこのモグラに飲み込まれるとどうなるのかを考えてしまう。サーモンランなら浮き輪状態になり、仲間のインクを受けければ復活できるが、この場所には同じイ

カの仲間はいない。クマサンに質問すれば答えてくれるだろうか。『本当に危ない状態のようだね……一応ナワバリバトルのように復活は出来るようにしているけれど、大量のエネルギーを使うから極力倒されないでほしい……』

多少は無茶をしてもいいと判断したものの、今は無茶すらできるような状況ではない。逃げるにつれ身体が凍りそうなほど冷たくなっていくので、動かなければ本当に危ない。射撃したインクも

すぐに凍ってしまうような世界に迷い込んでしまった3号は、この方向に逃げたことを後悔しつつ、モグラの襲撃を躲し続けるのだった。

日差しのおかげで少し暖かくなったが、翌日の昼になってもモグラとの戦闘は続いていた。明け方になって適当に投げたボムが1匹のモグラに命中したが、3号は未だ追いかけている。

3号の身体は限界に近いが、ふらふらとしながらも必死に攻撃を躲し続けていた。モグラの方もかなり体力を消耗したような様子で、心なしか動きが鈍くなっているように見えた。周囲を漂って

いる雪玉のような生き物が食料になるのか、モグラが3号を追いつつ飲み込んでいる。

『3号、厳しくなったらいつでもギルドに戻ってくるんだ…… これからサーモンランで使用している特殊な機械を使用するから、どこにいてもギルドに飛べるはずだよ……』

既に厳しい状況だが、一瞬でも隙を見せれば飲み込ませてしまうため、スーパージャンプをすることはできない。雪に無理矢理インクを染み込ませ、凍えそうな寒さに耐えながら進む3号だった

が、雪原の中に大きな影を発見する。その影は圧倒的な速度でこちらに近づき、背後にいた1匹の地中にいるモグラを切り伏せた。

大きな鎧を着た人間のようなのだが、全身が白く、その力は人間には到底出せないものだろう。それは技術なのか力なのか、はたまたその手にしている武器によるものなのか、潜伏していたモグラを

討伐してしまうほどの實力をもつ何かは、唸り声をあげながらさらに雪原を切る。金イクラが飛び散り、またもやモグラを討伐してしまった。これには勝てないと判断したのか、唯一残ったモグラ

はその場から逃走するも、この白い人物はモグラを追いかけてようとしない。

ようやく日付をまたいで討伐を達成できると思った3号。今度は追う立場になり、逃げるモグラを追いかけるが、白い人物から十分に距離を取っても、何が目的なのかモグラは逃走を止めない。

危険が過ぎ去ったのなら3号が標的になってもおかしくはないが、依然としてモグラは逃走を続けている。しばらく追いかけていると、雪原の奥の方に複数の人影が見える。3号と違いきちんと

防寒具を身に着けているが、そのさらに奥にいるのはあの白い人物。先ほど離れた場所にいたはずだが、今度はあの人間に用があるらしい。

「ほら、さっさと武器を捨てて土下座をするのよ！ほら、早く早く！」

アクアの声が聞こえた時、この奥にいる人間はカズマ達だと確信する。となると、あの倒れているのはめぐみん、白い人物の前に立っているのはダクネス、その隣にいるのはカズマだろう。アク

アは白い人物に向けて土下座をして謝罪しているようだが、また何か問題を起こしたのだろうか。

向こうも何やら危険な状況のようだが、3号が追っているモグラが標的にしているのは、おそらくカズマ達だ。半日逃げ回った3号を飲み込むのを諦めたのか、モグラは一番近くのアクアの元へ

移動している。このまま潜行した状態では、飛び上がる瞬間にボムを投げ込むことも出来ないうえ、地面を沼のように変化させるせいでアクアが攻撃を回避することは困難だ。

ここは1つ、頼みの綱である雷撃魔法に賭けるしかないと考えた3号は、持っている魔力全てを込め、渾身の雷撃魔法を炸裂させる。晴天の霹靂を再現したかのような一撃は、あっけなくモグラの

命を奪い、地上へ金イクラをばら撒いた。かくして、3号は無事にモグラを討伐するに至ったのである。

「……大体分かりましたよ。あの後一晩中逃げ回って、冬将軍にモグラを2匹倒してもらい、最後はカズマさんのパーティを守るために、自らを犠牲に雷撃魔法を放ったのですね」

「えっ、3号も死んじゃったのかよ。最後に聞こえた雷の音って、3号が撃った魔法だったんだな」

両手にデュアルスイーパーを持ち、ポケットにはクマサン印のスマホが入っていて、服もズボンも靴も無事。問題なのは、3号が放った雷撃に感電して倒されてしまったこと。足元に設置され

たりスポーン地点を見れば、嫌でも自分が倒されたことが分かる。元の世界のように言えば、ライトニングでやられた!、といった具合だろう。

「いやいや、ここは死後の世界だぞ?急に隣の台から3号が出てきて驚いたけど、俺と一緒に殺されたんじゃないのか?」

「3号さん。あなたにはもう少しお話がありますので、カズマさんが

転生するまで、もう少し待っていてください」

1日寝ていない3号は、カズマに向けた話が終わるまで少し仮眠しようとして横になる。いまいち何が起こったのか理解できないが、カズマやこの女性が言うには、自身は死んでしまったらしい。

しばらくうつつらうつつらとしてしていると、カズマの姿は既になく、この場所には3号と銀髪の女性が残っていた。頬を叩き眠気を振り払うと、リスポーン地点に座り込んだ。

お互いに自己紹介をしたが、この女神であるエリスは3号のことを見ていたらしく、牧場でモグラと戦っていたことも知っているそうだ。正直な所、3号は今すぐにもギルドに帰ってクマサン

に報告したいのだが、もう少し女神のお話は続くようだ。

「私がおあなたにお聞きしたいのは……シャケとあなた、そしてあの木彫りの熊についてです」

先ほどカズマに話していた声とは違う、問い詰めるような少し低い声で3号に質問する。思わず緊張してしまう3号だが、伝えるべきことはこの世界で何度だって話した。隔離海域に住むシャケ

がなぜかこの世界に流れ込んできたので、3号はシャケを討伐するためにこの世界にやってきた。クマサンについては3号でも知らないことの方が多く、詳しいことは誰も分からない。

「今まで別の世界からこの世界に人間が来ることは珍しくありませんでした……。しかし、あのシャケは魔物のようなもの。人を襲い、生態系を壊し、魔物からも略奪を繰り返す生き物です」

あのモグラだってそうだ。3号の予想では、この世界に対応できなかったモグラや他のシャケは危険を承知で人里に現れ討伐される。だが、少しでもこの世界に適応してしまったシャケは、その

魔法や力で好き勝手に生きている。王都と呼ばれる場所にさえ近づかなければ、3号の世界ではできなかった、本能のままに生きるこ

とができるのだろうか。「この世界に対応し力を振るう……。それは、あなたも同じではありませんか？」

この発言で、3号はエリスが何を言いたいかを察した。3号とクマ

サンは疑われているのだ。あのシャケと一緒にされるのはいい気分がしないが、3号は先にこの場にいないクマサンの疑いを晴らすことにした。

「正体は不明、とても高度な技術を持っているものの、そもそも社員がいるかも分からないし、誰も会ったことがないと……。あの、これだけではとても怪しい人物なのですが」

3号が話せば話すほどにクマサンが怪しい人物に聞こえてしまうが、あの人は海とシャケと金イクラにしか興味が無いので、商会の技術でこの世界を侵略することは無いだろう。これ以上は本人に聞かないと何も分からない。おそらく企業秘密で押し通されてしまうが。

3号も本当にこの世界にはシャケを討伐しに来ただけだ。対等に戦うために魔物やシャケと戦い経験を積んでいるが、決して生態系を壊すことや、人を襲うことが目的ではない。証拠も何も無いが、信用してもらえない。3号はそれを相手の目を見て伝える。

「その言葉が聞けて良かったです。あなたがここに来た理由も、カズマさんとその仲間を守るためですからね。では、3号さんは初めての転生ですので、何か好きな物を持っていきますが……」

疑いは何とか晴れたようだ。この世界に来た頃は転生という言葉の意味を知らなかった3号だが、少し前にカズマに教えてもらった。死んでもいないので何かを貰っては悪いので、スー

パージャンプでギルドへ帰る準備を始める。最初にここに来た時も、同じように飛べたはずだ。

「ま、まあここに置かれた何かから召喚されたみたいですけど、強い武器や才能といった何かを持って行ってもらうのが決まりなんですよ……。この前はすぐにどこかへ行ってしまうましたし」

キョウヤもこの時に魔剣グラムを受け取ったのだろう。少し考えた3号は、もしできるなら元の世界に置いてきた忘れ物を持ってきて欲しいと頼んだ。エリスはそれを承諾すると、目の前に愛用

していたブキと、専用のスーツが現れた。見た目も性能もそのま

ま、3号が使っていたものだ。

この場所で着替えるわけにはいかないので、3号はエリスに礼を言い、一旦着替えるためにギルドではなくこの世界の自宅へと飛んだ。電波もはつきり受信できたので、それほど時間はかからずに帰還できるはず。

「では3号さん、この魔法陣の中に……って、もう行ってしまったのですね。一体どうやって天界と現世を行き来しているのでしょうか……」

3号は自宅に無事着地すると、部屋に入り服を着替え、ブキを持ち変える。まだ眠たいが、このヒーローシューターとヒーロースーツを見れば、ギルドに行つて帰る体力が溢れてくる。タコツボ

バレーや深海メトロの戦いまで、常に苦楽を共にしたブキとギア。特にヒーローシューターの性能があれば、大抵のシヤケに負けることは無いだろう。

『3号、リスポーンを使ったね？ 一体何があつたのか、報告してくれると助かるよ……』

ギルドの前まで来てその通信を聞いたが、通話をするより直接話した方が早いと判断した3号は、ギルドに入り受付を目指す。モグラとは相打ちに終わってしまったが、報酬金は幾ら貰えるの

だろうと、期待を膨らませる。

何故かギルドに居る冒険者からの視線が集まるが、今はクマサンに報告することが先だ。モグラと1日中戦つて、相打ちになり、忘れ物と一緒に帰ってきたと伝えればいいだろう。

『あのモグラを討伐してくれたのは助かるが、次からは無茶な真似はしないでくれ…… キミを失えば、アクセルをオオモノシヤケから守る冒険者がいなくなるからね』

3号は反省していると伝えると、すぐにギルドを出て自宅へと向かう。これ以上の話ではできないと判断し、一度眠ることを選んだ3号は、その後ベッドに倒れこむようにして眠る。

その日からギルドにイカの幽霊が出るとの噂が広まるが、3号がそれが自分のことだと気が付くのは、もう少し後になってからだつた。

金イクラのハコビヤ

アクセルにも冬の影響が次々と出始め、ギルドには難易度の高い危険なクエストが残り、厳しい環境も相まって討伐クエストを受ける冒険者はほぼいなかった。ベルディアの懸賞金を手に入れた

アクセルの冒険者達は、その潤沢な資金で冬を越す準備を万全にし、次の春に備えている。

しかし、とある4人の冒険者は逆に借金を抱え、今日も借金の返済のため、パーティの実力と相談しながらクエストを探していた。とはいえ、そう簡単にクエストが見つかるはずもなく、掲示板

に張られた依頼以外にも仕事が無いか、受付に置かれた木彫りの熊にさえ相談していた。

「なあクマサン、シャケの他にも楽なクエストってないか？クマサンなら掲示板に載らないようなクエストも知ってるような気がするんだよな」

『ワタシを何だと思っているんだ…… 残念だけど、ここはサーモランの受付だ。ワタシの扱う依頼は全てシャケが関わっているよ……』

「私はどんな強敵でもいいから、とにかくクエストに出発するべきだと思うのだが……」

冒険者カズマの相談にクマサンが少しの間無言になると、カズマに1つの搜索の依頼を提案した。確実にシャケが関わっている内容だが、もしシャケが現場に現れても討伐する必要は無く、目的の人物を探し出し、ギルドに連れ戻すだけのクエスト。

『最後に確認できた場所はこの湖だ…… 3号はオオモノを含めたシャケの群れを討伐しに行つて依頼、連絡が途絶えている。彼を無事に連れ戻せたら、相応のほうしゅうを渡そう』

「ねえクマサン、3号はもう……」

人聞きの悪いことを言わないで欲しい、とクマサンが強く訴える。カズマがエリスと一緒にいる所を見たため、3号はもうこの世にいないものだと思われるが、3号は現在もクエ

ストに出かけている。また連絡が途絶えたことを心配するクマサンだが、リスポーンした形跡がないため生きていると判断したのだから。

『……おや？3号からの連絡だ……カズマ君、依頼内容の変更だ。大量の金イクラをギルドに輸送してほしい。運ぶ機材はこちらで用意しよう、すぐに準備してくれたまえ』

「何だって!?!……分かった。俺達は準備するから、クマサンも用意ができたなら連絡してくれ」

イクラコンテナを簡易的に馬車に取り付け、突貫作業だが移動できるイクラコンテナが用意された。カズマは仲間と馬車を連れ、3号が最後に連絡を残した湖へと向かった。

澄んだ湖にてシャケを討伐する1匹のイカ。かつての調査を支えたヒーローシューターを手に、3号はまたもやシャケと不眠不休で戦い続けていた。他のブキとは比べ物にならない高性能なシューターは、シャケとの戦いを劇的に楽にした。自分に襲い掛かるシャケを次々と討伐しているうちに金イクラが床一面に散らばった結果、金イクラを狙うタマヒロイとの戦いに変化していった。

隙を見てクマサンに連絡を取り、大量の金イクラを何とか回収してもらったことになったが、高性能なブキでも物量には勝てず、地面の金イクラは数を少しずつ数を減らしている。

数日前、クマサンからオオモノシャケの報告を受けた3号は、かつてアクアが浄化した湖に向かい、シャケの搜索を開始した。徐々に搜索範囲を広げていったが、昨晚にオオモノを含むシャケの

群れと遭遇。時間をかけ全滅させたものの、金イクラを守るべくタマヒロイを退け続けていた。

元々はそれほど時間をかけるつもりは無かった3号だが、シャケにも引くに引けない事情があるのか、撤退する様子を見せず延々と3号に攻撃を続け、じわじわと体力と気力を奪っていた。

しかしながらヒーローシューターを手に入れた3号にとって、普通のシャケを討伐することは造作もない。途中で火を吹くシャケやブ

キを奪おうとするシャケもいたが、3号のブキと魔法には敵

わず、床に落ちる金イクラが増えただけだった。

これだけ大量の金イクラがあれば、大量の報酬金が貰えてもおかしくはない。現在お金に困っている冒険者はそれほどいないし、現に3号も生活には困っていない。一応クマサンが必要とするの

ではないかと守っているものの、回収する手段がなければこの努力も水の泡だ。

「きつ、金イクラよ！カズマ、馬車は任せるから私ちよつと回収してくるわね！」

「おい待てアクア！まだシャケが残ってるかもしれないから気をつけろよ！」

クマサンへの通信が無事に届いたようで、湖に金イクラ回収部隊がやってきたようだ。クマサンにはイクラコンテナを持ってくるべきと伝えたが、きつとカズマ達は何かしらの手段で輸送してい

るはず。金イクラを持ち帰る算段が揃ったため、タマヒロイの討伐にも気合が入る。

金イクラ討伐部隊の到着を待つ3号を、謎の暖かい光が包んだ。タマヒロイの相手をしているため反応はできないが、アクアが強化する魔法でも使ってくれたのかと周囲を少し見渡すと、青ざめ

た顔のアクアが立っていた。特に力が強くなったり足が速くなったり、傷が無くなったりしていないため、一体どんな呪文を唱えたのか気になるが、今はシャケの討伐を優先する3号。

「ちよつとカズマ！ターンアンデッドが効かないんだけどどうすればいいの!?!私でも浄化できないなんてどうなってんのよ！」

「俺に分かるわけないだろ!……あれ、やっぱり3号だよな。何でこっちにいるんだ……?」

3号は浄化の魔法をかけられていたようだが、3号は気にせずとにかく金イクラを集めて欲しいと伝える。めぐみんな怪訝な表情を見せ、ダクネスには剣を向けられているものの、これだけの金イ

クラは全員でも集められるか怪しい。

「3号の幽霊……。撃つべきでしょうか、撃たないべきでしょうか

……」

「いいからめぐみんもイクラコンテナに運んでくれ！ダクネスもシャケに囲まれる3号を羨ましそうに見るなっ！」

カズマの的確な指示を受け、新たに4人が金イクラの回収に加わった。3号の他にもアクアがタマヒロイの討伐に参戦し、3号をも上回るほどの速さで撃退している。これだけ倒しているのだから

少しはタマヒロイの数が減ってもおかしくないと考える3号だったが、どこから出てきているのか一向に数が減らず、倒しても倒しても金イクラに突撃し続けていた。

アクアの働きで手が空いた3号は、クマサンにもう少し増援を頼めないか連絡すると、冒険者にシャケについての講習を開いているため難しいとのこと。残念だが、オオモノシャケが現れる可能

性のある危険度の高い場所にすぐに出発できるのは、カズマのパーツイぐらいだったらしい。

カズマ達の働きも相まって、金イクラをほぼ回収することに成功した3号は、馬車のイクラコンテナに合流し、5人でアクセルへ向けて足を進める。何事も無かったかのように加入した3号に対し

て物言いたげな表情を浮かべるカズマに、3号が何か自分に用事があるのか尋ねた。

「用事というか、どうして3号がここにいるのかと思つてさ。誰かに蘇生してもらったのか？」

「それはないんじゃないか？私もあの時雷が落ちた場所を確認したが、3号の身体どころか、持ち物一つ見つからなかった。カズマのようには身体が残っていればよかつたんだが……」

直接スーパージャンプで帰ってきましたと言つても納得してもらえないと判断した3号は、女神エリスに頼んで帰してもらつたことにして、カズマ達に伝えた。そもそもなぜあの場所から地上に

飛ぶことができるのか、3号には理由が分からないため説明できないのだ。

「つてことは3号は生きてるつてことだな。まあ、俺は3号が死んだなんて欠片も思つてなかつたけどな。良かったなめぐみん、3号は幽

「霊じゃないぞー」

「べ、別に怖がって爆裂魔法を撃とうとしてみせんよ!?!カズマだって、最初に3号を見た時結構怖がってたじゃないですか」

俺はお化けだろうと何だろうと怖くないからな、と話すカズマ。この4人は相変わらず仲が良いようで、カズマがめぐみんと言いつてはダクネスがなだめ、アクアと言いつては今度はダクネスが巻き込まれていた。賑やかな帰り道を歩く3号に、クマサンからの通信が入る。

『やあ3号、帰ってきてくれてなによりだよ。さて、キミたちはとても多くの金イクラを集めたようだね……ワタシとしては是非持ち帰って欲しいが、シヤケもどうやらそれを許してくれないらしい。』

その通信が聞こえた時、3号の周りが少しだけ暗くなり、大きな影が覆う。カズマ達はまだ会話に夢中だが、5人の視線が上空に浮かんだ巨大な輸送船に向くことにそれほど時間はかからなかった。

た。この遠く離れた世界でシヤケの最終兵器であるハコビヤが出現したということは、シヤケの情勢は良くないことが分かる。この世界に残っているシヤケも、残り少ないのだろう。

「あー、あれはなんだ？コンテナが空に浮いてるけど、俺あんなの初めて見るんだけど」

「私もさっぱり知らないし、なんでこんなことになったか分からないわ……。ってことは、3号の世界の生き物よね？ほら、早く何とかして頂戴！」

3号はハコビヤの襲来を何度か経験していた。あの空に浮いた輸送船はシヤケの流通を担うとても重要なもので、そのコンテナをイクラコンテナに直接取り付け、イカが回収した金イクラを取り返そうと吸引する。撃退するためにコンテナに向けて直接射撃するのが本来の攻略法だが、隣でうずうずしている爆裂魔法使いなら、イカにはできなかつたことができるかもしれない。

反射的に爆裂魔法を詠唱するめぐみんをカズマが止めようとするが、3号はハコビヤに爆裂魔法を撃つことを許可し、コンテナから降

りてくるシャケがいないか監視し続ける。

「分かっているじゃないですか3号！最近はこんな大きなものに撃つこともありませんでしたし、遠慮なくやらせてもらいますよ……！」

ハコビヤからシャケが現れる間もなく、めぐみんの爆裂魔法がコンテナに直撃し、上空からどこかも分からない部品が飛び散り、金イクラをまき散らしながら墜落していく。必死に射撃したりハ

イパープレッサーを撃ち込み撃退していた3号と比べれば、とても簡単であっけない結末だった。めぐみんも満足しながら倒れ、その場にいた全員がハコビヤの墜落を確認した。

「あの金イクラ、回収しないともつたいないわよね……。一旦戻って、あれを回収したほうがいいんじゃないかしら？」

「確かに俺達って少しでもお金が必要だったな……。皆、それでいいよな？」

3号もアクアの意見に賛成し、他のメンバーも特に異存はないようだ。進行方向をアクセルから湖に戻し、道中に落ちている金イクラを拾い集める。1つでも馬鹿にならない金額になるため、爆

裂魔法を放つためぐみん以外の全員で金イクラを搜索する。

散らばった金イクラも回収し終え、3号とカズマ達はもう一度アクセルに向かっていった。全て合わせれば数百個ほどの数になる金イクラを回収したため、パーティのメンバー、特にアクアの気分

が良いようで、今夜はギルドで宴会を開くなどとカズマに約束している。

「いいかアクア、俺達はまず馬小屋で凍え死にそんな生活環境をまずなんとかするんだよっ！朝になったらまつ毛が凍って……。なあ、なんだか暗くないか？まだ夜になってないはずだけど」

夕日を浴びながら街道に沿ってアクセルに帰っていると、再びイクラコンテナを運ぶ馬車が影に覆われてしまう。めぐみんの魔法で墜落したはずのハコビヤが、僅かなシャケコプターと共にイク

ラコンテナを襲撃していた。

輸送船の本体は砕け、積んでいた荷物らしきものは無くなっている

ため、爆裂魔法の被害が無かったわけでは無く、むしろ甚大な被害を与えたといつてもいいだろう。しかし、もうめぐみんの

爆裂魔法に頼ることはできないので、どうにか撃退の手段を考えなければならぬ。

ハコビヤとはかなり距離が空いているため、モグラに撃つたように感電はしないと考えた3号は、輸送船に向けて雷撃魔法を放つ。雷撃が輸送船を直撃し、少し遅れてから周囲に雷鳴が轟く。

爆裂魔法に匹敵するほど騒がしい呪文を2度3度と直撃させ、輸送船は再び煙を上げながら墜落した。3号はその様子を見つめ、自身が一撃で倒されたことを改めて納得する。

「3号はあの雷を直接受けたんだよな……。というか3号、前より魔法の威力が上がってないか？」

「今はあのハコビヤが墜落したことを喜ぶべきだろう。アクセルも見えてきたから、これ以上戦闘を長引かせれば、街に被害が出てもおかしく無かったはずだ」

ダクネスにアクセルが近いと言われ、ふと3号が後ろへ振り返ると、工事中の街の外壁が見えてきた。当の本人は気付いていないが、カズマの言った通り3号の魔法の威力は見違えるほど上昇し

ている。これまでは生き物に魔法を使う際に少しためらいがあったが、モグラとの戦闘でそれも無くなり、躊躇せずに全力の魔法を放つことができるようになっていた。

アクセルにあと数分でたどり着くほどの場所で、カズマから声を掛けられた。街道を歩きながらカズマの言葉に耳を傾けると、カズマが少し考えてから要件を伝える。

「魔法使いが3人になるけど、3号を加えて5人でパーティを組むのも悪くないと思うんだよな。3号、食費と生活に掛かる費用は一切払うことができないうし、住居も各それぞれに分かれて借金も

あるけど、元の世界に帰るまでパーティを組まないか？今なら上級職の仲間が付いてくるぞ」

過去にもこの会話をしたような気がするが、1人で戦うことが厳しくなってきた今、カズマとパーティを組めばシャケとの戦いも有利に

進められる。しかし、3号がこれまで一緒に行動しても

パーティに加わらなかつたのは、必要のない戦いに巻き込まれたくなかつたからで、カズマの魔王討伐という目標を遠退けるのではと思つていた。

これからも自分と共に行動すれば、今回のハコビヤ襲来のように危険なシャケと戦うことは確実に増えるだろう。3号はそれをカズマに伝え、本当に加わってもいいのかと尋ねた。

「俺は別に全く問題ないけど、多分みんなも不満に思うことは無いと思うぞ」

「私も構わないわよー。冬でもわんさか出てくるシャケの討伐が楽になりそうで嬉しいわね」

3号が重く考えすぎていたのか、とても簡単に返事が返ってくる。めぐみんも馬車の上で寝転がりながら許可を出し、ダクネスも強敵に挑めることに満足しているようだった。

「これで戦力が増えましたね。カズマ、これからはもつと強い魔物に挑みましょう」

「な、なあ3号、一度でいいから私にインクを撃つてくれないか？できれば全身がインクまみれになるぐらいで頼む……」

ダクネスの奇妙なお願いは後で聞くとして、3号はめでたくカズマのパーティに加わつた。シャケが居なくなるまでクエストに同行すると約束し、3号も積極的にサーモンランに誘うことを約束

した。一連の話が終わる頃にはアクセルの門をくぐり、馬車を連れながらギルドにてクマサンに報告しに向かう。事情を知らない街の住民は3号の存在に驚くが、気にせず3号はギルドへ歩いた。

『すばらしい活躍だね…… 達人とは、まさにキミたちのことを言うのだろう。さて、ほうしゅうは300万エリスだ。借金の返済や、生活に役立ててくれたまえ…… 本当に感謝しているよ』

「うおおおー！イクラを集めるだけで300万！いいか、この金は俺が管理するからな！勝手に使ったりさせないから、肝に銘じておくんだぞ！」

『では、3号も…… うん？カズマ君と合わせていいのかい？なら、さらに100万エリスだ』

一度のクエストで大金を稼ぐことに成功したカズマ達は追加の報酬を受け取り、アクアがカズマの言いつけをすぐさま破り大量の料理を注文しようとした時、クマサンの声がギルドの内部に響く。

夕飯を食べに来た多数の冒険者に向けて、クエストの案内を持ちかけた。

『緊急だ。冒険者の諸君、最近クエストに出発せず、身体が鈍っているんじゃないか？現在のアクセルにはハコビヤの残党が襲来している…… 討伐した者には相応のほうしゅうを与えよう』

ハコビヤの残党といえば、おそらくシャケコプターのことだろう。どこからともなくシャケを生み出す発泡スチロールで出来た箱を設置し、ザコシャケを次々と呼び出す厄介者だ。そんなシャケ

が現れては街が危ないと3号が立ち上がると、クマサンの放送の続きが流れる。

『おつと3号、キミが戦うのは禁止だ…… これは一種の訓練のようなもの。ザコシャケ程度、今ならこの街の冒険者だけでも守れるだろう。住民や子供たちには既に連絡しているから、安心して

戦ってほしい…… それでは、頼んだよ』

カズマ君もいかなかな？とクマサンに誘われ、爆裂魔法を撃つためぐみんを残し、ギルドから飛び出してしまった。同じく街の冒険者もお祭りのように騒ぎ、街に出現したシャケを討伐しに行っ

ている。一瞬で静かになったギルドに、3号とめぐみんだけが取り残された。

「……なんだか暇ですね。3号、なにか面白い話でもありませんか？」

気の利いた話ができるほど器用ではない3号は、代わりに爆裂魔法を教えて欲しいと頼んだ。めぐみんのように毎回倒れては戦えないが、強度を落とした魔法なら覚えておいて損は無いと考え

て、軽い気持ちでめぐみんに尋ねたが、本人は大変喜んでいるように見える。

「分かりました！ちよつとカードを見せてください……。3号の魔力

なら、炸裂魔法までならなんとかかなりそうです。冒険者なのに魔力が結構伸びてますけど、本当に生命力が低いですね……」

3号が持つ全てのスキルポイントと引き換えに、爆裂魔法の下級である炸裂魔法を覚えることができるらしい。決定打が欲しい3号にとって、覚えられるものは出来るだけ覚えておきたいと考え

ていた。さっそく炸裂魔法を習得し、爆裂魔法使いへの道を一步步んだところで、めぐみんは疲れが溜まっていたのか机に伏して眠ってしまった。

シヤケ相手に試し撃ちしたいものの、3号が討伐することは禁止されているためギルドから動くことができない。受付の周りをうろちよると歩き回っていると、クマサンが3号に話しかけてきた。

『冒険者は皆成長しているんだね…… ザコシヤケを怪我することなく討伐できている。あのハコビヤが現れたことを考えると、元の世界に帰る日も近いかもしれないよ……』

残り少ないであろうオオモノシヤケさえ全滅させれば、この街は3号がいなくても大丈夫。その言葉を聞いた3号は、ふと元の世界であるハイカラスクエアへと思いをはせるのだった。

幽霊屋敷へお引越し

ギルドから我先にと出て行った冒険者のほとんどが無傷で帰還し、ハコビヤの残党の討伐は無事に成功した。現在はアクア主催の宴会が開かれ、酒や料理、アクアの宴会芸を楽しむ者で溢れているが、ダクネスはその様子を受付から静かに見守っていた。

仲間を守る騎士としての役割をこなしているダクネスは、カズマのパーティの中でも特に警戒心が強く、身分が証明できないような人間には取り分け厳しい態度を取ることがある。カズマやアク

ア、そしてめぐみや3号も信頼しきっている人物を、彼女は未だに信用していなかった。

『ワタシに話があるそうだね…… 聞きたいことがあるなら、できる範囲で答えるよ……』

「私が聞きたいことは一つ、あなたの正体だ。3号と違って、あなたには秘密が多すぎる。ある時から一瞬でギルドの受付に置かれ、今ではサーモンランの他に様々なクエストを受け持っているそう

だな。今日のように巨額の報酬を用意できたことも、何か裏の事情を疑わざるを得ない』

『ワタシはクマサン商会を取り仕切っている者だ…… ほうしゅうに關しては、真つ当なお金を用意しているよ。この世界では、金イクラのエネルギーを使った道具で商売させてもらっているね』

大したことはしていないと話すクマサンを疑いの目で見続けているダクネス。主に貴族に金イクラのエネルギーを使った道具を提供したり、ウイズの魔法店に技術を伝えて収入を得ているとクマ

サンが続けると、ダクネスはより一層疑いの視線が強める。

「本当に貴族に提供しているのなら後々分かるだろう……。次の質問だ。クマサンはこの街にシャケが現れることを知っていたのなら、どうして3号の仲間を呼ばなかったんだ？」

『……最初に言っておくが、3号はかなり特殊なインクリングだよ。普通のイカは、正義感や誰かのために戦おうとはしないだろう』

まずどうして複数のイカを連れてこなかったのか。答えは単純で、

己の本能のままにナワバリ争いを勝手に始めるから。シヤケが出現していても、たとえ街の中であっても塗り、塗られ、塗り返す生き物がインクリングだと、クマサンがそう伝える。

『あとは……そうだね、こういつてしまっただろうかと思うが、3号は不祥事を起こさない、与えられた任務は真面目にこなすイカだからね。彼が1人で行動するのが、街のためだと思うよ』

種族の特徴として飽き性なイカでは、シヤケを討伐し続けているのか心配になったクマサンは、3年ほどの調査を続けた実績のある3号をこの世界に送り込んだ。ハイカラスクエアから天界を経由

してアクセルに向かわせるだけでも、かなりのエネルギーを消費して大変だったと語る。

『では、ワタシの話はここで終わりにしよう…… もっと知りたいことがあれば、キミのご両親のほうが詳しいんじゃないかな。あの人も、今頃ワタシの暖房器具を使っているはずだよ』

「本当にあなたは何者なんだ？私の親を知っているということ……」

これ以上は話さないほうがいいとクマサンに話を切り上げられ、ダクネスはカズマのいるテーブルに戻った。アクアの芸にはいつの間にか3号も加わり、アクアの指示に従いインクを使った芸を

披露している。3号を観察しているクマサンは、その様子を見てぼそりと呟いた。

『特にやましいことはしていないが、ワタシはそんなに怪しい人物に見えるのか…… まあ、姿を現さないのだから無理もないがね』

その声はだれの耳にも届くことはなく、その日はもうクマサンが話すことは無かった。宴会は夜遅くまで続き、カズマがアクアを介抱しながら馬小屋へ帰るのを見送った3号は、そのまま家へと

帰るのだった。

翌日、朝早くからクマサンの連絡を受けた3号は、ウイズにインクを提供するべくウイズ魔法店に居た。大きな容器を用意され、3号はそこにひたすらインクを射撃し続ける。ウイズはインクリ

ングのことをより知りたいのか、射撃する3号の隣で質問を繰り返す。種族としての生態の他にも、ウイズ独自の調査で分かったこともあるらしく、確認をするようなこともあった。

「前のインクにはありませんでしたが、今のインクには少し魔力を感じますね……。3号さんは何か心当たりがありますか？」

最後にインクを提供した時よりもレベルが上がリ、新しい呪文を覚えるなどの変化があった。自身のインクに魔力が含まれていることに驚きつつも、3号はそれをウイズに話す。

「そのレベルで炸裂魔法を覚えられるということは、相当な魔法の適正があるはずなのですが……。確か3号さんの職業は冒険者でしたよね？あとから才能が開花したのでしょうか」

魔法使いとしての適性がある、という漫画や小説のようなことを聞いた3号は大いに驚き、そして少しだけ誇らしい気持ちになった。3号はイカの中では真面目な方だが、やはりイカしたものに

は目が無い。当たり前のように魔法を使っていた3号だが、これからは魔法使いと名乗ってもいいかもしれない、と考えた。

「となると、紅魔族のように魔法が得意な種族ということになりますね。でも、3号さん以外のイカは魔法を使っているのを見たことがない……。一体どうして……。あつ！」

何かを思いついたのか、ウイズが3号に仮説を説明する。クマサンから聞いたイカの特徴である飽き性という点が重要なようだが、難しくなる予感がした3号はできるだけわかりやすいように説明をお願いした。

ウイズの仮説では、インクリング全てが魔法の適性がある紅魔族のような種族らしい。どれだけの才能を秘めているのかは未知数だが、種族共通の特徴として魔力の成長が遅く、大器晩成型であ

ると予想しているようだ。もしほんの少し魔法が使えても、飽き性なため碌に鍛えもせずに存在を忘れてしまっている、というもの。

「仮にこの世界に来てもナワバリ争いばかりしていそうですね……。他の生物と比べれば生命力はとても低いですし、魔力が高くて他職業に転職できるかどうか……」

魔法の才能はあっても生命力が足を引っ張っているようで、3号が他の職業に転職することは厳しいと語る。能力の伸びは良いそうなので、先輩の冒険者らしいウイズのアドバイスでは、そのままで十分に強くなれるそうだと。

話を終える頃には容器がインクで満杯になり、3号はクエストを探すべくウイズに別れを告げギルドに向かう。店の出口の前に立つたところで、丁度良くカズマとアクアが店に入ってきた。

カズマはウイズにスキルを教わりに来たらしく、3号も一緒にどうかと誘ったところで、カズマがあつと声を出す。用事を思い出したのか、はたまた言っただけじゃないことだったのか、3号はカズマに何があったのかを尋ねてみた。

「いや、何でもないんだ。……なあウイズ、3号はウイズがリッチーだつて知っているのか？」

「はい！3号さんとクマサンさんとは少し前からの知り合いなんですよ」

後ろにいるアクアが浄化してやると今にも暴れだしそうだが、カズマは構わず話を続ける。ポイントに余裕が出来たため、リッチーが持つスキルを習得するべくウイズに会いに来たそうだと。

3号も余裕があれば覚えておきたかったが、昨日炸裂魔法に全てのポイントを使ってしまったので、自分はギルドに行くと言え、店を出て行った。アクアの騒ぎ声が店の外まで聞こえてきたた

め、一体何があるのか確認したくなる3号だったが、戻れば確実に面倒な事になると思い直し、ギルドまで歩いて行った。

いつものようにギルドにクエストを探しにきた3号だったが、ここで自分がカズマのパーティの一員になったことを思い出す。これまでのように1人でクエストに行くわけにもいかないのです、手

頃なシャケの報告が無いとかクマサンに尋ねた。

『今日はザコシャケ以外の報告は無いよ。キミもパーティの一員になったことだし、次からは4人でここに来るといい。……そう暇だと言われても、仕事に行けないなら仕方ないじゃないか』

魔法の練習をしようにも、めぐみんほどではないが3号も魔法を使

える回数が限られているため、今日はクエストに行かないと決めていないと練習することもできない。魔法使いのための装備

を買おうにも、シヤケの出現がどれほど続くか分からない以上、冬を越すための蓄えをある程度は残しておきたい。収入が不安定なため、買いたい物もよく考える必要がある。

『別にワタシの前で悩まなくてもいいだろう…… キミは調査がひと段落したら何をして……ああ、ナワバリバトルか。確かにここではできないね』

3号はしばらくナワバリバトルに参加していないせいも、無性に辺りを塗りつぶしたい衝動に襲われることが増えた。街を塗るのは迷惑だと分かっているのだから抑えているが、何も無い草原

のような場所よりも、複雑に入り組んだ街のような場所の方が塗りがいがあると感じていた。

『3号、インクリングは元々ナワバリ意識の強い生き物だ…… そういえば、何が原因なのかは知らないが、ある貴族が手放した別荘が近くにある。ワタシがギルドへ適当に言っておくから、キミ

はそこを好きだけ塗るといい……』

顔に出ていたのか、クマサンに塗ってもいいとされる場所を勧められた。屋敷の場所を教えてもらった3号は、クマサンにブキを2つほど送って欲しいと頼み、屋敷へ駆け足で向かって行く。

カズマにも屋敷に向かったと伝えてもらえるそうなので、3号も遠慮せずにブキを持ち、街道からしっかりと塗り進んで行った。

1人かその家族が住むために建てられたその屋敷は、3号が想像している以上に良くできた建物だった。欲を言えばイカを集めてナワバリバトルを開催したいが、この屋敷と周辺を好きなだけ塗

れるというのも魅力的だ。まずは玄関の周りをヒーローシユーターで塗っていき、二階のテラスに向けて壁を忘れずに塗る。一度テラスに上った後、周辺の地面に上からインクをばら撒いていく。

外側を塗ることに満足した3号は、クマサンから受け取ったカーボンローラーに持ち替え、屋敷の内部へと侵入した。広い廊下を丁寧に

ローラーを転がし、行き来しやすくするように足場を整える。

家具や置物を間違つて壊してしまわないよう、振り回すことは最小限にし、部屋の中も塗っていく。

ローラーを使うことに満足した3号は、再びヒーローシューターを持ち、今度は内側の壁も塗る。時間が経てばインクが消えることをいいことに、屋敷中をインクまみれにしていく3号。クマ

サンに許可を取っていると物怖じせずにいると、突然3号の後ろからインクをかけられる。

何事かと後ろに振り向くと、なんと3号の置いたローラーが独りだけで浮き上がり、3号へ振り下ろされた。直撃は避けたものの、部屋にははつきりとローラーのインクの跡が残っている。3号と同

じ青いインクだが、勝手にローラーが浮くことなどありえない。3号は魔物の襲撃をうけていると考え、クマサンになにか情報が無いか質問する。

『もしもし、屋敷について知りたいんだね。丁度いい、カズマ君のパーティがその屋敷に悪霊を退治に向かっているそうだよ。幽霊だなんて迷信だと思っていたけれど、実際にいるんだね……』

このローラーは悪霊の仕業で浮いている。そうと分かった3号は、一目散に部屋から逃げ出した。ただの空き家だと思っていたが、いわゆる幽霊屋敷のようなものだったらしい。

ローラーだけでなくチャージャーまで浮き上がり、3号へ射撃する。ポケットに入っているスマホからは、いつの間にか子供の笑い声が延々と流れだす。心霊現象を経験したことがあまり無い3

号だったが、明らかに危ない、こちらに危害を与えるものだとはつきり認識できた。

スマホはもはや頼りにならないと判断し、3号はひとまずこの屋敷から離れることに専念する。慣れていないのかチャージャーの狙いも大雑把で、壁や遮蔽物が多い屋敷の中では避けることは簡

単だった。問題はローラーの方で、インクではなく物理的なダメージを与えてくるため、こちらの対処を上手く考えなければならぬ。浄化の魔法を使うことはできないので、何か別の攻撃手段が

欲しいと自分の知識を引き出していく。実際にあるとはとても思えないが、どこかの噂で聞いたお化けを吸い込む掃除機でさえ、今の3号にとつては是非とも欲しい物だ。

チャージャーの狙いを避けるべく一度小部屋に避難した3号だが、後を追ったローラーが部屋に入ると、なぜか扉が勝手に閉まり、丁寧に鍵までかけられてしまった。窓も無く1対1の状況、屋敷の内装を把握していないうえ、二階から侵入したせいで屋敷の入口がどこかも分からない。

じりじりとローラーが近寄ってくると、部屋の中が薄暗くなつき、距離に応じてポケットから笑い声が大きくなってくる。屋敷に入った時の好奇心はどうに消え、今では恐怖心のみが残ってしまった。

しまった。何とかこの部屋を脱出するべく、3号は1つの結論にたどり着く。

3号はおもむろに扉へ弱めた炸裂魔法を放ち粉々に砕くと、大きな音に怯んだのかローラーの動きが止まる。3号は無形の何かからローラーを奪い取り、テラスへ向けてインクを泳ぐ。

背後から大きな気配を感じるが、振り向いてはいけなさと己に言い聞かせ、テラスに到着すると同時に庭に飛び降りると、何事もなかったかのように背後の気配が消え、3号を狙い続けたチャー

ジャーの射線も消えた。

「……えっと、3号は一体ここで何をしていますか？先に屋敷にいと聞きましたが、一面インクだらけなのは3号の仕業ですよね？」

目の前にはカズマ達が立っている。無事に屋敷から脱出することに成功したことに安心した3号だったが、気を取り直して4人にここは危険だと伝える。得体の知れないなかがあることは確実

で、ここを掃除する依頼ならまだしも、住むことなど絶対にできないと訴えた。

「おっと、俺はもうここに住むのが不安になったんだが」

「女神でありアークプリーストであるこの私なら、すぐに安心して住める家にできるわよ！」

アクアがこの屋敷に住む幽霊を分析しているのか、両手を差し出しぶつぶつと独り言を言い始めた。カズマ達はアクアを放って屋敷に入っていくようなので、3号も後ろからついていく。ロー

ラーは何とか取り戻せたが、チャージャーはまだ屋敷の中にあるため、このまま家に帰るわけにはいかない。

屋敷の中は3号のインクで青色に染まっているはずだったが、まるでインクなど無かったかのような、普通の内装に戻っていた。開けっ放しにしていたはずの扉は閉まり、唯一3号の影響が残っ

ていたのは魔法で吹き飛ばした扉のみだった。

「どうしたんだ3号、顔色悪いぞ?……インクまみれにしたはずなのに綺麗になってるって?」

「屋敷をインクまみれにするなんて、3号はここで何をしていたんだ?まあ、とりあえず屋敷に荷物を運ばないといけないな」

引越したように次々と荷物を置き、まるでこの屋敷に本当に住むかのような動作を続けるカズマ達に、3号はここに本当に住むかと質問する。

「この屋敷の浄化が終わったら、ここに住んでもいいって話なんだよ。こっだけ広いなら、全員分の部屋も用意できるだろうな」

カズマは3号の部屋も用意してくれているらしく、部屋をどう分けるかを考えている。最近はシャケの討伐に行っただけで、カズマに自分の家があると報告することを忘れていたことを、3

号は後悔した。少し用事があると告げ、3号は屋敷に落ちたチャージャーを探しつつ、クマサンに屋敷に引越しをしてもいいかを質問する。

『カズマ君の屋敷に引越すのかい?それなら、家具や荷物、スーツケースを移動させておくよ……あの家は、屋敷に置けないようなブキの倉庫として使うといい……』

あつさり引越しの許可が下り、さらにあの家も倉庫として利用していいとのこと。3号はクマサンに感謝すると、間もなく荷物を運ぶ冒険者がやってくると伝えられた。どうやら3号が屋敷に引越すことを予想していたらしく、予め荷物を移動させていたらしい。

『一応言っておくが、ギルドの冒険者に荷物運びの手伝いを頼んだだけだからね。彼らは社員ではないよ……』

「ちよつとカズマー！知らない人が家具とか変な機械を運んでくるんだけどー!!」

冒険者の手伝いのおかげで荷物運びは日没前に終わり、余裕をもって浄化を進めることができる考えたのか、カズマが今日は解散とし、パーティ全員が自由に行動することが許された。

3号はチャージャーを探すついでに、屋敷の内装を把握するべく探索を開始した。カズマと同行してからは見ていないが、悪霊を発見しただけでアクアに連絡することを決意する3号であった。

あれから特に悪霊の仕業と思われる現象に出会うことは無く、チャージャーの無事に見つかったため、やる事が無くなった3号は早めにし布団に横になっていた。

部屋に置かれた家具は3号の世界でもよく見かけるものばかりだが、窓から見える星はハイカラスクエアではありえないほど輝いている。ふと起き上がって窓から外の景色を見ると、自身が居た

場所とは遠い場所に来たことを実感した。景色を見ながらこれまでの出来事を思い返していた3号だが、自分の部屋に飛び込むように入ってきたカズマに視線が移る。

「うわああアクアの部屋じゃなかった！すまん3号、おやすみなさいーい！」

扉を開けたまま走り去っていくカズマの後ろを、様々な3号のブキを持った人形が追いかけている。一瞬だけ見えたおかしな光景に戸惑ったものの、目の前を流れて行った自分のブキを取り戻す

べく、3号もカズマと人形を追って走り出した。

3号と悪霊との戦いはもう少しだけ続いたが、悪霊のブキを使った悪戯に激怒したアクアが、3号ごと浄化することで決着がついたそう

だ。

機動要塞と共に

広い屋敷の浄化は終わり、3号は現在自室でブキの手入れを行っていた。普段なら起床してすぐにギルドに向かっていたが、カズマのパーティに加わってから、基本的にカズマの指示が無ければ討伐クエストには向かうことはなくなった。

仮にオオモノシヤケが出現すれば全員で討伐に向かうと約束しているものの、冬の魔物を討伐するようなことはせず、極力屋敷で冬を越すつもりらしい。3号もこの世界の寒さにはまだ慣れてい

ないが、屋敷には暖炉があり、自室にはクマサンの計らいでヒーターも設置しているため、住むにはとても快適な環境だと、身をもつて実感していた。

「ねえ3号、カズマがスキップしながら街に出かけていったけど、何があつたか知ってる?」

「確かに、朝からやけに機嫌が良かったな。私には理由は分からないが……」

屋敷に残った3人には内緒にしているが、3号はカズマに引越し祝いを兼ね、これまで借りていたお金と受け取ることが出来るはずだった報酬金をまとめて支払っている。少し多めに20万エリス

ちようどを渡したが、おそらく機嫌がいいのはそれが原因だろう。

カズマ以外にも渡そうかと考えた3号だったが、色々と考えた結果、分割せずカズマにのみ渡すことに決めた。最終的にダクネスとカズマの2択に絞ったものの、パーティのリーダーとして、ま

ともな使い道を用意してくれることを信じ、カズマに手渡したのだ。

3号は理由は知らないと伝え、自分も散歩に行くと言った。前の家とギルド、そしてこの屋敷にスーパージャンプすることができると、街と屋敷を往復することに時間はかからない。

中継地点としてギルドに着地した3号は、一応クマサンにシヤケの目撃情報がないか確認する。

『おはよう3号。今日も、というより最近はずコシヤケすら出現して

いないね……。だが、キミに伝えておくべき重要なことがある。機動要塞デストロイヤーのことは知っているかな?』

3号は、名前だけは聞いたことがある、とクマサンに伝える。詳しい説明を求めると、簡単に解説してくれた。機動要塞デストロイヤーはこの世界の古代の時代に作られたもので、現在は暴走し

手が付けられない状態になっているとのこと。クマサン曰く、それが通った後には草も残らないらしい。

『本題はここからだ。暴走しているはずの機動要塞が、アクセルの街から遙か北西で何故か動きを止めている……。仮にこの街に来るとすれば1日ほどしかかからない距離だけど、いつ再び動くか

分からない以上、危険なことに変わりはないね』

そんなものが街に向かえば、確実に街は壊滅し甚大な被害が出るどころか、住民が全滅してもおかしくはない。だが、それに3号がどう対処できるのか。自身は特に特徴が無いインクリングで、キョウヤのように強い武器もなければ、めぐみんのように強い魔法が使えるわけでもない。

3号が止められるとすれば、それにインクが通用した場合の話だろう。だが、街1つ滅ぼすことに造作もない兵器に対して、自分のインクが通用するとは思えない。

『その通り、確かにインクは通用しないね……。もしこの街にデストロイヤーが来たら、街の冒険者全員で対処しなければならぬ……。……おや?』

クマサンに少し待つてほしいと伝えられ、3号は目の前で用事が終わるのを待つ。噂にしか聞いていなかった機動要塞が、これほど危険な物だと思わなかった3号は、何か力になれることがない

か必死に考える。しばらくして、クマサンは話を再開した。

『3号、やはり時間が無いようだ……。要塞が再び動き出した。しかも、排水しているはずの水が緑色の液体に変わっている……。この意味が分かるね?』

こうなってしまったら、3号とクマサンは無関係ではいられない。古代の時代に作られた兵器に、何があったのか大量のオオモノを含む

シヤケが侵入、排除されるどころか、要塞を制御し真つ

直ぐこの街に向かっているようだ。

『ワタシたちの世界の生き物が、この世界にいる人間の街を滅ぼす…… そんなこと絶対にさせてはいけないね。ただ、シヤケの目的が分からないのが心配だ。一体どうしてこんなことを……』

クマサンが受けた報告を整理すると、現在機動要塞デストロイヤーの中に大量のシヤケが侵入、緑のインクを垂れ流しながらアクセルに向かっているらしい。シヤケを回収しながら進んでいるためか、アクセルに到着するまであと2日程度の時間がかかるようだ。

『このことは内密にするんだ。下手に話せば混乱を招きかねない…… シヤケは種族が誇る技術で要塞を手に入れた。それができるなら、きつとワタシたち冒険者にも勝つ手段があるよ』

クマサンはただ倒されるつもりではない。このことを予見していたのか、ウイズと協力して対抗できる手段を開発していたとのこと。『話は終わりだ。時間もないので、キミはすぐに街の北西の外壁に飛んで欲しい』

3号はアクセル北西の外壁に設置されたジャンプピーコンを使い、外壁へと飛んでいく。遠くを見ても要塞らしきものは見えなかったが、クマサンの話が本当ならあと2日で到着するはずだ。街

の外壁に降り立った3号は、そこに並べられたものに驚愕する。

見た目はただの音響機器だが、その使い道を3号は知っていた。3年ほど前にナワバリバトルで使われていたが、レギュレーション変更で使用が禁止されたスペシャルウェポン。過去にもこれが

世界を守ったことがあったが、今回もシヤケを倒す、最後の切り札になりそうだ。

『ギルドの放送を隅々まで届ける音響機器……という名目で設置させてもらったよ。キミもメガホンレーザーの威力をよく知っているはずだ……』

射程は無限、音波で攻撃するはずがなぜか壁を貫通する理不尽な性能、そして0.2秒ほどでイカを倒す滅茶苦茶な攻撃力と、これまでのブキとは規格が違う。撃つてすぐに移動できない欠点があ

るが、外壁に並べて設置されているため、街に進む要塞を迎撃することは十分可能だろう。しかも、ウイズと協力した結果機器の後ろに立って大声を出すだけで発射ができるように改造されているとのことだ、連射することも可能になったようだ。

魔法に関しては強力な結果が貼られているが、メガホンレーザーの攻撃なら本体にダメージはなくとも、中に潜むシヤケには大打撃になるはず。だが、本体はどうするのだろうか。

『悪いが、ワタシにはどうすることもできない……ワタシとキミの役割はシヤケをどうにかすることだ。要塞の撃退に協力はするけど、どうにかできる力はない。街の冒険者だよりになるね』

3号は不思議と不安に思うことはなかった。この街にデストロイヤーとやらが来ても、カズマ達なら何とかなるような予感がするのだ。根拠なんてものはないが、それでも彼らなら成し遂げられると、そう思っていた。

外壁の上から街を見下ろせば、生き生きとした住民や冒険者の姿が目に入る。人間とイカ、最初は驚いたが種族は違っても生活の様子はそれほど変わらなかった。彼らはインクを泳げず、イカの

姿になれず、スーパージャンプもインクのブキを扱うこともできない。ただ、3号がこの世界でしばらくの時間を過ごして確実に理解できたことが1つあった。

人間は強い。イカとは比較にならないほどの生命力を持ち、頭が切れ、強力な魔法を扱う者までいる。そして、それを個人個人で補っているのだ。力が強くなるとも、魔法が使えなくとも、知力がそれほど高くなくとも、協力し困難に打ち勝つ力があると、これまでの戦いで何度も目にしてきた。イカと同じようで少し違う文化は、何故だかとても眩しく見える。

イカは種族全体を総称すれば、戦闘民族と言っても過言ではない。常にナワバリバトルやガチマッチと名付けられた戦いを繰り返し、シヤケからは一方的に資源を奪い、タコから勝ち取った地

上にナワバリを広げ生活している。イカにとっては当たり前のことだが、少なくともタコは不服に思っていたし、シヤケも抵抗を続け

ている。

現に3号も戦いを続けているが、人間にもクラゲなどの海洋生物と同じく、戦わない選択肢を持っていると、街を歩いて感じる事ができた。ブキチのように武器を売って生計を立てる人間も

いれば、ロブのように食品を売って生活している人間もいた。

ふと街を見下ろして物思いにふける3号だったが、最後に疑問が1つ浮かび上がった。人間はイカよりも遥かに強い。3号やクマサンがこの世界に来る必要はなかったのではないかと。

『その疑問にはつきりと答えられる者はいないよ……イカでも、人間でもね。だけど、ワタシたちが来て命を救われた人間も、もしかすればいるかもしれない。そう考えれば、ここに来たことは

正しい選択だったと思うけどね……違うかい？』

声に出してしまっていたのか、クマサンが3号に話しかける。3号もただシャケを倒し金イクラを集めるためだけに専念していたわけではない。犠牲を最小限にするために迅速にシャケの討伐を進めてきたつもりだった。それで救われた人間がいるなら、ここにきて良かったと思えるような気がした。

『さあ、時間は無いよ。機動要塞デストロイヤーは現在もシャケと合流し回収しつつアクセルに向かっていている。キミはそれまでにワタシが設置した仕掛けを把握しておいてくれたまえ……』

クマサンからウイズ魔法店に行くように指示された3号は、一度ギルドへ飛び魔法店へと走る。ウイズとクマサンの魔力の技術が詰まったブキや道具を見せてくれるようなので、3号もできるだけ早く理解しておきたいと考え、駆け足で向かうのであった。

店の外から商品を眺めていると、薬品の他にも新たに3号の知るローラーや、シューターといったブキが展示されている。値札によれば、商品名はイカした冒険者になりきるセット、価格は2万

エリスと高めになっている。誰に売ることが目的なのか分からない価格設定ではあるが、とりあえず3号は店の中に入り、ウイズに詳しい状況を説明してもらう。

「いらつしやいませ……あら、3号さん。要件はクマサンさんから聞いていますよ」

デストロイヤーが接近していることは既にクマサンから知らされていたようで、話は円滑に進んだ。まずはウイズのインク研究の成果として、武器に小型化した簡易インクタンクを取り付けるこ

とで、イカでなくともインクを放つことができる対シヤケ用の武器が完成したらしい。

「これは短めの剣にインクタンクを取り付けたものですね。一般の冒険者の方でも、簡単にシヤケに大きなダメージを与えることができますよ」

3号の目の前に差し出された剣は、柄の部分のインクタンクが取り付けられた特注品。タンクとインクの分の重量で少々重たくなつてはいるが、振り回せば3号のインクが飛び散るため、オオモノシヤケにも効果的なことは間違いないだろう。3号も少し前に短剣を買ったが、結局戦闘で使うことは無く、現在は包丁の代わりに食料を切る道具になっている。そのため、3号はこれを使うのは自分ではないほうが良いと判断した。

「もしインクが無くなっても、3号さんがインクを補充すれば無限に使うことができます。これを上手く使うことができるのは、カズマさんぐらいでしょうか……」

一理あると3号は思った。3号と共に行動することが多いカズマは、ザコシヤケだけでなくオオモノシヤケとも遭遇することが多い。めぐみんやアクアと違い、パーティの中で補助的な役割をこな

しているが、本人も決定打となる武器が欲しいと願っているはず。クマサンから3号に手渡すように言われているらしく、ウイズは3号にインクタンク付きの剣を手渡し、次の兵器の説明へと話を進める。

「えつと……確か、3号さんの前の家にはリスポン地点?というものが設置されたみたいですね。後はそれほど重要な物ではないと思います。私が開発したものは、あの剣以外は使用する許可が下りなかつたんです……」

ウイズが開発した兵器の中には、あのウイズ印のタンサンボムに連続で投擲する機能と自動でエネルギーを溜める機能を付けた、ウイズ印のタンサンボムピッチャーといった物もあったらしい

が、あまりに危険すぎるとクマサンから使用禁止を言い渡されたらしい。同様に、魔法の力で強化されたウイズ印のブラスタースピナーも使用禁止と伝えられたようだ。

クマサンが改造した武器と同じく馬鹿げた性能をしたブキを開発したと安易に予想できるが、クマサン印のブキは使用を禁止することはなかった。それを考えると、ウイズ印のブキには恐ろしい仕掛けが施されているに違いない。

「あとは、研究でインクがとても少なくなったので、補充をお願いします！今のうちに補充しておかないと、いざという時に使うことができないので！」

そういったウイズは、前回は遥かに上回る大きさの容器を用意した。自身の身長の2倍ほどの大きさの容器を設置された3号は、自身の気力が続く限り、インクを容器に注ぎ続けるのであった。

何とか容器をインクで満たすことができたが、時刻はもう夜になってしまった。3号はウイズに別れを告げると、屋敷に向けてスーパージャンプした。いつもなら好きな時間にギルドか自宅で夕

飯を食べていたが、今は5人で同じ家に住んでいるため、早めに帰らないと食事の時間に合わない可能性がある。

急いで屋敷に飛んだ頃には、中からいい匂いが漂っている。3号は屋敷に入る前にインクで適当に身体を洗い、食事をとるべく食卓へ向かう3号にカズマが声を掛ける。

「おかえり3号、丁度引越し祝いの品が届いたところなんだよ……どうした？ぼーっとして」

おかえりという言葉聞いたのは久しぶりだと感じた3号は、その言葉を聞いて動きが止まってしまった。気を取り直してカズマにただいまと話すと、2人で食卓へと足を進める。一体どんなお

祝いの品が届いたのか考えていた3号だが、部屋に置かれているのは

何とも言えないものだった。

「まさか霜降り赤蟹にお目にかかれるとは……。今日ほどこのパーティに加入して良かったと思つた日は無いです！」

そんなに高級なのかとカズマがめぐみに尋ね、めぐみんがその美味しさを熱く語っているものの、3号には一切耳に入らなかつた。テーブルに置かれた食料は、見た目と色は違えどハイカラスクエアに店舗を構える靴屋、その店員であるシガニーによく似ている。

共食いとは言わないが、同じ地上に暮らす海洋生物としては、蟹を食べるのは複雑な気分だ。アクアが持っているお酒も、機動要塞が近づいている今、下手に飲んで体調を崩すわけにはいかな
い。

椅子に座つたカズマは早速蟹を食べ、一瞬見たこともないような笑顔を浮かべると、次々と蟹を食している。それを複雑な顔で見つめる3号に、ダクネスが心配したのか話しかける。

「3号は蟹が苦手なのか？ 一口でもいいから、一度食べてみるといい。この美味しさは滅多に味わえないからな！」

「そうよそうよ！ 今食べなかつたら、いつ食べるのよ！」

押しに負けた3号は、1つの足を手に取り、口に運んでいくと、その蟹は確かに美味しいものだった。この世界に来てからどころか、これまで食べた物の中でも味わつたことがないほど美味しい

が、同時にこれを美味しいと言ってしまうのは気が引ける。下手にまずそうな顔をすることもできないので、3号は美味しい、と皆に聞こえるように声に出すと、2つ目を食べ始めた。

できるだけゆっくり、1つ1つ味わつて食べるようにし、最小限の量を食べるだけで済んだ。ダクネスやアクアは既に結構な量の酒を飲んでいるが、カズマは少し口にしただけで満足したのか、も

う寝ると自分の部屋へ戻って行く。これを好機と見た3号は、同じくもう眠ると伝え、自室に戻って行った。

早めに就寝していた3号だが、外が何やら騒がしいと感じ目が覚めた。こんな夜更けに一体何が考えたが、硝子の割れる音が屋敷に響

いた時、3号は急いでインクタンクを背負い、懐に置いた

ブキを持って音がした方向に向かう。うとうとしながら走っていると、半裸になって倒れたカズマと、窓を見つめる女性陣がいた。何があったのか尋ねてもよかったが、面倒臭くなった3号はその場を静かに去り、何もなかったと自分に言い聞かせて眠った。

翌日、クマサンの着信音で目が覚めた3号は、現在のデストロイヤーの状況を聞く。話によれば、相変わらず周辺の水場からシヤケを集めつつアクセルに向かっていているらしい。そのためこの街

に到着するのは翌日の昼頃になるらしく、準備を進めておいてほしいと伝えられる。

一体何を準備すればいいのかと考えつつ、先に住民が逃げる準備をするべきではないかと尋ねる3号だったが、住民の生活もあり、今の時期は下手に街の外に逃げても魔物に襲われるだけだとクマサンは話した。

その後、朝食を食べながらアクアに昨日の夜何があったのかを聞くと、カズマが悪魔に操られていて、色々と大変だったらしい。3号からすれば色々の部分が気になるところではあるが、面白い話ではないとアクアはそれ以上のことを話してくれない。

仕方がないので、3号は屋敷を出てギルドへ飛んだ。今日できる仕事は無いとはいえ、この街に脅威が迫っている中何もしないというのは性に合わない。到着してすぐにクマサンの居る受付に向

かい、何か出来る事はないかと聞く。

『そうだね…… 3号、キミはスーパージャンプを活かして物資の輸送を任せられるかもしれない。街にジャンプビーコンを置くついでに、この街を詳しく把握しておくのはどうかな……』

3号はアクセルに来て結構な時間が経ったものの、ギルドや屋敷、ウィズ魔法店の辺りは把握していても、それ以外の場所に詳しいとは言えない。その提案を聞いた3号は、すぐにギルドを飛び

出し、地図を確認しながら街を散策する。商店街や路地裏、住宅街といった場所を把握し、許可を得てジャンプビーコンを設置してい

く。その作業は目まぐるしく時間を経過させ、なんと気が付けば日が沈んでいた。

付け焼き刃の知識だが、3号は一応街を把握し、明日のデストロイヤー襲来に備え屋敷へと飛んで行った。一瞬で1日が終わりそうになっっていることを思い知った3号は、本当にこの行動をして良かったのか、もつと別の何かをするべきでは無かったのかと悩んだものの、結局答えは出ないまま屋敷に着地した。

屋敷に着地すると、珍しく屋敷の照明に虫が集まっているのに視線が移る。普段はこんなことは起きないが、珍しいこともあるものだと3号が屋敷に入ろうとした時、念のためとその虫をもう一度確認すると、3号の頭の中が真っ白になるが、クマサンの通信で意識を取り戻す。

『もしもし3号、デストロイヤーから降りたシャケが暴走し、アクセル……いや、キミの住む屋敷へ向かっている！今すぐ屋敷で迎撃する体制をとるんだ……！』

照明に集まった虫が3号に纏わりつく。洞窟にいたヒカリバエが、今この屋敷に集まっていた。

この素晴らしい世界にもナワバリを！

暗く静かで、平穏な夜のアクセル。街の住民の誰もがいつもと変わらぬ日々を送り、明日もきつと同じような日が来ると信じている。だが、屋敷の前に佇む3号は、この街に異常なものが近づいてくることを実感させられていた。

自身の周囲を飛び回るヒカリバエを振り払い、僅かな時間で屋敷の壁を塗り、庭を塗り、屋敷を囲む塀も塗った。いつ暴走したシヤケが襲来するのかわからないが、こちらに来るまでにできる限りのことをしようと、3号はとにかく自身のナワバリを広げている。

『街を大幅に迂回するように屋敷に向かっているね…… 到着するまであと5分ほどの時間はある。パーティ全員に知らせて、安全に迎撃するんだよ……』

少しだけ時間はあると聞いた3号は、カズマに大声で外に出るよう叫ぼうとする。しかし、突然周りを塗る3号に只事ではないと判断したのか、屋敷からカズマが飛び出してきた。カズマに暴

走したシヤケがここに来る事を伝え、中に居る3人を呼び出そうとした時だった。

『3号、少しいいかい？アクア君とめぐみん君を戦わせるのは控えたほうがいい。あくまでもワタシの予想だけどね……』

「アクアとめぐみんがいればシヤケなんて余裕で相手できるんじゃないのか？俺は呼んだほうがいいと思うけど」

アクアの戦闘力には目を見張るものがある。3号は拳や物干し竿を操りシヤケを討伐していく姿は今でも覚えているし、数々のシヤケを吹き飛ばしたためぐみんの爆裂魔法の衝撃は、これからもき

つと記憶に残るだろう。そんな2人をどうして戦わせてはいけなののか、3号とカズマは納得できなかつた。

『正確にはダクネス君もだ。あの3人……いや、カズマ君もだね。今キミたちを失うと困るんだ…… 時間は無いが簡単に説明させてもらおう』

失うと困る、言われたカズマたち。3号は薄々分かっていたと答えるが、カズマは本当に心当たりがないらしい。そして、クマサンはここにシヤケが来たことは3号の責任ではないと前置きす

る。3号がカズマと一緒にいなくても、どの道こうなっていただろうと語る。

『爆裂魔法に圧倒的な戦闘力……シヤケはキミたちを脅威に感じている。特にあの2人をここで倒せば、デストロイヤーは止まることなくアクセルを滅ぼし、残った土地や資源を活用して種族が

繁栄することは間違いないだろう。天敵であるイカがないのだから、快適に過ごせるだろうね』

「なあ、アクセルが滅ぶってどういうことだ？そもそもそのデストロイヤーって何なんだよ？」

3号はカズマに大きな兵器だと話す。シヤケが持つ謎の技術と金イクラというエネルギー源、そして天敵であるイカさえいなくなってしまうば種族が繁栄することは間違いない。遙か昔からシヤケは存在するが、イカの存在がいつも邪魔してきた。しかし、この世界では技術の他に魔法も扱え、天敵もない。おまけに街を簡単に滅ぼす兵器まで手に入れてしまった。

『魔法に技術、食料に土地とここには全て揃っている。そう、この素晴らしい世界にもナワバリを広げに来たんだ。そうなれば、この世界も3号の世界も危ない……新たな脅威が誕生するね』

「急な話でさっぱり分からないんだけど、とりあえず俺たちはシヤケを倒せばいいんだよね？」

カズマは仲間知らせるべく屋敷に戻っていく。敵襲と聞いた仲間はずぐに外に集まり、シヤケがこちらに迫ってきていることを知る。

「ふふふ。丁度今日はまだ爆裂魔法を撃っていませんし、何が来ても私が吹き飛ばしてあげますよー」

『やる気十分なのは嬉しいが、キミに今魔法を使われては困る……シヤケの目的はおそらくキミたちの魔力や気力を消耗させることだよ』

めぐみんの魔法は日に一度きり。明日になればまた放てるだろうが、万が一のこともあると、クマサンはめぐみんが戦うことを良く思っていないようだ。屋敷の外ではあらゆる方向からシャケが

襲来するため、部隊を2つに分け、屋敷の内外で戦うことを提案した。

「私とめぐみん、アクアの3人が屋敷で戦うのだな。2人は絶対に守るから、安心して戦ってくれ」

「えっ俺外で戦うの？3号もいるけど、ちょっと厳しくないか……？」

どちらで戦うのもカズマの自由だが、仮にカズマが屋敷で戦えば3号に負担がかかり、全員が屋内で戦えば内装が悲惨なことになるのは間違いない。とりあえず外で倒せるだけ倒したほうがいい

と3号は伝えた。

「そうですよ。カズマは3号から受け取った秘剣びちやびちやがあるので、私が出る幕はないかもしれませんね」

「俺の剣に変な名前をつけるのはやめろっ！とにかく、せっかく手に入れた家が荒らされるのは俺も嫌だし、3号と一緒に戦う……なんだこの音、地震か？」

ヒカリバエがアクアに飛び移り、地鳴りのような音が微かに聞こえてくる。3号はカズマ以外の3人に急いで屋内に行くように伝え、シャケの襲来を待つ。音は徐々に大きくなっていき、先頭の

シャケが目に見えた時、数秒もかからずに屋敷は戦場へと変わった。

オレンジの波が屋敷に押し寄せるように暴走したシャケは迫り、3号とカズマはそれを真正面から食い止める。幸いにも一方向からの突撃しか行つてこないため、ありとあらゆる方向から攻撃されるよりは遥かに楽に対処できる。

「あの洞窟の時より数が多くないか!?3号、インクが無くなったらすぐに言えよ！」

シャケとてここで全ての兵力を使うつもりはないはず。前と比べれば確かに数は多いが、これを凌げば翌日までは平和な時間が訪れる。

手に持っているのは最強のブキ。しかし、どんなブキでもいつかは
インクが無くなることは明白だ。背後にて討伐しきれなかったシャ
ケをカズマに対処してもらっているが、この安定した状況も
長くはもたないだろう。

「交代だ3号！俺が一旦前に出るから、少しでもインクを補充してく
れ！」

背中 of インクタンクを見て察してくれたのか、カズマは身を挺して
時間を稼いでくれるようだ。一度3号がカズマの後ろに下がると、こ
ごどばかりにシャケがなだれ込んでくる。カズマは剣の

刃をシャケに向け、真つ向から突撃し迎え撃つ。その隙にインクを
補充し終えた3号は、再びカズマと位置を交代しようとする前に進むが、
カズマの勢いは衰えることを知らない。

「3号、俺思ったよりシャケを何とかできそうだ！何というか、日頃の
ストレスが発散されるみたいで結構気持ちいいんだよな……」

イカなら倒されてもおかしくないほどに前に出て戦うカズマだが、
本人は特に問題は無いらしい。シャケをなぎ倒さなければ解消され
ないストレスも気になるが、3号は少し戦線を下げたほう
がいいと伝えて、屋敷から離れすぎないように気を配る。

剣を好きないように振り回すカズマと、屋敷に侵入しそうなシャケを
討伐する3号。立ち位置が逆になっても問題なく迎撃できていたが、
3号とカズマは背後から聞こえるアクアの声によって、戦
いがもうすぐ終わることを察した。

「ヒカリバエはどこかに飛んで行ったから、そろそろシャケの突撃も
終わるんじゃないのー!？」

「……もう終わりか！俺でも結構何とかなるもんだな……つとー！」

最後尾のシャケがカズマに突撃するも、あえなく討伐された。無事
に屋敷に侵入されることもなく、屋内の3人も、3号とカズマも無事。
怪我をすることなくシャケを討伐できたのは大きい、3

号はここで襲撃が終わるとは思えなかった。

『よし、もうザコシャケがこの屋敷に来ることはないね……よく頑
張ってくれた。あとはワタシたちが何とかしておくよ。おかしな話

だが、全力で休んでもらえると嬉しいね……』

「……本当にもう帰っていいんだよね？それじゃ、もう遅いし寝るとするよ。おやすみ3号」

本気でアクアとめぐみんを倒すなら、オオモノシヤケを総動員して屋敷に襲撃してきてもおかしくはない。警戒して辺りを見渡す3号に、クマサンはもう大丈夫だと言い聞かせた。

クマサンに策があると感じた3号は、急いで屋敷に戻り就寝の準備をする。仲間にも今日は早く寝るように話し、ベッドに飛び込むようにして眠った。時々メガホンレーザーやボムラッシュの音

が聞こえ目を覚めますが、外を見てはいけなさと心を無にして眠る3号であった。

外がまだ薄暗く、まだ住民のほとんどが眠っている時間に3号は目が覚めた。緊張感からか眠気は無く、横になっても眠れる気がしなかった3号は、気分転換に外の空気を吸いに外に出た。

こうしている間にも、きつと機動要塞デストロイヤーはこの街に接近し続け、シヤケ達は街が減ぶことを今か今かと待っているのだろう。考えてもどうにかなる話ではないため、3号がギルドに

でも飛ぼうかと考えた時、クマサンから着信が入る。

『昨夜は大変だったね……ただ、キミの声かけのおかげで住民に被害はなかったのが幸運だったね。3号はこんな朝からどうしたんだ？デストロイヤーがここに来るまで、まだ時間はあるよ』

緊張して眠れないだけだと3号は話す。あれからクマサンも夜は出歩かないようにだとか、早く寝たほうがいと口酸っぱく注意したおかげか、大人も子供も巻き込まれることは無かったそう
だ。

まだ4人は屋敷で眠っているし、起きて早々街が減びそうだななどと伝えては確実に混乱するだろう。やることがあるわけではないが、今は外に居たい気分だった。

『それなら、ハイカラスクエアに帰る準備を進めてほしい。前の自宅に荷物を纏めておいてくれれば、すぐに向こうにも帰ることができる

だろうからね……』

ハイカラスクエアという名前を聞いた時、3号は街の光景がはつきりと頭に浮かんだ。いつになったら帰るのかと思っただけだが、冒険者の生活が板についてきたのか、冬をどう過ごそうかと

考えるほどこの世界の生活に慣れていた。

クマサンが言うには、シャケの大半はデストロイヤーに搭乗し、残ったオオモノシャケは少なく3号が倒す必要はないとのこと。つまり、3号の役割はもう終わりに近づいているのだ。

『冒険者の協力のおかげで、あれだけ居たザコシャケも今はほとんど討伐されたよ…… いやあ、長いようで短かったね』

都会という名に相応しい街並みに、スマホ片手に歩き回るイカたち。2時間ごとに流れるニュースを見ては、一喜一憂した思い出が蘇ってきた。少し前なら帰ることを喜んでいただろう。しかし、今帰れると言われれば、少し複雑な心境であった。

ハイカラスクエアに帰れば、通貨であるエリスはもちろん使うことはできない。3号が持っている100数万エリスはカズマに渡すと決めていたが、それ以外の様々な物はどうすればいいのだろうか。

『キミに貸しているブキは後でワタシが回収しておく。持って帰るものを来た時と同じようにスーツケースに詰め込めばいい…… 帰りに荷物が増えていと思うけど、入りきるだろう』

そうと分かればすぐに行動、3号は屋敷に戻り、持ち物の整理を始めることに決めた。一瞬で屋敷に到着し、皆を起こさないように自身の部屋に帰って行く3号だが、部屋の中にひと際存在感がある物が目に入った。

自身のスマートフォン。この場所に来るまでは肌身離さず持ち歩いていたものだが、戦闘に持ち込むのは危険だとずっと部屋に置いていた。これまで何とも思わなかったそれが、今では何故かとても大事な物のように思えてきた。

通信圏外だったため仲間に連絡することはできなかったが、充電する器具があるためバッテリーは問題ない。それに気が付いた3号は、

スーツケースの中からイヤホンを取り出し、自分の耳とス

マホを繋ぐ。音楽は何も流していないが、かつての戦いを彩った音楽が聞こえてくるようだった。

名曲 *Splattack!* を再生すれば、ただの部屋の片付けも一味違ったものになる。久しぶりの音楽は3号の気力を回復させるには十分な効果があった。ご機嫌なまま片付けも終わり、荷物を纏めよう

とスーツケースを開いたところで、突然部屋の扉が開かれる。

「お、おはよう3号。随分機嫌がいいみたいだけど、何があつたんだ？」

カズマは朝食が出来たことを知らせに来てくれたようだが、イヤホンをしていたためノックに気付かず、突然現れたカズマの姿を見て驚いた3号。既に全員が目覚めているらしく、3号が起きるのを待っていたようだ。

3号はすぐに降りると伝え、インクタンクを背負い、ヒーロースーツ一式に着替え、ヒーローシューターを手に食卓へと向かった。

「どうしたの3号、完全武装じゃないの。シヤケが出てきたの？」

普段着のまま朝食を食べる4人に比べ、3号の格好は明らかに戦闘するためのもの。詳しくは言えないものの、大体そうだったものだとかアアに話す。3号は真剣な表情で朝食を口に運ぶためか、

自然と仲間の口数は減り、食べ終わる時間も短かったように思える。

「昨日のシヤケの残党が残っているのですか？それなら私が全部ぶつ飛ばしますよ」

シヤケと戦えなかったことを不満に思っているのか、早くも戦闘する気が満々のめぐみん。とても頼もしいが、今はまだその時ではないと話す3号の声を遮るように、ギルドからの放送が屋敷の

内部にも届く。

『デストロイヤー警報！デストロイヤー警報！住民の方は直ちに避難し、冒険者の方は装備を整え、冒険者ギルドへっ！』

「……何警報だつて？冒険者はギルドに集まれて言われたし、とり

あえず準備するか」

のんびりと装備を整えるカズマと比べ、アクアやめぐみん、ダクネスは血相を変えた様子で部屋に駆け込んでいった。3号は準備が出来ているため、外で待っているとカズマに伝えた。

少し待っていると、荷車に道具を積んだアクアと、荷物を背負った3人が外に出てきた。これからギルドに行くには少し荷物が多いと感じた3号だが、いまいち状況を理解していないカズマに説

明をするアクアたちの会話を聞いて、何故荷物が多いのかを理解した。

「逃げるのよ！遠くへ逃げるの！あれと戦うなんて無謀もいいところよ！」

話が違う。3号はてつきり5人でデストロイヤーを討伐しに行くと思っていたが、カズマ以外の3人は逃げるつもりのようなのだ。それでは困ると、3号も色々な理由を述べて引き留めようとする。

「3号の言う通り、やっと手に入れた家を壊されるのは納得いかない。ほら、ギルドに行くぞ！」

カズマの鶴の一声に応じて、しぶしぶ納得した仲間を連れ、全員でギルドへ向かった。道中逃げ惑う沢山の人を見かけた3号は、その脅威の大きさを改めて理解するのだった。

「現在、デストロイヤーは街の北西方面から、こちらに向けて真っ直ぐ進行中です……。到着まで、あと一時間ほどかと……」

もう少し早く知らせるべきでは無かったのかと思う3号だったが、各地の水辺を転々とするデストロイヤーの進路は複雑だったらしく、つい先ほど真っ直ぐアクセルに向かい始めたとのこと。

「そして、このデストロイヤーは大量のシャケを乗せ、この街に向かっていています。3号さん、詳しい説明をお願いしてもいいでしょうか」

職員からの思わぬ発言に取り乱してしまった3号。こういったことはクマサンが説明するものだと思っていたが、自分が知っている情報を全て集まった冒険者に伝える。

機動要塞デストロイヤーは暴走していると聞かされているが、実際

はシヤケが操作できる状態にある。その経緯はどうあれ、侵入したシヤケがこの街に向けて進行を続けていることは确实。討伐

するなら、要塞の他に大量のシヤケとの戦闘も覚悟しておいたほうがいいと3号は話す。

それを補完するかのようには、ギルドの職員が基本的なデストロイヤーについての情報を話している。開発した国はデストロイヤーに最初に滅ぼされたと聞いた3号は、想像しているよりとんでも

ないものを相手にしているのではと考えはじめた。特に魔法を防ぐ結界は凄まじいらしく、爆裂魔法でも破壊できないらしい。

「結界、結界か……。なあアクア、お前なら結界を破れるんじゃないのか？」

うーんと悩むアクアが、やってみないと分からないと話す。アクアが結界を破れば、あとは最大威力の魔法で攻撃するだけ。アクアの発言にどつと場が盛り上がり、次は本体にダメージを与えられる魔法が必要だと、受付嬢のルナは語る。

それを聞いた周囲の冒険者がめぐみんを注目しているのを見て、3号は昨夜のクマサンの発言が納得できた。頭のおかしいだのと言われているが、めぐみんの爆裂魔法ならダメージを通用するだろう。

「この街では、爆裂魔法が最大火力だ……。どうだめぐみん？」

「えっと、我が爆裂魔法でも、流石に一撃では仕留めきれないと思われる……」

デストロイヤーの特徴は知っていても、実際に見た事がない3号にとって、その発言は衝撃的だった。シヤケが乗っ取ったというのなら、爆裂魔法さえ撃てば粉々になると想像していたものの、そもいかなほどの強敵らしい。

「なあクマサン、シヤケが関わってるってことはクマサンの分野だろうか？ 何かいい案はないか？」

『確かにシヤケが関わっているけど、デストロイヤーはこの世界のものだ……。ただ、爆裂魔法を扱える人物を1人呼んでいるから、2人ならどうにかなるんじゃないかな？』

めぐみん以外に爆裂魔法を使う人物。3号は心当たりが無かったが、冒険者の背後からお待たせしましたと話しながらこちらに来た人物を見て、3号は驚愕する。

ウイズ魔法店の店主であるウイズを呼んだとなると、彼女もデストロイヤー討伐の鍵になる人物だということ。それを思い知った3号は、思わずクマサンの方を向いた。

『偶然のことだよ…… シャケがデストロイヤーを攻撃するなんて考えもしなかったし、ワタシが関わる人物が皆ここに集まっているのも偶然だ…… さて、準備は整ったね。これから作戦を伝えるから、冒険者閣員はよく聞くように……』

今はクマサンに個人的な質問をしている場合ではない。緊迫した空気の中、3号はクマサンの作戦に耳を傾けるのであった。

最後に勝つのはどっち？ シャケ vs 冒険者

街に接近する起動要塞デストロイヤーに対抗するべく、3号を含めたアクセルの冒険者全てがギルドに集結し、現在はクマサンによる作戦会議が始まっていた。内容は至って単純で、アクアが結

界を破壊し、めぐみんとウイズが爆裂魔法で本体を攻撃するというもの。

『結果を破壊したら、同時にメガホンレーザーでの攻撃も行う。今は無人ではなく厄介な搭乗員がいるからね…… 部隊を2つに分けて戦ってもらったほうが楽だろう』

デストロイヤーにシャケが搭乗していることも忘れてはいけない。大半のシャケは爆裂魔法とメガホンレーザーで討伐できても、要塞から降りて直接攻撃するシャケの存在も考えなくてはならぬ

いたため、3号は別の部隊で行動することが決まった。

『対デストロイヤーの指示はカズマ君、シャケに関してはもちろん3号に任せるよ。カズマ君には特別なスマホをプレゼントするから、3号との連絡はそれで行ってほしい…… とても貴重なもの

だから、大切に扱ってくれたまえ』

「このタイミングでスマホをプレゼントしてくれるのか!? 安心してくれ、俺はスマホの使い方をバッチリ理解してるからな!」

こうして大々的にスマホという名を話すことが無かったためか、カズマと3号を除いた冒険者たちは、カズマが手にしている小さな長方形の物体をまじまじと見つめている。一部の冒険者や、仲

間から疑問の声に対しては、3号が遠くの相手と会話ができる魔法の道具だと説明した。

概ねの議論は終わり、少しでも兵器の照準を合わせておくため、3号は一足先に持ち場である外壁の上、メガホンレーザーの設置された地点に向けてスーパージャンプした。空中でも分かるほど

の冒険者たちの雄叫びを聞き、冒険者だけでなく、3号の士気も高まっていく。

『こちらはきつと大丈夫だ。キミには貯めこんでいたスペシャルパウ

チを支給していくから、必要な物があれば連絡してくれたまえ……』
『……もしもし、こちらカズマ！ちゃんと繋がってるみたいで良かったよ。クマサンはよくこんなもの作ったよな……うわっアクア、俺のスマホを取るのはやめろ！俺の！おれのだからーっ！』

へー、便利な道具もあるのねとアクアの声が聞こえれば、私にも貸してくださいと頼むめぐみんの声、ダクネスとカズマは2人の動きを抑えているようで、向こうは戦闘の前に未知の機械に盛り

上がっている。それを聞いた3号は、状況を不安に思うことは無く、むしろ安心していた。

あの4人ならどんな困難にも負けないという予感が、確信に変わる3号だった。

外壁の2方向、3号を挟むようにしてアクアとウイズのペア、そしてめぐみんが待機している。正門の真上に設置されたメガホンレーザーの前には、クマサンが集めた音量に自身のある冒険者が集

まっついていて、結界の破壊の後に3号の指示で一斉に撃つ予定となっている。3号が使う分はないが、同時にハイパープレッサーを放つと全員に伝えているため、一応攻撃には参加する予定だ。

『冒険者の皆さん！そろそろデストロイヤーが見えてきます！』

その声を聞いた直後、街から離れた小さい山が崩れ落ち、その黒い身体と8本の足が姿を現した。かなり遠くに居るためはつきりと確認できないが、デストロイヤーの通った場所は緑のインク

で塗られていくように見える。どうやらシャケが搭乗しているとの話は本当らしい。

本体には勿論他者を攻撃する機能が備わっているとのことだが、あれほどの巨大な要塞だと、ただ街を通り過ぎるだけでも大きな被害ができることは確実だろう。本当に勝てるのかと考えてしまう

が、頬を叩き、絶対に負けることはないと肝に銘じる。

「ちよつとウイズ！本当に大丈夫なんでしょうねえ!？」

カズマと通信でやり取りしている距離のはずだが、3号の耳に届くほどの大きな声が聞こえてくる。いざ実物を見ると不安に思っ

まうのも無理もない。それだけ声を出せるなら、メガホン
レーザーで攻撃にも参加してほしいものだ。

本体を攻撃するという重要な役割を任せられためぐみんは、杖を抱えながら細かく震えているように見える。カズマが何とか励ましているようだが、どんな敵にも爆裂魔法を撃ち込んだできためぐみんなら、いざという時は撃つてくれるはず。

街からデストロイヤーの間には何の障害もなく、街にたどり着くまで時間もかからない。そろそろ潮時ではないかと3号が感じた時、空からアクアに向けて物干し竿が降ってくる。いよいよ結界を破壊するようだ。

邪魔としては悪いと分かっているが、初めて見る本気のアクアの呪文。3号はアクアの呪文を詠唱する様子を見つめていた。詠唱を続けていくと、空中に魔法陣が複数浮かび上がり、物干し竿を構え……

『——ブレイクスペルツ!!』

唱えた瞬間、魔法陣から一斉に光線が放たれ、デストロイヤーの結界に直撃する。が、隣でまじまじとアクアを眺めていられる余裕はない。アクアの魔法の威力が凄まじく、吹き飛ばされないよ

うに地面にしがみつくのがやっとなため、結界を破壊した瞬間を確認できない。

「めぐみんさん、同時発射です!……あら?」

強風が止み、ようやく起き上がったと思えば、無事に結界を破壊できたらしい。今度は爆裂魔法で動きを止める段階だが、めぐみんの緊張が解けず、本来の実力を発揮できていないようだ。

めぐみんはカズマに任せるとして、3号も自身の役割がある。声に自信がある冒険者達に、足を攻撃した直後に撃つように伝える。こちらにも緊張しているようだが、モヒカンの冒険者が皆を盛り

上げてくれるおかげで、向こうほど不安は少ない。

『3号、彼は冒険者じゃなく機織り職人なんだが、どうしてそんなところにいるんだ……?とにかく、爆裂魔法の後はキミたちの出番だ。頼んだよ……』

彼が冒険者ではなかったことにも衝撃だが、クマサンが何故か彼の職業を知っていることも衝撃である。会話を終える頃にはめぐみんが調子を戻したらしく、今度は2人同時に爆裂魔法の詠唱を

始める。あの爆裂魔法を2発も同時に撃ち込むなど、これから一生見られるか分からない光景だ。思わず手が止まりそうになった3号だが、気を取り直してメガホンレーザーの前に待機している冒

険者全員に構えるように伝え、3号も外壁の端に立ちハイパープレッサーを構える。

『エクスプロージョンッ!!』

『マァー……!!』

爆風だけでなく爆音までもが周囲を包む。一斉に声を出せとは言ったものの、皆同じような声を出す必要はなかったのでは、と3号はハイパープレッサーを放ちながら思った。一番威力を出せる発音のようだが、同じようにメガホンレーザー並みの声を持つ人物を思い出してしまった。彼女がいれば、デストロイヤーどころかシャケとの戦いも楽になったかもしれない。

爆裂魔法をまともに受けたデストロイヤーの足は粉々に破壊され、大きな音を立てながら地面を滑るようにして静止した。排出されていたインクは緑の中に青色が混じっているのを確認すると、

内部に居たシャケを討伐することにも成功したようだ。メガホンレーザーの爆音と爆裂魔法の爆風が止めば、今度は冒険者達の歓声が辺り一面から聞こえてくる。3号はクマサンに無事に終わった

ことを報告するため、スマホを取り出した時だった。

『もしもし3号、厄介なことになったぞ。デストロイヤーに搭乗していたシャケは、昨晚に部隊を2つに分けていたらしい。シャケも爆裂魔法を放つことができる回数を学習していたのだろうか……』

現在、デストロイヤー後方からオオモノを含むシャケの一軍がこちらに向かっている。おそらく、あれが最後に残ったシャケだろう……目視で確認できるかい?』

昨晚と違い暴走していないが、ザコシャケ以外にもカタパッド、コウモリ、バクダンといったオオモノシャケが遠くに見える。皆は勝利

に浮かれているため気付いていないが、このままではシャケの物量に押し負け、街にまで被害が及ぶ可能性がある。

メガホンレーザー部隊に攻撃を頼もうと思いついたのかと探してみれば、もう地上に降りてしまっているようだ。あちこちからこの戦いが

終わったら結婚するだとか、やったか!?!といったシンプルなもので、様々なありがちな台詞が飛び交っている。このままではいけないと、地上に飛び降りた3号。その直後、機械的な音声が冒

険者全てにとある事実を告げる。

『被害甚大につき、自爆機能を作動します……。乗組員は直ちに避難してください……。乗組員は……。』

『暴走を抑えていたシャケを全て倒したからか……。まずいことになったね。シャケは必死になって自爆の阻止を邪魔してくるだろう。爆裂魔法を撃ってしまった今、この街、いやワタシたちが生き残るには、シャケを全て討伐し、デストロイヤーの自爆を阻止しなくては……。』

3号を含めた全員が外壁を降り地上に居る今、デストロイヤーの背後から迫るシャケの存在を知るのは3号だけだ。冒険者たちはパニックになり、3号がシャケが来ていると伝えたとしても聞く耳

をもたないだろう。非常事態でも冷静でいられそうな人物を想像した結果、カズマの顔が思い浮かんだ3号は、急いで通話を開始する。『3号か……。何だっ!?またシャケの群れがアクセルに来てるのかよ!聞こえてただろうけど、こっちもデストロイヤーが自爆しそうで大変なんだよ……。おいダクネス!避難するぞ!』

地上の冒険者はアクセルへと逃げ出しているが、デストロイヤーの爆発は街ごと吹き飛ばす可能性が高い。まだ打つ手が決まったわけではないが、3号は急いでインクの道を作り、カズマと合流

するが、ダクネスがデストロイヤーへと突撃していく。

『カズマ君、キミのスマホをメガホンレーザーと接続した。キミが冒険者たちに、戦える者はシャケの討伐をするように頼んで欲しい……。ワタシよりもキミの方が適任だろう!』

「俺かよ!?分かった、やるだけやってみるか……。『おいお前らあ!理由

は分からないけど、シャケの大群がこの街に迫ってきてる！デストロイヤーは俺達に任せて、シャケの方を頼む！」

……これ滅茶苦茶気持ちいいな。あれだ、人生で一度やってみたかったことみたいなのやっただこれ」

カズマの声が外壁に乗せられたメガホンレーザーから響き、内容が冒険者全員へと伝わっていく。街の入口に集まっている冒険者だけでなく、離れた場所に居る3号の耳にも届いたため、音響

機器としての役割も十分果たしているようだ。カズマもテンションが上がったのか口調が若干荒々しかったが、本人が満足そうに冒険者の士気も間違いなく上がっているため問題ないだろう。

勢いで言ってしまったのか、デストロイヤーは俺達に任せると発言したせいで、背後から迫る冒険者の一軍はデストロイヤーを避けるように突撃し、こちらに向かうシャケの大群と真っ向から勝負を仕掛けている。物量では負けていないが、肝心のデストロイヤーはどうするのだろうか。

「カズマさん、制御装置を見つけないとダメな気がしますが、自爆を止められるかもしれません」

「あんたが俺達に任せろだなんて言ったせいで、私たちが行かないやいけないじゃないの！どうしてくれるのよお！」

制御装置を見つけにカズマたちはデストロイヤーに乗り込むのだろう。3号は駆けつけたウイズとアクアにその場を任せると、デストロイヤーの奥、シャケとの戦闘が今にも起こりそうな地点に

向けて泳ぐ。物量で押し勝てても、オオモノシャケ相手では多少なりとも被害が出るかもしれない。

『スペシャルパウチを支給するよ。とりあえずスーパーチャクチを渡すから、敵地のど真ん中へと飛んでいけばいいんじゃないかな。……ついでに、キミの勇気を奮い立たせるような音楽を再生しておくよ…… 実を言うと、ワタシも大好きな曲なんだ』

一瞬でスペシャルゲージが満タンになり、少し離れた地点へとジャンプが可能になったのを確認した3号は、クマサンは本気で3号を敵地に送り込むつもりらしい。

3号は敵地に飛ぶ最中に、自身の勇気を奮い立たせる音楽を考え
た。様々な音楽が思い浮かぶが、3号が最も強く印象にのこった曲と
いえば、聞けば天国、歌えば極楽なあの楽曲だろう。

「なんだなんだ!?!急に馬鹿みたいな音量で何かが聞こえてくるんだが
!?!」

「なんとなくいい曲つてのは分かるけど何語か分かんねえ!何語だこ
れ!?!」

3号の調子は最高だった。全イカのDNAに組み込まれていると
言っても過言ではない、シオカラ節が流れているのだから当たり前だ
と思っっている3号だったが、スーパーチャクチを敵地の中心で

炸裂させた後、冒険者の反応を見て驚愕する。イカからすれば歌詞
もよくできているのだが、人間には何語か分からないうえ、そもそも
シオカラ節を知らないらしい。

これが種族の差か、と思う間もなく2つ目のスペシャルパウチが支
給される。中身は同じくスーパーチャクチ、これで大方のシャケを討
伐してしまう算段だろう。

「次々と戦場に降ってくるイカ……まるで青い流れ星のようだな。俺
は最初から知ってたぜ、お前の中の輝きを……!?!」

モヒカンの人が戦場の様子を見て呟く。スペシャルパウチの暴力
で次々と迫るザコシャケを討伐する3号と、何語か分からないが気分
を上げる楽曲のおかげで冒険者たちの気分は最高潮に達し、3

号も同じような感覚を味わっていた。全員が1つの目的のため、片
方の勢力と戦う。さながらフェスのようだ。3号は考えながら、今度
はジェットパックで空中へと飛び上がり、空からシャケに向

けて射撃する。こちらは既にシャケとの戦いでは無くお祭りのよ
うな状況になっているが、アクセルの街が危機的状況にあることを忘
れてはならない。

『3号、そっちは順調か?急に音楽が流れて驚いたけど、多分3号の世
界の音楽なんだろうな。俺は一応……説明すると長くなるから簡単
に言うけど、無事に暴走している原因は何とかなったよ。あ

とは脱出するだけ……うわああ!ごめん3号、切るぞ!』

カズマから突然電話が掛かってきたものの、何かがあつたのかすぐに切られてしまった。自爆する原因は取り除いたらしいが、きつと新たな問題が出てきたのだろう。こちらの方は問題無くシャ

ケの討伐は進んでいるが、数人の冒険者をあちらに送った方がいいかもしれない。

オオモノシヤケをスペシャルウエポンや魔法の力で討伐し、残ったのは圧倒的な数のザコシヤケのみ。何処から湧いてくるのか、最初よりも数が増えていのように感じる。

『3号、街の魔法使いを数人こっちに呼んでくれないか!?めぐみんの爆裂魔法で全部吹き飛ばせばそのシヤケも何とかなると思うから、魔力がありそうな冒険者をどんどん送ってくれ!』

鍵は3度目の爆裂魔法。3号はカモンシグナルで冒険者を集め、徐々に戦線を下げ、デストロイヤーに近づけていく。魔法が扱える冒険者はすぐに下がってカズマと合流するように指示し、前線を食い止める冒険者にも、爆裂魔法で全て倒すことを知らせる。

冒険者たちでこつた返す状況になっているが、3号はどうか魔法使いを送ることができた。最終的に3号も来て欲しいと頼まれたため、戦況を見計らってジャンプする予定だった。デストロイ

ヤーは高温の水を吹き出し、本体自体もかなり高い温度になっているように感じる。前線を下げつつ戦う冒険者の額にも汗が流れているのを見れば、本体に近づくことは得策ではないだろう。

『3号はそのままシヤケの相手を頼む!めぐみんも魔力が溜まってきたみたいだから冒険者にももうすぐ逃げるように伝えてくれ!』

『カズマも色んな女性冒険者に触ってニタニタしてるんじゃないわよ!とつとと済ませなさいよー!』

めぐみんが2度目の爆裂魔法を放てる理由は、他人から魔力を受け渡しているためらしい。3号も魔力を渡す予定になっていたものの、カズマによるセクハラを女性陣に疑われた結果、魔力のやり

取りに時間がかかっていたようだ。

これ以上前線を下げれば火傷しかねないと判断した3号は、現在戦っている冒険者全員に一気に後ろに下がるようにカモンシグナル

で指示を出す。3号の知らせを受けた冒険者全てが走り出し、転んだ者を助けながら全員がカズマ達の後ろに立った時、めぐみんの最大火力の爆裂魔法が炸裂する。

「目の前にはあの機動要塞に、街を滅ぼしにきたシャケの軍団……相手にとつて不足なし！この街の魔法使いほぼ全員から受け取った魔力があれば、過去最大級の爆裂魔法が放てそうです！いきま

すよ……『エクスプロージョンツツ!!』

めぐみんの掛け声に合わせて、街の冒険者も同時に叫ぶ。これまでと比較にならない大爆発は、デストロイヤーの周囲にいたシャケ全てを消し飛ばし、そこに存在していた全てを吹き飛ばす。余り

の爆風に街まで吹き飛びそうになるが、3号はその瞬間をはつきりと見届けることができた。

アクセルに迫る危機全てと、3号のこの世界に居る理由がすべて無くなった瞬間を、自身の目ではつきりと確認したのだった。

「嘘だろ!?!……いや、そうだよな。シャケを全部倒したら帰るって言ってたもんな」

「まだまだこれからだと思ってたけど、時間が経つにつて早いわねー」
機動要塞デストロイヤーは跡形もなく碎け散り、シャケの目撃情報もめつきり無くなった。全ての戦力を投げアクセル陥落を企んだシャケの計画は失敗し、冒険者の勝利に終わったのだった。

3号は既に荷物をスーツケースに纏め、帰る準備を終えている。クマサンが言うには、行きと同じ方法で帰ることが出来るそうなので、まずはエリスの居た地点にジャンプしなくてはいけないらしい。

3号が自分のスマホを確認すると、謎の地点が確かに追加されている。

『天界に送るには、キミの感覚器官をかなり強化しなければならない……。そのために金イクラが必要になってね。行き来は難しいとはいえ、2度と会えなくなることは無いよ。まあ、ワタシとしては

てはキミが今回と同じ理由で来ないことを祈っているよ』

「またシャケが出てきたら大変だもんな……。そうだ！3号、記念に写真でも撮ろうぜ！通信は出来なくても、写真くらいは取れるだろう？」

この世界で出来た人間の友人。それを記録することが出来ると理解した3号は大いに喜び、カズマ達に全員に集まるように伝える。自撮りなど数年やっていない3号だが、最近のスマホのカメラ

は機能が多く、クマサンを含めた6人を取るとは造作もない。カズマとクマサン以外は何をするのか疑問に思っているが、せっかくの記念写真、できれば笑っていた方が嬉しい。

「それじゃ、俺が合図するから、それに合わせて笑うんだぞ！」

「む、難しいな……。笑えと言われて笑うことができるだろうか……。」「私がバツチリ笑わせてあげるから、ちよつとそのスマホっていうの貸しなさいよ！」

前々からスマホを使わせてもらわなかったせい、アクアが撮影係に立候補する。それを制止するカズマと、その様子を見て笑顔になっているダクネス、めぐみん、そして3号。何気ない日常

が、3号のスマホの中に記録されたのだった。

3号は帰ってきた。イカとタコ、そして様々な海洋生物が住むハイカラスクエアに帰ってきた。カズマたちと写真を撮った後、盛大にお別れ会が開催され、様々な人間と写真を撮ることができ

た。スーツケースの中身は行きと比べてそれほど変わっていないが、数多くの思い出を持って、3号は戻ってきたのだ。

懐かしさからか、気が抜けたようにその場に立ち尽くす3号。すると、丁度ニュースの時間だったのか、巨大なモニターにハイカラニュースが放送される。

『こんちゃー！ハイカラニュースの時間だよ！今のレギュラーマツチのステージは……。あっ！臨時ニュースだって！イイダ、読んで読んで！』

『はい！……。オオデンチナマズ、またまた謎の失踪?!』

『またかよ！まあ、前もいつの間にか戻ってきてたし、今回も何とかな
るっしょ！』

任務の次は任務、3号はそのニュースを聞き、すぐさまタコツボ
キャニオンへと向かう。少し長い出張を終えた3号の戦いは、元の世
界でも続いていくのだった。